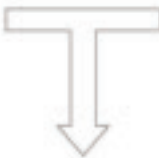


教育に新聞を

2021 年度 実践報告書

自分の書く課題を設定する



1週間分の新聞を自由に閲覧

気になる記事はweb検索
どうしん電子版トップページも配信

グループで「Jamboard」に課題になりそうなことを付箋で出し、カテゴリー分けを行う。

11月大 新聞 11月11日	11月大 新聞 11月12日	11月大 新聞 11月13日	11月大 新聞 11月14日	11月大 新聞 11月15日
11月大 新聞 11月16日	11月大 新聞 11月17日	11月大 新聞 11月18日	11月大 新聞 11月19日	11月大 新聞 11月20日

お気に入りの写真で新聞を作ろう①

ねらい：新聞記事の配置を考え、レイアウトを決める。

- ・題名欄を定規で線を引き、作成者の名前も書く。
- ・切り抜いた写真を、ぶんぶんコンクールの台紙に置き、レイアウトを考える。
- ・場所が決まったらのり付けする。



Newspaper in Education



NIE 実践報告 2021

北海道N I E推進協議会 編

2021年度「北海道NIE実践報告書」の発刊に寄せて

北海道NIE推進協議会
会長 菊池 安吉
(日本NIE学会理事)

NIE実践報告書「第25集」を刊行することになりました。

今年度の実践校36校(協会指定35校、独自校1校)の先生方が、全道各地において地域や学校の立地条件、児童・生徒・学生の実態などを考慮し、創意工夫したNIEの実践の成果と課題がまとめられています。報告書には、2020年から順次実施された学習指導要領の改訂の趣旨を踏まえて、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の取組が多数掲載されています。昨年度に引き続き新型コロナウイルス感染拡大を受けて、学級閉鎖や学年閉鎖、オンライン授業など数々の制約の下で学校行事や授業形態など多くの変更を余儀なくされました。学校の授業が再開後も教育課程の実施に当たり、年度当初の計画通りには実践を進めることができず悩む教育現場の姿が想像されます。その中でも、創意工夫を重ね「生きる力」をより具体化し、目指す資質・能力を整理し、新聞活用をしたNIEの実践が全道各地で行われました。

2021年度のNIE活動で特筆すべき事項は、何といたっても8月に開催された「第26回NIE全国大会札幌大会」です。19年ぶりに北海道での開催とあって、全国から参加を考えていた関係者の期待も大きかったのですが、新型コロナ感染状況を鑑みて開会式、基調講演、シンポジウムは札幌文化劇場 hitaru(ヒタル)からインターネットによりライブ配信、加えて25の公開授業、実践発表、特別分科会などはオンデマンド配信となりました。大会スローガンは、「新しい学びを創るNIE～家庭、教室、地域を結ぶ～」。

当初、現地開催方式を考えていたので、リアルに空気感を伴って公開授業を見ていただけないことを残念に思っていました。オンデマンド配信に変更したことによって、普段なかなか見ることのできない別の校種の授業の様子をじっくり見たり、全道各地からの実践発表を自分のペースで視聴することができ、思わぬ効果もありました。大会の成果と課題を今後の北海道のNIE実践に生かしていきたいと思います。

今回の実践報告の中にも、NIE全国大会のスローガンを意識し、「家庭・教室・地域を結ぶ」やNIEの実践を通して育てたい力を学校経営計画の中に位置づけた取組も増えてきました。別海町のように、月に一度の「新聞の日」を設定して町内の児童生徒全員が新聞に触れ、学びの土台づくりの取組もあります。また、小・中学校のつながりや地域との連携、高大連携探求活動の中で新聞を活用した実践も見られました。児童生徒会の委員会活動と連動したり、特別支援学級や高等支援学校でも実践も多くなってきました。実践の成果と課題を共有しながら今後のNIEの広がり期待します。

例年、北海道各地で開催されてきた「NIEセミナー」は、新型コロナウイルス感染拡大を受けて、開催が制限されました。オンライン開催により、なかなか現地に足を運ぶことができない参加者の交流ができたことと大学生の参加などもあり、例年とは違う光景が見られました。「NIEの種蒔き」を継続し、メディア・リテラシーを身につけさせ、批判的な思考を育て、新聞の持つ信頼性や一覧性のよさを改めて再確認したいと思います。

最後に「実践報告書」の発刊に当たったNIE事務局をはじめ、NIE実践校の先生方、新聞関係者の皆さんに大変お世話になりましたことを報告しお礼申し上げます。

目 次

巻頭言	2021年度「北海道NIE実践報告書」の発刊に寄せて	3
	北海道NIE推進協議会 会長 菊池 安吉（日本NIE学会理事）	

日本新聞協会認定・NIE実践指定校

小 学 校

● 「学びと日常生活を結びつけ、自ら課題を発見する ～進んで学ぶ子どもの育成に向けて」	8
芦別市立上芦別小学校（新規校）	中西 亜美、芳賀 麻理、澤田 菜央
● 「「一人で読む」から「みんなと読む・伝える」へ」	12
別海町立中西別小学校（新規校）	本間 智子
● 「新聞で学んだことを自分に生かし、書く力を高める」	16
札幌市立桑園小学校（新規校）	夏井 彩
● 「新聞を通して自己の生き方を深める道徳の学習」	20
札幌市立栄南小学校（新規校）	上野 裕子
● 「グランドデザインからスタートするNIE ～家庭・教室・地域を結ぶNIEをめざして～」	24
室蘭市立八丁平小学校（継続校2年目）	上野 真和
● 「NIE実践指定校2年目の取組」	28
旭川市立末広北小学校（継続校2年目）	穂刈 彩花
● 「新聞作成による自分の学びの視覚化」	32
札幌市立伏見小学校（継続校2年目）	秋元 来舞
● 「全校でのNIE（3年目の取組）」	36
岩見沢市立中央小学校（継続校3年目）	富樫 いずみ
● 「Let's Try!NIE ～中学年でのNIE活動～」	40
札幌市立手稲宮丘小学校（継続校3年目）	志村 知子
● 「国語学力形成を保障するNIE実践を考える」	44
夕張市立ゆうばり小学校（継続4年目）	富樫 忠浩
● 「多種多様な新聞活用～新聞を身近なものに～」	48
登別市立富岸小学校（継続校5年目）	貝澤 佑磨

中 学 校

- 「日本の産業遺産を築いた 日本遺産『炭鉄港』」 52
美唄市立美唄中学校（新規校） 鹿糠 昌弘
- 「新聞から情報を読み取る力をつけよう」 56
札幌市立北辰中学校（新規校） 面 由佳
- 「新聞に親しみ、教室と社会をつなぐNIE
～授業での活用と読解力向上を軸にした1年目の取組～」 60
札幌市立あやめ野中学校（新規校） 近野 秀樹
- 「「問い」を発する子どもの育成を目指して」 64
札幌市立真駒内中学校（新規校） 山田 耕平
- 「学校が目指す生徒像の実現に向けた新聞活用」 68
平取町立平取中学校（新規校） 金丸 剛輝
- 「「ものの見方・考え方を広げる」新聞活用の実践
～言語活動を活性化させる新聞活用の方策を探る～」 72
浦幌町立上浦幌中学校（新規校） 中村 宏喜
- 「新聞記事を読んで社会への関心を高めよう」 76
函館市立銭亀沢中学校（新規校） 平沼 和彦
- 「特別支援学級におけるNIE活動」 80
札幌市立藤野中学校（継続校2年目） 三上 毅朗
- 「学校教育におけるSDGs（持続可能な開発目標）実現に向けた新聞の活用
～生徒が主体的に新聞を活用し、SDGsの17の目標に迫る」 84
札幌市立もみじ台中学校（継続校2年目） 佐藤 尋之
- 「新聞が身近にある日常を感じ、
「読む力」や「社会を知り、考え、つながる力」を育てる」 88
むかわ町立穂別中学校（継続校2年目）
小林 潤平、タケオ葉々子、佐々木祐哉、
片岡日菜子、北村 拓海、日下 剛
- 「震災の記憶を地域の方と共に刻む防災学習
～新聞を活用した防災教育について～」 92
むかわ町立鵲川中学校（継続校3年目） 片岡 鉄也
- 「社会の出来事に興味・関心を持ち、新聞記事を読み取る力をつけよう」 96
札幌市立新川中学校（継続校3年目） 永野亜也子
- 「義務教育学校開校につなげるNIE活動」 100
富良野市立樹海中学校（継続校3年目） 杉本 仁
- 「中学校社会科で新聞を活用した実践」 104
音更町立緑南中学校（継続校5年目） 掛水 成幸
- 「「小樽の未来をつくる北陵生の育成」に取り組むNIEについて」 108
小樽市立北陵中学校（継続校5年目） 野里 岳司

高等学校

- 「倫理の授業に新聞記事を教材として活用する取り組み
～現在のキリスト教とLGBTを題材に～」 112
北海道釧路東高等学校（新規校） 山岸 皇
- 「学校生活に新聞を取り入れる」 116
星槎国際高等学校旭川（新規校） 加藤 兼司
- 「新聞を読む、活かす。」 120
北海道富良野高等学校（新規校） 北村 智裕、清野 俊也、石川 佳奈
- 「認め合う集団づくりにつながった新聞活用の一例」 124
北海道岩見沢高等養護学校（継続校2年目） 曳田 和樹、檜山 健
- 「新聞を活用した学びの実践
～朝のSHRでの活用と高大連携探究活動における取り組み～」 128
北海道科学大学高等学校（継続校2年目） 山下 卓
- 「新聞を身近に感じる環境作り2」 132
北海道野幌高等学校（継続校2年目）
鈴木 幸恵、赤松 朋美、関原 文明、伊藤 慎也
- 「『日常的・継続的』な新聞活用の取組の実践」 136
北海道札幌手稲高等学校（継続校3年目） 渡邊 昭博、嶋崎 俊樹、水谷 省一
- 「新聞記事を利用した授業づくり」 140
星槎国際高等学校帯広（継続校3年目） 高橋 知行
- 「課題解決型学習（PBL）におけるNIE実践」「金融学習とNIE 金融リテラシー」 144
札幌新陽高等学校（継続校4年目） 細川 凌平 高石 大道
- 「多面的に考える力を磨く」 148
北海道函館西高等学校（継続校6年目） 小牧陽二郎

北海道NIE推進協議会認定・NIE実践指定校

特別支援学校

- 「新聞に親しみ、活用する」 152
市立札幌みなみの杜高等支援学校（新規校） 北山 亮 他2学年担当教諭

聾学校

- 「新聞に慣れ親しむための初めの一步」 156
北海道旭川聾学校（新規校） 宮町 悦信

編集後記

- 北海道NIE推進協議会 NIEコーディネーター 上村 尚生 160

N I E

実践報告

2021

2021年度 NIE 実践報告

学びと日常生活を結びつけ、自ら課題を発見する～進んで学ぶ子どもの育成に向けて

芦別市立上芦別小学校 教諭 中西 亜美、芳賀 麻理、澤田 菜央

1. はじめに

本校は、昭和 61 年に旧上芦別小学校と東芦別小学校が統合し、芦別市立上芦別小学校として開校した。全校児童数は 76 名で、校下を流れる空知川と国道 38 号線の間に位置し、自然豊かな地域にある学校である。

昨年度、5 年生の国語で新聞について学び、「一緒に読もう！新聞コンクール」に応募したことがきっかけで、今年度から NIE 実践校の認定を受けることとなった。子どもたちの情報源は主にインターネットであり、新聞を定期購読している家庭は少ない。そのような中で、昨年度から継続して新聞を活用した『情報ノート作り』に取り組んできたことにより、情報に関する視野が広がるとともに、社会への関心が高まったと感じている。

様々な情報の中から、自分にとって有益なものを選び取り、考えをまとめる力を育むためにはどうすればよいのか考えながら実践を行ってきた。

2. 実践報告

(1) 授業での新聞活用

6 年生の国語科に『説得力のある文章を書こう』という単元がある。その中の「自分の考えを発信しよう」という教材では、新聞の投書欄を例に、自分の意見を書く活動を行った。5 年生から続けて新聞を読む取り組みを行っていたので、新聞の読者投稿欄に応募することを動機付けとし、意欲をもって意見文に取り組むことができるよう、授業の導入で取り上げた。また、新聞に載っている投稿から、自分にとって説得力があると感じた文章を選ぶことで、自分の目指す意見文の形を明確にし、文章を書く際には他者を意識し、文章構成や言葉の使い方などに注目して推敲できるよう促した。

ア 反省

取り組みの反省としては、テーマを自由にしていたため、選んだ記事の内容に影響されてしまう児童やテーマが決まらない児童が多く出てしまった。実際に投書することを伝えたことにより、意欲が低下してしまった児童もいた。また、新聞の中のどの表現を生かしたかが不明確となり、意見文ではなく感想文になってしまう児童も多く見られた。

イ NIE の研修会で学んだこと

胆振で行われたオンライン研修会等を通して、多くの改善点が見えてきた。次年度以降、以下のことを生かしてよりよい授業づくりを行っていきたい。

- ・テーマは一定の制約がある中から選ぶようにすること
- ・意見文とは何かをしっかりと押さえること
- ・説得力をもたせるために必要なことを示すこと
- ・読者投稿欄だけでなく社説などでも良い表現を取り上げること

(2) 新聞を身近にする取り組み

玄関ホールに新聞を掲示。
毎日児童が興味をもちそうな記事を選んで目を引くようにしている。
オリンピック開催時は日本選手の活躍が書かれた記事を切り抜いて掲示した。





6年生教室と5年生教室の間のスペースに国語や社会等で学習したことに関わる記事や興味をもってほしい記事を切り抜いて掲示した。

児童に新聞を渡して、興味のある記事を選んでもらい掲示したこともあった。



（３）朝の活動を利用して

昨年度から「情報ノート」作りにも取り組んでいる。そのため、社会の動きに関心をもつ児童が増え、朝の会でSDGsや脱炭素、核のゴミ問題、選挙など、様々な話題が出てくるようになった。家庭学習ではインターネットや本を利用する児童もいたため、朝の活動を利用して全員同じ新聞記事を読み、感想交流を行った。自分の意見だけでなく、友達の意見も聞くことで知見を広げることができた。出た意見は学級通信で知らせ、家庭における話題に取り上げてもらえるよう呼びかけた。

新聞を読んで

○「広がる『ポジティブ』」北海道新聞

「背が低くても、太っていても、障害があってもいい」など用紙の多様性を受け入れる考え方「ボディポジティブ」が国内外で広がっているという内容の記事を読みました。

■

・今は自分に自信が持てない人もいるけど、このようなボディポジティブのほかにも、同じような記事を出せばいいと思います。

・たくさんの種類の「バービー（人形）」で小さい子どもにも教えられたりするので良いのかなと思う。

・周りを気にしなくていい。SNSで広げる活動。ポジティブに考える。

その人にしかできないことがあるはず。個性を大切に！

・最初は差別（の言葉）かなと思ったけど、全然差別じゃなかったのだ。

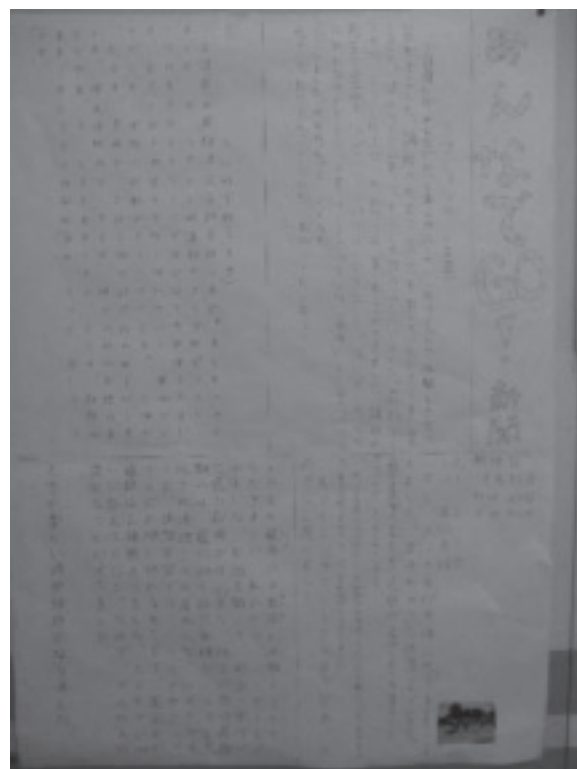
ボディポジティブで生きやすくなるのかな。自分のとくちょうをほこりに。



(3) 新聞づくり



国語や社会, 総合的な学習の時間の
まとめとして新聞作りを行っている。
4年生は今年度配置された一人1台
のタブレット端末を使って作成した。
6年生は修学旅行のまとめで大判
の模造紙を使って新聞作りを行った。



3. おわりに

NIE 実践指定校となり, 新聞を活用することで, 教師自身が新聞を読んで社会に関心を持ち, 知見を広げることができた。そのため, 授業の中でも「先日の新聞に載っていたけれど・・・」と関連する話題で知識の上乗せをすることができるようになった。教師が多くの情報をもっていることで, 子どもたちの情報も増やすことができることを改めて実感できたことは大きな収穫であった。今後も教師自らメディアリテラシーを高め, 子どもたちに伝えていきたい。

「一人で読む」から「みんなと読む・伝える」へ

別海町立中西別小学校 教諭 本間 智子

1. はじめに

本校は、道東の酪農地帯にある児童数33名、全学級複式の小規模校である。地域には、幼稚園・小学校・中学校があり、幼小中12年間を見通した教育活動の充実が図られている。また、自然に恵まれ、学校近郊に流れる然内川の研究や敷地内に現れる野鳥・エゾリスの観察など、特色を生かした教育活動を行っている。別海町では、令和2年度より月に一度「別海町新聞の日」を設定し、町内の全児童生徒に2種類の新聞を配布し、NIEを通して学びの土台作りを推進している。本校では、この事業を効果的に活用しながら、新聞を活用した教育活動に取り組んでいる。以下に、本校のNIE実践指定校1年目の実践内容を紹介する。

2. 実践の概要

(1) 一人で読む

本校では、月に一度、児童一人一人に『北海道新聞』と『道新こども新聞 まなぶん』が配付される『別海町新聞の日』を、校内NIE実践日として位置づけ、全児童でNIEに取り組んでいる。

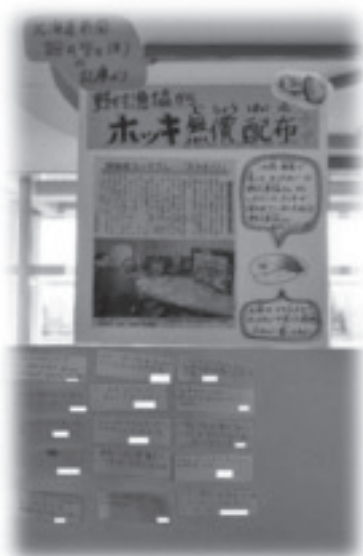
今年度の前半は、子ども達が新聞に親しむことを目標に、ワークシートなどを活用した一人読みを行った。書き込まれた一人読みワークシートは廊下に掲示し、いつでも児童が他者の意見に触れられるようにした。また、学校のことが掲載された記事を廊下に掲示したり、毎日の新聞を閲覧台に並べたり、日常的に新聞に親しめる環境整備も行った。



北海道新聞 2021/10/20

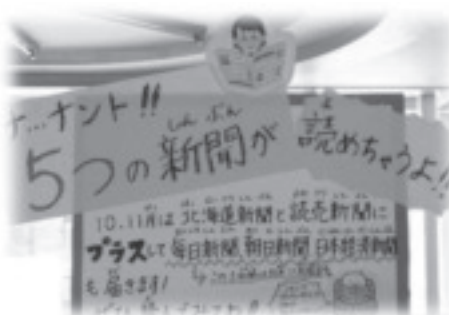


NIEワークシートコーナー



北海道新聞 2021/10/7

子ども達の学習や生活に関連のある記事は、タイムリーに注目できるように紹介や掲示の仕方を工夫している。給食で出されたホッキのことを紹介する記事が掲載された日（北海道新聞 2021/10/7）にこの記事を掲示し、感想を児童に募った。無償で提供されたことに対する感謝の気持ち、歯ごたえや味に関することなどの児童の感想を、ホッキの提供先である野付漁協に伝えた。新聞で読んだ思ったことを他者へ伝えたいという気運が高まるきっかけとなった。



（２）みんなと読む

『別海町新聞の日』の取組を継続していく中で、一人読みと児童同士が交流する場面の一体化が見られるようになってきた。前述の一人読みワークシートの掲示板を見ながら、「私と同じ記事を選んでいるよ。」「（見出しを読んで）これは、どんなニュースだったのかな?」と興味をもつ児童も増えてきた。そこで、次のステージとして、「まわし読み新聞」に全校で取り組むこととした。



ひとり読みと交流が一体化

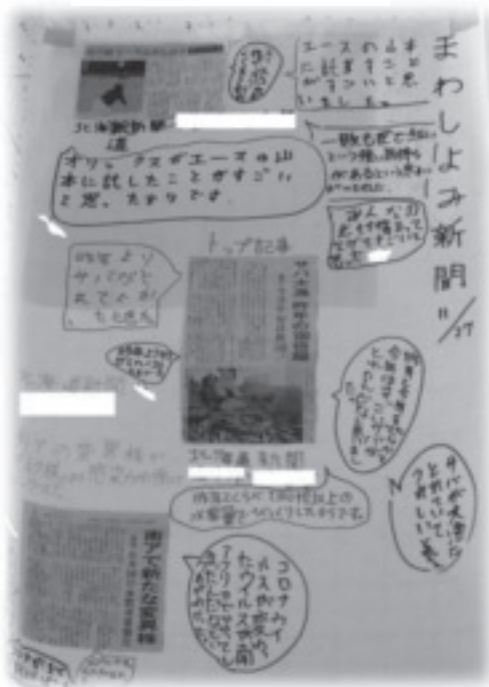
①まわし読み新聞

他者と意見をつなぐことを目的に、『別海町新聞の日』に全校で『まわし読み新聞』に取り組んだ。

右の『まわし読み新聞』の事例では、「総力戦 エース山本に託す【オリックス】」という同じ記事に対し、「すごい」「一敗もできない強い思い」「みんなの気持ちを背負っている」と三者三様の意見を書き込んでいる。記事を選ぶことに慣れていた児童達であったが、他者と記事を選んだ理由を交流したり、感想を伝え合ったり、他者とつながる楽しさを味わうことができた。



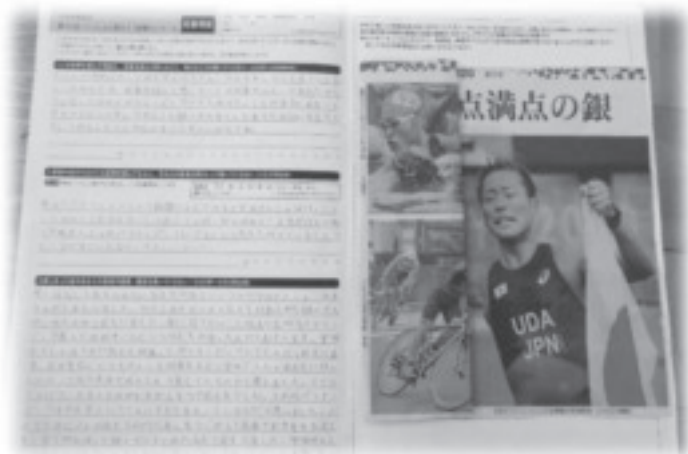
「まわし読み新聞」作成過程で対話的に学び合う



北海道新聞 2021/11/27 を活用

② 第12回 みんなで読もう 新聞コンクール

3・4年複式学級では『みんなで読もう 新聞コンクール』に取り組んだ。児童9名中、8名がスポーツ少年団に所属しており、スポーツに興味のある児童が多い。そこで、オリンピック・パラリンピック開催中の新聞から、児童が「特に心に残った記事」を選び、感想・意見を交流した。



北海道新聞 2021/8/28 を活用



選んだ新聞記事で感動した場面を語り合う



家族の感想や意見を友達や先生と伝え合い、考えを深め、新しい見方に気づく児童

コンクール応募を通して、家族と新聞記事について話す時間が生まれた。児童だけでなく、家族も新聞記事について興味をもつきっかけとなった。児童は、家族の意見を聞いて、さらに自分の意見を深め、新たな視点で記事を読み直すことができた。

(3) 新聞で情報を伝えよう

2年生は生活科「えがおのひみつ たんけんたい」の学習で、地域の人と施設を訪ね探究活動を重ねた。活動を通して、地域の人仕事の工夫や、働く人の思いや願い等、たくさんの情報に出会うことができた。そこで、情報を新聞にまとめ、学校の友達や家族、地域の人に伝えることにした。新聞を作成する上で、自分が伝えたいことに合わせて情報を選ぶことに工夫をした。児童は、施設を訪ねてたくさんの写真を撮影してきた。自分が伝えたいことに合わせ、写真を選び、メモを作った。写真とメモを大きな模造紙に配置しながら、レイアウトを考えた。

学習発表会で新聞を表現ツールにして発表すると、質問や感想などの反響があり、伝える楽しさを実感する学習になった。また、児童はこの学習を通して、たくさんの情報を整理してわかりやすく伝えることができる新聞の機能性を知り、3年生の国語科の学習につなげることもできた。



情報を整理し、一番伝えたいことを選ぶ



活動を通して知ったこと、伝えたいことを新聞にまとめ、友達や家族、地域の人に発表

4. 成果と課題

①アンケート結果

ここで、学校評価アンケートでの回答結果を紹介したい。

	R3 年度後期	R3 年度前期
(児童)	3. 8	3. 4
『本や新聞を読んだり、活用したりしていますか。』 (保護者)	2. 7	2. 8
(教職員)	3. 7	3. 1

※4 そう思う 3 少し思う 2 あまり思わない 1 思わない の合計得点を平均し、数値化している。

アンケート結果から、後期は前期に比べ、児童と教職員の数値の上昇が見られる。しかし、保護者の数値を見ると、数値の上昇は見られない。

②成果

児童と教師の数値上昇は、『別海新聞の日』、『まわし読み新聞』、『みんなで読もう 新聞コンクール』等の取り組みによるものだと考える。また、『別海新聞の日』には、児童全員に新聞が配布され、同じ記事を児童同士が共有できる環境が整った。また、校内でNIEの日を設定し組織的に取り組んだこと、掲示板等で成果物を共有したことにより、教師は各自、新聞記事を読む時間を設定したり、学習に関連のある記事を見つけて授業で活用したり、取り組みへの意識を高めることができた。結果、新聞に対する児童の関心の高まりが見られ、主体的な取り組みにつながっていった。新型コロナウイルス感染症の広がりにより、予定していた縦割り班による『まわし読み新聞』ができないこともあったが、学級単位では取り組むことができ、同じ記事に対する他者の意見に触れて、記事を多面的にとらえるきっかけとなった。次年度も、継続して「ひとり読み」と『まわし読み新聞』等の「みんなと読む」活動を行っていきたい。また、児童が効果的に情報を伝えるツールとしても、次年度も新聞を活用していく。



ふるさとのすごいところを発見



友達と新聞トークを楽しむ



新聞を情報発信ツールに活用

③課題

保護者のアンケート結果からは、校内におけるNIEに関する取組とその成果が、保護者に十分に伝わっていないことが読み取れ、新聞を購読していない家庭もあることから取り組みの工夫が必要である。

そこで次年度は、『みんなで読もう 新聞コンクール』等の家庭と協力

して新聞を読む取り組みや、保護者や地域の人も交えた「まわし読み新聞」等、家庭・地域と連携した取り組みや方法を工夫し、NIEを通して学ぶ成果や成長する児童の姿、学校の取り組みへの家庭の理解と共感を高めていきたい。また、学校で購読している新聞を家庭学習で活用する等、より柔軟に新聞活用するNIEに取り組むことで、豊かな学びにつながる土台作りを進めていきたい。

新聞で学んだことを自分に生かし、書く力を高める

札幌市立桑園小学校 教諭 夏井 彩

1. 単元名

資料を用いた文章の効果を考え、それをいかして書こう『固有種が教えてくれること』『グラフや表を用いて書こう』

2. 単元（題材）について

本単元は、「読むこと」の説明的な文章教材『固有種が教えてくれること』と、「書くこと」の教材『グラフや表を用いて書こう』で構成される複合単元である。単元構成は、子どもの困り感を大切にし、「書くこと」のゴールを見据えて、「読むこと」で筆者の主張の仕方や書きぶりに気付かせる。そして、「書くこと」に生かしながら進めていけるように考えた。

単元の始めには、子どもたちに人気のある『ざんねんないきもの事典』の筆者が“今泉忠明さん”であることを伝え、今泉さんが書いた『固有種が教えてくれること』を読みたい気持ちを高める。読んだ後は、今泉さんが主張している「環境をできる限り残していくことが私たちの責任であること」を自分ごととして考えられるように、札幌市の小学4年生が「地球を守ろう」と呼び掛けている新聞記事を提示する。「自分たちにも関わる大切な問題だから、環境を守るために何ができるか考えていこう」という気持ちをもつことをねらう。そこで、「桑園SDGsポスター（資料付きの意見文）」を作って、全校児童（高学年）や保護者の方に環境を守るための呼びかけをしていこう」と本単元のゴールを共有する。

完成したポスターは、全校児童や保護者が見ることができる場所に掲示する。一方向での発信で終わるのではなく、双方向のやりとりができるようにするために、読んだ人が感想を書ける場も設置する。

ポスターを作って終わりではなく、自分たちの活動が、全校に広がっていることを実感できるようにしたい。

この単元を選んだ理由は、伝えることの楽しさを感じてもらいたいと思ったからである。本学級の児童は、書くことが好きな子が多く、自分の考えを明確に伝える力が更に伸びることで、より伝える楽しさを実感できると考えた。書く力を高めて、自分の考えを進んで発信していくことができるようになってほしいと考える。

3. これまでのNIEの取組

4月に出会った5年生の子どもたちと、新聞に親しむことから始めた。子どもたちが興味をもちそうな記事を教室に掲示したり、朝の会で授業とつながりのある記事を配付し、感想を交流したりしてきた。

国語『和語・漢語・外来語』の学習で、新聞から和語・漢語・外来語を探す活動を行った際には、意欲的に学ぶ姿が見られた。「新聞に漢語が多いのは、多くの情報を伝えるためだと思う。」など、新聞の特徴を生かして学びを深めることができた。また、日々の生活の中で子どもたちに指導したいことがあったとき、似たような状況にある新聞記事を配付し、話し合う活動を行うこともあった。自分たちに起きていることを客観的な立場から捉えることで、様々な見方や考え方をもちことができると考える。新聞から学んだことを自分の学びや生き方へと繋げていく姿が見られている。

4. 単元目標

- ・情報と情報との関係付けのしかた、図などによる語句と語句との関係の表し方を理解し使うことができる。(知識・技能)
- ・引用したり、図表やグラフなどを用いたりして、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫することができる。(思考・判断・表現)
- ・目的に応じて、文章と図表などを結び付けるなどして必要な情報を見つけたり、論の進め方について考えたりすることができる。(思考・判断・表現)
- ・粘り強く文章と図表などを結び付けて読み、学習の見通しをもって、読み取った筆者の工夫を生かして、統計資料を用いた意見文を書こうとする態度を養う。(主体的に学習に取り組む態度)

5. 単元構成（11時間扱い）

	学 習 活 動	指導上の留意点
1	みんなが読んでいた「さんねんないきもの事典」の作者は、今泉さんなんだ。 今泉さんの書いた文章を読んでみたい。 「環境をできる限り残していくことが責任」と言っていたね。 何か自分たちにできることはないかな。	・今泉さんの本を日頃から教室に置いておき、興味をもたせておく。
2	桑園 SDGs ポスターを作って、全校のみんなやお家の人に呼びかけよう。 全校のみんなに何を伝えようかな。 できるだけ残さず食べよう。 プラスチックごみを減らそう。	・環境問題についての新聞を事前に用意しておき、主張を決める際の資料として使えるようにしておく。
3	主張は決まったけど、どんな資料を選んだらいいのかな。 今泉さんはどんな資料を使って主張を伝えようとしているのかな。 今泉さんの資料の中で主張が一番伝わってきたのはどの資料かな。	・今泉さんの資料を1つ1つ丁寧に読み取り、本文と結び付けて資料の効果を考えていく。
4	資料1は、図と表を使うことで、似たような条件にある日本とイギリスが比較しやすいから、日本には固有種が多いことがより伝わってくるんだね。 資料2は、年表風の図を使うことで、日本列島の地形の変化が分かりやすくなるから、日本に固有種が生き残った理由がよく伝わってくるんだね。 資料3と4は、色付きの地図を使うことで、日本の気温と標高の特徴が見て分かるから、固有種が住みやすい環境であることが伝わってくるんだね。	・今泉さんの資料から学んだことを生かして、自分の資料を選ぶ活動を3～5時間目の終盤に毎時間取り、資料を集めていく。
5	資料5は、写真を使うことで、見たことのない動物でもすぐ分かるから、絶滅してしまった動物がどんな動物だったのがより伝わってくるんだね。 資料6と7は、2つのグラフを使うことで、天然林とニホンカモシカの変化と関係性が分かるから、環境と動物が密接に繋がっていることがより伝わってくるんだね。 今泉さんは、図や表、グラフ、写真の資料を使って、主張が伝わりやすくなるようにしていたんだね。	・子どもたちの困り感を共有し、集めた資料からどれを使ったらいいのかを考えることに焦点化していく。
6	自分の主張を伝えるための資料をもう少し探さなきゃ。 資料は集まってきたけど、結局どの資料を使ったらいいのかな。	
7	自分の主張を伝えるためには、どんな資料を選んだらいいのかな？ 資料のない新聞記事を読んで、主張に合った資料を選ぶ練習をしてみよう。 グラフは地上と地下を比較することもできるからいい。 写真はインパクトあるけど、主張と繋がるかな。 資料のよさ確かめて、主張に合う資料を選ぶといいんだね。 学んだことを活かして、自分の資料を選んでみよう。	・新聞記事から学んだことを生かして、桑園 SDGs ポスターをよりよくしていけるように、友達ともアドバイスし合えるようにする。
8	フードロスが増えているグラフにしよう。 プラごみが海に流れている写真がインパクトあるな。	
9	自分の主張が伝わるように、文章を完成させよう。	
10	完成した桑園 SDGs ポスターを早く掲示板に貼りたいな。	
11	今泉さんが言っていたことを全校に広めて、これからも SDGs を意識して生活していきたいな。	

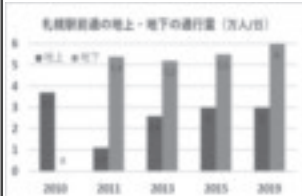
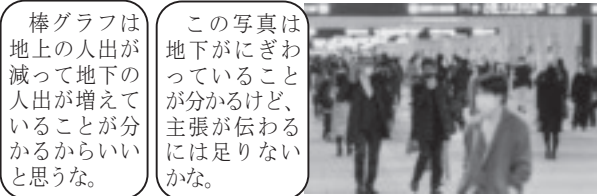
学びを生かして、資料を探す。

6. 本時の展開

①本時の目標

- ・新聞記事の資料を選ぶ活動を通して、主張に合った資料の選び方を学び、明確な意図をもって自分の主張に合った資料を選ぼうとすることができる。（思考・判断・表現C（1）ウ）

②本時の展開（7/11時間目）

学 習 活 動	指導上の留意点
前時までに、今泉さんの文章から資料の効果を読み、自分の主張に関わる資料を集める活動を行ってきた。前時では、桑園SDGsポスター制作に関する困り感を共有している。 たくさん資料を集めたけど、どれがいいのか迷うな。主張が伝わるようにしたいな。 自分の主張を伝えるためには、どんな資料を選んだらよいのかな？ 資料のない新聞記事を読んで、主張に合った資料を選ぶ練習をしてみよう。 記者の主張は、「地下と地上が協力して、駅前の魅力を向上させてほしい」だと思う。 どの資料を選んだら、記者の主張がより伝わるのかな。  棒グラフは地上の人出が減って地下の人出が増えていることが分かるからいいと思うな。 この写真は地下がにぎわっていることが分かるけど、主張が伝わるには足りないかな。  この写真は地上の人が少ないことが分かるけど、これだけだと主張は伝わらないと思う。 チカホの図はどこに何があるのかが分かるけど、主張には繋がらないかな。 みんなはどの資料を選んだのかな。 グラフは変化を表せるし、地上と地下を比較することもできるから、地上との連携が大切と伝えたい記者の思いと重なっているからいいと思う。 写真は見ただけで分かるから、「すごい人だ」と思ってもらえると思う。2枚載せることで、比較することもできるから、主張に繋がると思うな。 図は地下歩の様子がすぐ見て分かるよさがあるけど、今回の主張とは合っていないからこの図は載せない方がいいと思う。 この記者は、どの資料を選んだのかな。 地下の盛り上がり一番伝えたかったんだね。 あんまり主張が伝わらないような気がする。 資料のよさを確認してから選ぶといいね。 主張が伝わるかを考えて選んだらいいんだね。 資料のよさを確かめて、主張に合う資料を選ぶといいんだね。 学んだことを活かして、自分の資料を選んでみよう。 みんなに食べ残しを減らすことを伝えたいから、食品のごみの量が多いことがパッと見て分かる円グラフの資料にしよう。 プラごみが生き物に与える悪影響を伝えたいから、動物の胃にプラごみが入って死んでしまったインパクトのある写真にしよう。 3枚まで絞れたけど、この中のどれを選んだら読み手に自分の主張が伝わるかな。迷うな。 選んだ資料に合わせて、文章も書き進めていきたいな。	・本時への焦点化された問いへとつなげるために、授業の初めに、前時で挙げられた、困り感を改めて共有する。 ・黒板にネームカードを貼り、みんなの選んだ資料を分かるようにすることで、交流への意欲に繋げる。 ・どんな資料を入れたらいいのか悩む児童がいる際には、主張に合わなさそうな資料の理由を考えることで、必要な資料の選び方に気付いていくようにする。 ・全体交流では、自分と友達の考えの相違点や共通点を見つけて、資料の選び方を学べるように、資料を選んだ理由と根拠になる部分を丁寧に聞き取る。 ・学びを生かすため、自分の主張にぴったりな資料を選び直す時間を設ける。資料を変えなかった子、変えた子、困っている子など、時間がある限り取り上げ、全体で1人1人の思いを共有し、学びを深めていく。

7. 評価について

- ・新聞記事の資料を選ぶ活動を通して、主張に合った資料の選び方を学び、明確な意図をもって自分の主張に合った資料を選ぼうとすることができたか。（思考・判断・表現C（1）ウ）

8. 実際の授業

子どもたちが「自分の主張を伝えるためには、どんな資料を選んだらよいのかな。」という問いをもち、授業が始まった。それを解決するために、以前『新聞を読もう』の学習で読んでいた新聞記事（記事の中で使われていた資料を隠しているもの）の主張に合った資料を選ぶ活動を行った。

資料は4枚の中から選び、「地下と地上の通行量が分かるグラフ」を選んだ子が多くいた。資料を組み合わせる良さに気付いた子もいた。どの資料を選んだらよいか意見を出し合っていくうちに、それぞれの資料のよさ（比較できる、変化が分かる、イメージしやすい、見てすぐ分かるなど）を改めて実感し、どんな資料が主張に合っているのかを深く考えることができた。新聞記事を書いた記者とのインタビューの様子を提示すると、子どもたちは記者が主張を大切にして、主張が伝わりやすい資料を選んでいたことに気付くことができた。新聞記事での学びが終わった後に、「自分の資料を選べそうだった人？」と聞くと、多くの手が挙がった。

最後に自分の資料を選ぶ時間を取り、決まった資料や迷っている資料を Chromebook のクラスルームに貼り付け、交流する時間を設けた。決まった子の資料をみんなで共有し、主張が伝わりやすいかどうかを考えることもできた。

9. 成果と課題

<成 果>

- ・新聞を使うことで、主張に合った資料の取捨選択能力を身に付け、子どもたちの桑園 SDGs ポスター作りへと生かされていた。
- ・新聞記事を書いた久保さんへのインタビューの様子を提示したことで、書き手が伝えたい思いを資料に込める大切さに子どもたちが気付くことができた。
- ・「読むこと」と「書くこと」を行き来しながら学習を進めていくことができた。

<課 題>

- ・資料を選んだ後に、自分の主張が伝わるかどうかという書き手の視点だけでなく、読み手にとっても分かりやすい資料になっているかどうかを考える時間を設けることで、より資料のよさに気付くことができたと考える。
- ・記者が選んだ資料には、「チカホを否定しない」という隠れた思いも込められていたから、記者の主張がより伝わる資料ではなかったように感じた子もいたかもしれない。インタビューの様子の伝え方を工夫する必要があった。

10. まとめ

新聞を使って学んだことで、「難しそうと思っていたけど資料を選べそう。」「主張に合うかどうかで選んだらいいと分かった。」など、子どもたちは学びを確かなものとし、自分の資料選びに生かすことができていた。新聞を活用するよさを改めて感じ、子どもの学びと新聞との親和性を考えて、今後も授業づくりを行っていきたい。

新聞を通して自己の生き方を深める道徳の学習

札幌市立栄南小学校 教諭 上野 裕子

1 はじめに

本校では、学校教育目標「未来を拓く、創造性豊かで主体的な人間の育成」のもと、「あったかい心で笑顔いっぱい 夢いっぱいの子どもを育てる学校」を重点に教育活動を進めている。19 学級、550 名の児童一人一人が、なりたい自分を思い描き、その実現に向けて挑戦や努力を積み重ねていくことができるよう、学習面・生活面の双方で教育的支援を施していくことを大切にしている。日常の授業研究を推進するにあたり、研究主題を「つながる！広がる！深まる！」とし、対話を通して深い学びを実現するために日々、授業改善を推進している。2019 年度より、研究の中心となる教科を道徳とし、教材や他者とつながり、様々な見方・考え方が広がることで多面的・多角的に考える力を養い、自己の生き方を深めていくことで研究主題の実現を目指している。



2 本校の取組と NIE

本校は今年度、札幌市が平成 28 年度から取り組んでいる「オリンピック・パラリンピック教育推進事業」の研究推進校となっている。4 年生の児童は、オリンピックミュージアムにて冬季オリンピックの競技をシミュレーターで体験したり、選手の講義を聞いたりする体験活動を行うこととなった。そこで、本校 4 年生の総合的な学習の時間の中で、オリパラ教育の体験活動と、オリパラについての調べ学習、パラリンピックを広め応援する発表活動を組み合わせた学習に取り組むことを計画に位置付けている。その調べ学習の一つとして、新聞記事を扱い、オリンピックやパラリンピック開催に関わる組織や人の働きを知ったり、選手の願いや思いに触れたりする活動を組み込んでいる。新聞というメディアを通してオリパラに関わる人に触れることで、オリパラに対する興味関心を引き出し、理解を深めることをねらっている。そこで、2021 年度 NIE 実践指定校制度に参加して新聞を購読し、日頃から新聞を手に取りやすい環境づくりを進めてきた。本学級の子どもたちは、日常の中で継続的に新聞に触れることができた。例えば、朝学習の時間に一人一台端末を用いて担任が紹介した新聞記事を読み、感想を交流した。



また、国語の時間に、新聞記事の写真の使われ方や見出しについて考え、グループで話合う活動に取り組んだ。特に、全国大会での公開授業にも関わるオリンピック・パラリンピックの記事については、

切り抜いて収集してスクラップブックを作り、いつでも手に取って集めた記事を読むことができるようにし、オリンピックやパラリンピックに関する興味を深める活動を続けてきた。

北海道新聞
2021.3.31



3 実践報告

【NIE 全国大会公開授業】小学校 特別の教科 道徳
主題名「目標に向かって」(A 希望と勇気, 努力と強い意志)
光村図書 4年生『より遠くへー谷真海』

3-1 授業について

本校の児童は、学びに対する主体性が高く、「勉強は楽しい」「分からないことも分かるようになるまで努力したい」と感じている児童が多いことが、児童アンケートから明らかになっている。しかし、友達の発表をよく聞こうとしている一方で、自分の考えを積極的に発表することに関しては自信がもてない様子も見られる。そこで今年度は、自分の思いや考えをのびのび表現できるようになることが、豊かな対話の実現につながるものと考え、表現の場を意図的に設定することを重点としている。本学級の児童は、自分の考えを友達に聞いてもらいたい、友達の意見を聞かせてほしいと対話に対する意欲の高い児童が多い。とりわけ道徳の時間においては、他者の意見を聞いて、自分にはなかった見方や考え方に触れることを楽しいと感じる姿が多く見られる。そこで、本授業においても、新聞記事を活用することで、児童の見方や考え方を刺激し、記事から感じたことを友達に伝えたいような場面をつくることできるとねらっている。

3-2 成果と課題

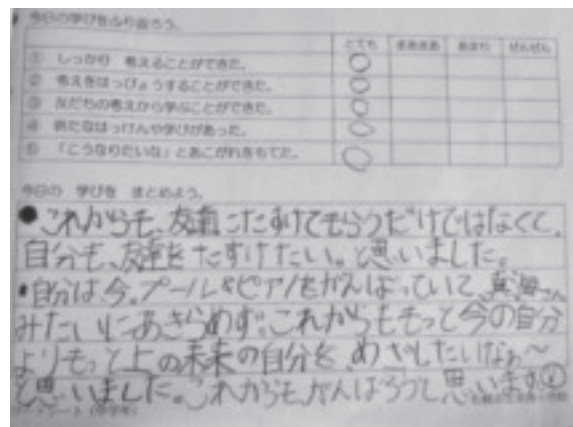
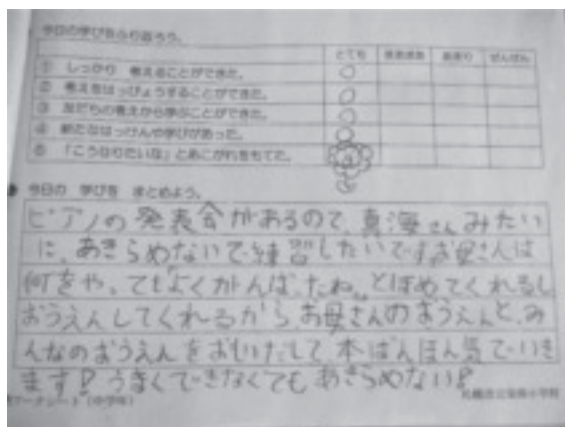
【成果】

スクラップブックを作成するために新聞記事を読んで集める活動を継続的に行った。この活動を通して、新聞に連日多くのオリパラに関するニュースが取り上げられていることに触れ、子どもたちのオリパラに対する興味関心がより深まった。また、調べたことを新聞にまとめ、保護者に学んだことを伝える活動を通して、オリパラの歴史や意義、アスリートの努力、運営者の働き等、多面的に捉えたオリパラの魅力を伝えようとする意欲や態度が養われた。

本時で取り扱う内容項目「A 希望と勇気, 努力と強い意志」の解説には「目標を実現するためには、自分自身の努力だけでなく、家族や教師など、周りの人の励ましや商談があることに気付くことが大切であると述べられている。授業の後半で「母の支えのおかげ」と語った真海さんのインタビュー記事を取



り扱うことで、子どもたちは「目標達成のために努力することは大切だ」ということに加え、「身近にいる人の助けや支えがあってこそ、目標に向かうエネルギーを得られる」ことに気付くことができた。そこから、自分自身の夢や目標は何か、その実現に向かって今頑張ることができているのは誰の支えがあるからか、谷さんの経験から自分事として考えることができた。(写真は児童のワークシート)



【課題】

総合的な学習の時間で調べてきたことや、日常生活の中でオリパラの話題やニュース等に触れてきたことと、本時で扱う教材や新聞記事がつながる瞬間を大切にできるような時間を確保したい。教材を通して、夢を諦めないことの大切さや努力を続ける人の放つ輝きに触れた子どもたちが、新聞記事を読むことで、そういう人を支える人があることに気付く。その時に、「前に新聞記事で読んだ、あの選手もそうなのかな。」と想起したり、「他の選手は、どんな人に支えられているのかな。」と興味を広げたりしながら話し合いをすることができると考えられる。こうして、総合的な学習の時間と道徳の時間のつながりの中で、教材－新聞－自分の3つを行き来しながら考えることで、より自己の生き方を深めることをねらうことができる。

本時では一人一台端末を活用して新聞記事の提示を行った。記事の画像を児童一人一人が自分の端末で開き、授業者が読み上げた。あらかじめ読み聞かせる部分をマーキングしていたので、子どもたちは長い新聞記事でもポイントをしばって内容把握をすることができた。しかし、高学年へと上がるにつれ、教師が用意した新聞記事の画像からだけではなく、新聞本体から目的に沿って記事を探したり、記事を読んで自分なりの感想をもったりする力も伸ばしていきたい。授業のねらいや目標と照らし合わせながら、どのように新聞記事を提示するのが効果的であるかを検討することも、次のステップにつながる学習活動の仕掛けとして考えていきたい。

朝日新聞
2018.11.11



4 今後に向けて

今回は小学4年生ということもあり、一人一台端末を用いてトリミングやマーキングをした記事を提示したが、今後は新聞を自分でめぐりながら読み、様々な記事に触れる活動にも挑戦したい。

5 資料：指導案

①本時のねらい

パラリンピックに出場した真海さんの生き方を通して、夢や目標をもつことの大切さについて考えさせ、目標に向かって諦めずに粘り強くやり抜く強い意志をもとうとする心情を育てる。

②本時の展開

児童の学習活動	教師の関わり
○ 今、がんばっていることは何だろう？ サッカーを頑張っているよ 漢字を覚えられるように練習しているよ イラストをもっとうまくなりたいな ○ 「より遠くへ——谷 真海」を読もう。 ○ 真海さんは、どんな人かな？ がんばり屋さん あきらめない人 がまん強い人 ○ 真海さんは、どんなことを頑張ったのかな？ ずっと頑張ってきた 走り幅跳びの練習 リハビリ あしの手術 パラリンピック これまでの頑張りがあってこそそのパラ出場 大切なもの 真海さんが手にした「大切なもの」とは、何だろう。 夢や目標をもつこと 諦めずに努力する気持ち 体を動かすことが好きな気持ち チャレンジする気持ち 夢 目標 努力 好きなこと 挑戦 ○ どうして真海さんは、こんなにがんばり続けることができたのかな？ お母さんが信じてくれたから、頑張れたんだね 新聞記事「かあさんのせなか」 他にはどんな人が真海さんを支えていたのかな。 ○ 自分の周りに、自分の夢を応援したり支えたりしてくれている人はいらるかな？ 両親が応援してくれているよ。 一緒に頑張る仲間もいるよ。 ○ 今日の学びをふりかえろう。	○ 普段自分が頑張っていることを想起させ、本時の学習の見通しをもたせる。 ○ 真海さんが最も頑張ったと思う場面を交流することを通して、真海さんのたゆまない努力と目標を持ち続けたことに触れられるように関わる。 ○ 努力の結果手に入れたものについて考え交流することで、夢を諦めない気持ちや諦めないことの大切さについて気付くことができるように関わる。 ○ 新聞記事を提示し、見出しの「信じてくれた」人を考えることで、夢を追いかける力には周囲の支えや励ましが必要であることに気付かせる。 ○ 自分の夢や目標について考えるとともに、それを応援してくれている人は誰か、振り返ることができるように関わる。

8. 評価について

目標や希望をもち、それに向かってたゆみなく努力を続けることの大切さについて考え、周囲に自分を支えてくれる存在があることについて考えを広げたり、夢や目標に向かって、どんな姿勢で向かい合おうかと考えたりしている。（発言・ワークシート等）

2021年度 N I E実践報告

グランドデザインからスタートするN I E

～家庭・教室・地域を結ぶN I Eをめざして～

室蘭市立八丁平小学校 主幹教諭 上野 真和

1 はじめに



本校は、23学級、全校児童595名の小学校である。昨年度からN I E実践指定校の認定を受け、取組を始めた。本校は、昨年度「青少年読書感想文全道コンクール」で学校賞をいただくなど、読書の取組に力を注いできた。このような取組を基盤に、「N I E実践指定校」として2年目の取組を始めた。

2 家庭・教室・地域を結ぶN I Eをめざす本校の考え方

(1) 世の中の出来事に自分事として関心を持つ

新型コロナウイルス感染症により世界中が今までにない対応を継続している。このような中、対立やジレンマを上手に扱い、曖昧な中でも自ら判断できる力が未来を生きる子どもたちには必要である。そのため、世の中の出来事に自分事として関心を持つことが大切で、生きぬく力の一部とも言える真の意味でのメディアリテラシー育成のため、新聞は信頼性の高い有効なメディアであるにとらえる。

(2) 使える言語能力の向上

全国学力・学習状況調査、大学の入試問題等は、テキストを理解する多様な力が必要な問題である。このことから新聞を活用して使える言語能力の向上をめざしたい。

(3) 図・グラフ・表・写真等とテキストを一体とした読解力を高める

昨年度、本校児童は、全国学力学習状況調査の児童質問紙の回答において、図や表を用いて思考する部分のポイントが低い傾向にあった。このようなことから図・グラフ・表・写真等と共にあるテキストを一体として理解する読解力の向上をめざしたい。

(4) 一人一台端末との関連

室蘭市においても今年度から導入された一人一台の端末の有効活用が求められる。新型コロナウイルス感染症による臨時休業等の影響から家庭でのオンライン学習がクローズアップされているが、学校における主体的・対話的で深い学びのために効果的に用いることがまず大切である。このような劇的にI C T環境が変化する状況においても新聞は有効な学習教材となり得るととらえられる。一人一台の端末とN I Eの効果的な在り方を試行する中で、子どもたちの資質・能力の向上をめざしたい。

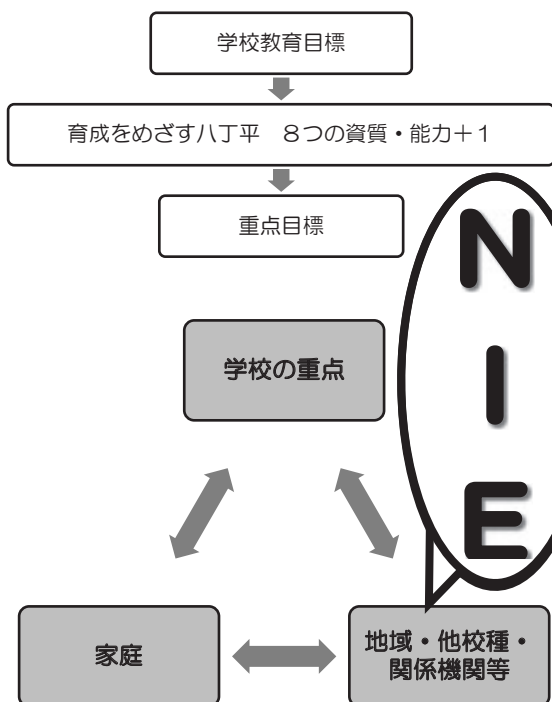
(5) 新聞を活用した家庭学習の広がりや保護者へのアプローチ

本校の授業づくりの研修活動では「ふりかえり」を大切に授業づくりを進めている。授業の終末に行うふりかえりで意欲化を図り、次の授業や家庭学習につなげることをめざしている。ここ数年、本校では家庭学習時間が少しずつ増えてきていることもあり、価値あるN I Eの取組も家庭学習に広げていきたい。また、このような新聞を活用した家庭学習の広がりが保護者にもN I Eのよさを伝え、結果として子どもたちが日常的に新聞にふれる機会を増やすことにもつながると考えた。

3 取組

(1) NIEを学校経営計画に位置づける

① グランドデザインへの位置づけ



2年目のNIE実践を進めるにあたり、グランドデザインの中にNIEを位置づけた。グランドデザインに位置づけることで、ゆるやかであっても学校内だけでなく、家庭・地域との連携も含めた取組につながっていくと考えたからである。

本校のグランドデザインは上記のように学校・家庭・地域等がトライアングルで構成されている。NIEは右下の「地域・他校種・関係機関等」の部分に位置づけた。つまり、学校外の教育資源としてNIEを明確にし、家庭・地域との共通理解のもと取り組んでいくことをめざした。

② 資質・能力への位置づけ

本校では、昨年度の学校評価時に児童・保護者・教職員から資質・能力に関するアンケートを行った。そのアンケートを基盤に、「八丁平小学校 8つの資質・能力+1」を定めた。この中には、読書感想文コンクール等で実績があった本校の取組を生かし「読書力」も位置づけた。この読書力の要素にはテキストを理解・活用する言語能力向上の観点から新聞の活用も含めている。

(2) 具体的取組

① 新聞に親しむコーナーの設置

図書室や校長室前のコーナーの他に、親しむコーナーを2ヶ所増設した。今まで図書室の新聞コーナーを体育館に近いフリースペースに増設した。読後、消毒もできるようになっている。また、職員室前に新聞のバックナンバーとワークシート集を設置し、教職員も使いやすいようにした。



② 家庭学習の手引への位置づけ

【国語】新聞を読む。新聞の気になる記事を読んで、意見をまとめる。
【社会】学習したところに関係ある新聞記事があれば、切りぬいてノートにはったり、メモしたりしておく。

毎年配布している「家庭学習の手引」にも新聞を活用した学びについて、紹介している。この手引は、年度初めに全児童に配布するとともに、HPの「学びの充実」のコンテンツでも紹介している。



③ 各種新聞づくりの取組

個人、グループ、壁新聞等、各学級での新聞づくりの取組はさかんに行われている。今年度から導入された1人1台の端末を活用し、様々な情報を活用して新聞づくりに取り組んでいる。総合的な学習の時間などで体験したことを、新聞にまとめて発表する活動は定着しているので今後、一人一台の端末で新聞を作成したりグループの協働作業で作成したりする取組も考えられる。

④ 新聞づくりの手法を学習発表会に生かす

ほとんどの学年で新聞づくりが何らかの形で行われているが、その成果を今年度の学習発表会で生かした。新型コロナウイルス感染症の予防・拡大防止の観点から、劇と音楽中心だった演目を変更し、ポスターセッション等による学習成果の発表を3つの学年で行った。この際、個人やグループで新聞づくりに取り組み育まれていた構成力や伝えたい内容や自分なりの考えを整理する力などが発揮されていた。



⑤ NIEワークシートの活用

各新聞社から提供されている「ワークシート」を教職員の目に触れやすい職員室前に紙ベースで保存している。また、おもしろそうなワークシートは、掲示して目にふれやすくして、各学級でも必要に応じて家庭学習等で活用している。

例えば右のワークシートは室蘭市に洋上風量発電の製造拠点ができる記事を題材にしている。このような地域を題材としたものは、子どもたちにとっても自分事として興味・関心をもち意欲的に取り組むことができるワークシートである。



⑥ サマースクールでのNIEの取組

本校では、長期休業中の学習の取組を「サマースクール」という名称で実施している。今年度は「家庭学習につなげる」をテーマに実施した。教科は国語と算数で、いずれも言語能力の向上をねらいとした。算数は、自分で問題をつくる「作問」の学習を行った。国語では簡単なNIEの取組を行った。新聞を読み、自分の気になる記事を切り取り、感想を書くというシンプルな活動である。子どもたちは楽しそうに新聞を読み、お気に入りの記事を切り取っていた。それをワークシートに張り付け、感想を書き込んでいった。家庭の新聞やNIEで供給されている新聞を活用し約300人が取り組んだ。

北海道新聞のワークシート
2021/12/7



⑦ 学校だよりやHPでの保護者・地域へのNIEの具体的情報発信

サマースクールで行ったNIEの様子を学校だよりで伝えた。子どもたちが新聞を活用した学びを楽しんでいたことやNIEの学習活動における価値を伝えた。



どんな状況でも学びの継続・充実を……

校長 橋本誠吾

2学期の始めに、子どもたちと夏休み中のことについて話をしました。子どもたちは笑顔で「楽しかった～」と話してくれました。その中で印象に残ったのは、家族や友だち、近い事等の関係者と一緒に活動する楽しさについての話題が多かったことです。「どんな場所に行ったか?」ということではなく、身近な場所でも、いろいろな人と過ごしたことを楽しそうに話してくれました。私は、社会全体に新型コロナウイルス感染症拡大防止のため数多くの制約がある中、保護者の皆様をはじめ、子どもたちに関わる多くの方が、子どもたちの充実した活動と笑顔のために、いろいろな工夫をされていることを再認識しました。学校でも様々な制約はありますが、充実した教育活動を進められるよう、教職員一同、最大限の工夫をしようという意欲がさらに高まりました。

また、7月下旬に実施した「サマースクールが楽しかった。」という声も聞かえてきました。「算数の問題づくり(作問)」や「国語の新聞を活用した学習」についてです。「算数の作問」は、自分で問題文を考え、関係する絵や図を描く学習活動です。これは、問題をつくるという活動を通して、問題の意味をつかむ「読解力」を伸ばすことをねらっています。また、絵や図を描くことで問題全体のイメージを深めるねらいがあります。何よりも算数の「楽しさ」がいっぱいの学び方です。

国語の「新聞を活用した学習」は、右のような簡単な流れの学習です

が、新聞を活用した学習では、次のような力が伸びると言われています。新聞には多くのグラフや図が論理的・実用的な文書とともに載っています。新聞に接することで「**多様な文章や資料を読み解く力**」が伸びます。また、新聞を読むと、いま地域や社会で何が起きているかが分かります。「**子どもたちが社会に目を向け、考えるきっかけ**」が生まれ、フェイクニュースが存在する現代社会で、信頼性・正確性の高い新聞の情報は、子どもたちが情報を取捨選択する基準となり、「**メディアリテラシー**」を高めることにもつながります。本校はNIE(Newspaper in Education)実践指定校なので、図書室や家庭学習スペースで新聞を読むことができます。ぜひ、この取組を家庭学習等でも行ってほしいと思っています。

現在、緊急事態宣言発令の格差もありますが、どのような状況であったとしても、本校では子どもたちの学びを止めることなく、工夫して2学期の教育活動を継続・充実させていきたいと思っています。2学期も保護者の皆様、地域の皆様、関係機関の皆様のご支援・ご協力をどうぞよろしくお願い申し上げます。

よく読む

切り取って貼る

読解を深く



⑧ 家庭学習への広がり

本校では育成をめざす「8つの資質・能力」の中でふりかえりを大切にした授業づくりを行い授業の終わりに育んだ学びへの意欲を「家庭学習」につなげることをめざしている。家庭学習の取組をていねいに伝える学級通信が昨年度に比べると少なくとも10倍以上になっている。

【学級通信】

国語で学んだ複合語について新聞を活用して家庭学習してきた例の紹介。自ら学習方法を工夫して進めているよさと家庭学習で新聞を活用する有効性についてていねいに知らせている。



新聞記事の複合語にラインを引いた家庭学習

4 成果と課題

(1) 成果

・いろいろな手法で地道にNIEの価値を保護者・地域にも広げ、家庭学習等でも活用例が増えた。

(2) 課題

・一人一台端末とNIEを効果的に関連させる取組(ネットと新聞双方向の調べ学習や協働作業による新聞づくり等)を試行していくことが今後、必要であると考え。

NIE 実践指定校2年目の取組

旭川市立末広北小学校 教諭 穂刈 彩花

1 はじめに

本校は、昭和56年に開校し、背後は近文台の緑に包まれ、校舎東側には遠く雄大な大雪山連峰を望むことができる。全校児童数は、男子150名、女子133名、計283名、学級数17学級である。

今年度は、NIE 実践校として2年目の取り組みとなる。提供された新聞は、北海道新聞、朝日小学生新聞、毎日小学生新聞、日本経済新聞、読売 KODOMO 新聞の5紙である。

私が今年度担任を受けもった子どもたちは、特別支援学級の1年生4名である。国語の時間の個別学習における、子どもたちの課題としては、①言葉のまとまりを意識して文章を読むことに慣れていないこと②文を書くことが苦手なこと③適切な言葉で自分の気持ち（考え）を表現することが苦手なことの3つが挙げられる。

そこで、新聞を活用することで、次の3つの目標を達成することを意識して活動を行った。1つ目が、習慣的に読む活動を取り入れる（読むことに慣れる）こと、2つ目が、様々な言葉を知り、話す活動や書く活動の際に活用できるようにする（語彙力を付ける）こと、3つ目が、子どもたちが興味をもちそうな記事（時事的記事など）を使うことで、詳しく知ろうとしたり、考えをもったり伝えようとしたりすることである。

一学期の初めの頃は、教室で落ち着いて勉強することが難しく、学校のルールについて理解させたり、授業時間を区切って集中する時間を増やしたりして、学習に集中できる時間を増やしていった。学校のルールが身に付いてきて、ひらがなとカタカナが定着してきた二学期の後半から、授業の中で新聞を使った活動にも挑戦していった。

2 実践報告

（1）いつでも新聞が覧ることができる環境づくり（4～6年生）

4年生と5年生の教室の間に、新聞台を設置し子ども新聞を読めるようにした。昨年度は、担任していた学級の教室の前に置いていたので、覧ることができる児童は限られていたが、今年度から、高学年の階の真ん中に当たる場所に置いたので、様々な学年の子どもたちに覧てもらうことができた。新聞台を置く場所は大切だと感じた。

新聞を設置する際に、児童が興味のあるような面を開いておくことで、新聞を覗く子が増えていった。登校時や休み時間に、新聞を覧ながら友達と話し合っている児童を見ることができた。

（２）国語の新聞タイム（４年生）

昨年担任していた４年生の子どもたちが、国語の新聞タイムという活動に継続して取り組んだ。①～③の３つの記事の中から、見出しを見て自分が１番興味をもった記事を選んで読む活動である。新聞記事を読む際に、赤鉛筆を持ちながら読み、分からない言葉や「素敵だな。」「使ってみたいな。」と思った言葉に線を引きながら読む。読み終わった子どもから、分からなかった言葉を国語辞典で調べる。ここまでで最大４分間。その後、初めて知ったことや詳しく分かったこと、記事についての感想、気づいたことなどを感想用紙に４分間で書いた。新しく使ってみたい表現や、新聞の良さ、記事を読む前と読んだ後で変わったことについて書いている子も見られた。

（３）カタカナさがし（１年生）

カタカナの学習が終わった時期に、新聞記事からカタカナを探す活動を行った。使用した新聞は、2021年12月31日（金）の朝日小学生新聞である。一面に2021年の一句が載っていて、カタカナが多く出てきていた。まず、子どもたちは、配られた新聞から、見つけたカタカナに赤鉛筆で線を引いた。５分時間を取った後、見つけたカタカナの場所を確認しながら交流した。「この言葉、よく聞いたことがあるよ！」「これってどういう意味かな？」などの声が聞こえ、子どもたちは意欲的に身近なカタカナを見つけることができていた。

その次の時間に、自分たちが見つけたカタカナをはさみで切り、ワークシートに貼った。手先を上手に使える児童がいたため、はさみを使った活動を定期的に行っていたが、新聞のカタカナを切る活動は、切る物が小さく、新聞紙も柔らかいため、身に付けた力を発揮するにはよい機会となった。ワークシートに貼ったカタカナを書く練習をした後、そのカタカナを使った文章を考えた。普段は文章を考えたり、書いたりするのが苦手な子も、「自分が見つけたカタカナを使いたい」と一生懸命取り組んでいる様子が見られた。最後、感想を聞いたところ、「新聞を使って勉強するのは楽しい！」「カタカナをたくさん見つけられて嬉しかった。」「カタカナを使って文を作るのを頑張った。」など、子どもたちは活動に対して肯定的な発言をしていた。

（４）「６才からのニュース」の記事を使って（１年生）

毎日小学生新聞の「６才からのニュース」の記事を使って、見出しだけ隠された記事を読んで見出しを考える活動と、記事を見出し（題名）、写真、説明に分ける活動を行った。

見出しを考える活動について、最初子どもたちは「難しそう～！」「できるかな。」と言っていたが、何度かやっていく中で、記事の内容を理解しようと注意深く聞いたり、その記事が何を一番伝えたかったのかを考えたりして、楽しみながら学習できるようになった。記事の見出しを当てて嬉しそうにしていたり、友達が考えた見出しに対して「その見出しもいいね！」と認めあったりする様子も見られた。

記事を見出し（題名）、写真、説明に分ける活動について、子どもたちは「写真があると、読んでみたくなるね。」「見出しがあると、（内容が）すぐわかりやすい。」「文を書くときは、３つとも全部大事だと思った。」などと発言していて、新聞の書き方の工夫について気づく

ことができた。

(5) スクラップ新聞作り

(4)の活動や、新聞の中にあるものを見つける「みつけゲーム」に慣れてきた頃に、好きな写真を切って貼るスクラップ新聞作りを行った。好きな写真を探しながら、グループ名（テーマ）を考えるとよいことを伝え、教師の見本を見せた。（教師の見本は「ふゆのなかま」の写真を集めて「ふゆのなかましんぶん」を作成）

子どもたちは、「好きなものを選んでいいの!?!」「たくさん見つけたい!」と、読むのが苦手な子も意欲的に活動に取り組み始めることができた。新聞を読みながら、「こんなこと書いてあるよ!」「ぼくこのニュース知ってるよ。」などと記事について交流していた。冬休み中の新聞（朝日小学生新聞、毎日小学生新聞、読売 KODOMO 新聞）を用意したが、それぞれ1誌ずつしかなかったため、グループ名（テーマ）が決まってきた時に、「ほかのお友達のグループ名（テーマ）に合った写真があったら教えてあげてね。」と伝え、「○○くん、お魚の写真あったよ!」「○○ちゃん、これどう?」などと視野を広げて探すことができた。

写真を選んだ後、A3の紙に写真を置き、見出しを書いた。4名それぞれ個性が出ていて、「パンダしんぶん」「どうぶつしんぶん」「かわいいしんぶん」「さかなとうちゅうのなかまたち」という見出しでスクラップ新聞を作成していった。見出しを書いた後、空いているところに関連したイラストや説明を付け加えた。事前に(4)の活動を行っていたことで、子どもたちから説明も書いたらよいという考えが出てきた。

スクラップ新聞の活動の成果は、読んだり書いたりするのが苦手な子でも楽しく活動することができたこと、新聞の中から好きな写真を見つけたり切ったりする活動が、つける力を鍛えたり手先のトレーニングになり、自立活動に繋げることができたことである。また、みんなで大きなスクラップ新聞を作ること（協働制作）も考えたが、コロナ禍のため実行することができなかったため、今後取り組んでみたい活動である。

(6) 自立活動

特別支援学級では、個別学習をする際、教科学習の指導はもちろん、児童の特性に合った自立活動も行っている。担任している子どもたちの中には、手先を上手に使えない子や指示を理解することが苦手な子、友達とのかかわりが苦手な子などがいた。そこで、自立活動の時間に新聞を使った活動をいくつか取り入れた。

①「好きな写真や言葉を切る活動（切る）」について、新聞紙は扱いにくいところがあるため、どうすれば切りやすいか工夫していくことで上達することができた。（初めに縦に裂いて1枚にする、まわりを大きく切ってから丁寧に切るなど）

②「絵を作る活動（絵の構成を考える、友達と協力する、貼る）」について、一つの大きな絵を作るために、絵の構成や友達との役割分担を考えたり、話し合ったりした。新聞をちぎって貼るため、手先のトレーニングにもなった。

③「見つけゲーム（聴覚、視覚）」について、教師や友達の指示（見つけるもの）をよく

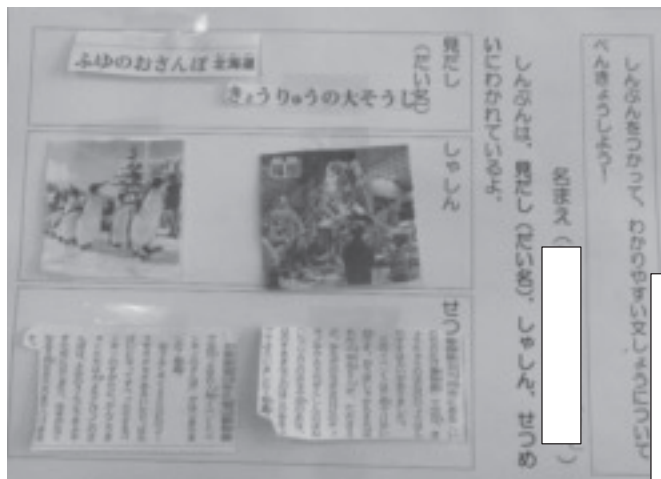
聞いていないと探せないなので、聞くトレーニングになった。また、見つける力も付いたので、「教科書の〇〇を見てください。」と言った時にすぐ見つけれられるようになった。

～取組を写真で紹介～



(1) いつでも新聞が見られる環境づくりでは、特に、昨年担任していて新聞の活動をよく行った子どもたちが「新聞だ～!」「4年生になっても読みたい!」と言って、読んでいる様子が見られました。昨年度のNIEの活動を通して、新聞の良さを感じてくれたのかなと思い、嬉しく感じました。今年度の担任の先生が協力してくださり、昨年度の活動も続けることができました。

(3) カタカナさがしでは、1年生の読み書きが苦手な子や手先が不器用な子も一生懸命、楽しく活動することができ、たくさん身の周りのカタカナを見つけられました。



(4) 「6才からのニュース」の記事を使ってでは、記事の中で一番伝えたいことを考えながら読んだり、見出し、写真、説明のよさに気づいたりすることができました。この気づきを生かして、新聞づくりをしました。

(5) スクラップ新聞作り



新聞をよく読んで・・・



見つけて、切って、貼って、



色を付けて、完成!

新聞作成による自分の学びの視覚化

札幌市立伏見小学校 教諭 秋元 来舞

1. はじめに

本校は、札幌市の中央区にある児童数720名の大規模校である。校区内には市電が走っており都会らしい雰囲気がある一方、自然豊かな藻岩山の麓に位置しており、都会の雰囲気と自然とが融合した落ち着いた地域である。昨年度からNIE実践指定校の認定を受け、授業を行っている。

本校では開校以来、「意欲的に学ぶ子の育成」を研究主題に掲げ、2年に1度「全道教育実践発表会」を開催してきた。昨年度から、この「意欲的に学ぶ子」を「社会や自分の生き方に目を向ける姿」と設定し、研究を進めている。子どもが社会に目を向けるためには、教科書だけではなく、新聞などのメディアに触れる機会が重要であると考えた。

本実践は、3年生社会科「店ではたらく人」と「工場の仕事」のそれぞれの単元の最後に新聞で学んだことをまとめる活動を位置付けた。「店ではたらく人」では、お店の工夫を調べる活動を通して、お客さんの願いと販売の工夫が結び付いていることに気付くようにする。「工場の仕事」では、工場で働く人々の思いや仕事の工夫を調べる活動を通して、お客さんのことを考えながら、麵の作り方や運び方を工夫していることに気付くようにする。単元の最後の新聞作りでは、実際の新聞を見ながら、どのような紙面構成が分かりやすいかを中学年なりに考え、自己の表現に生かすようにする。

以下に本実践の内容と成果と課題を記す。

2. 児童の実態

本学級の児童は、文章を書くことが好きな子が多い。国語で物語を書く時には、作文用紙を何枚も使って書く様子が見られる。しかし、分かりやすい表現で書いたり、紙面構成を考えたりする経験が少ない。以下に、子どもが初めて書いた新聞を掲載する。



3 - 1. 指導案

第3学年 社会科指導案

日 時 令和3年7月～8月

児 童 札幌市立伏見小学校3年1組

男子21名 女子18名 計39名

授業者 秋元 来舞

ア. 単元名「店ではたらく人」

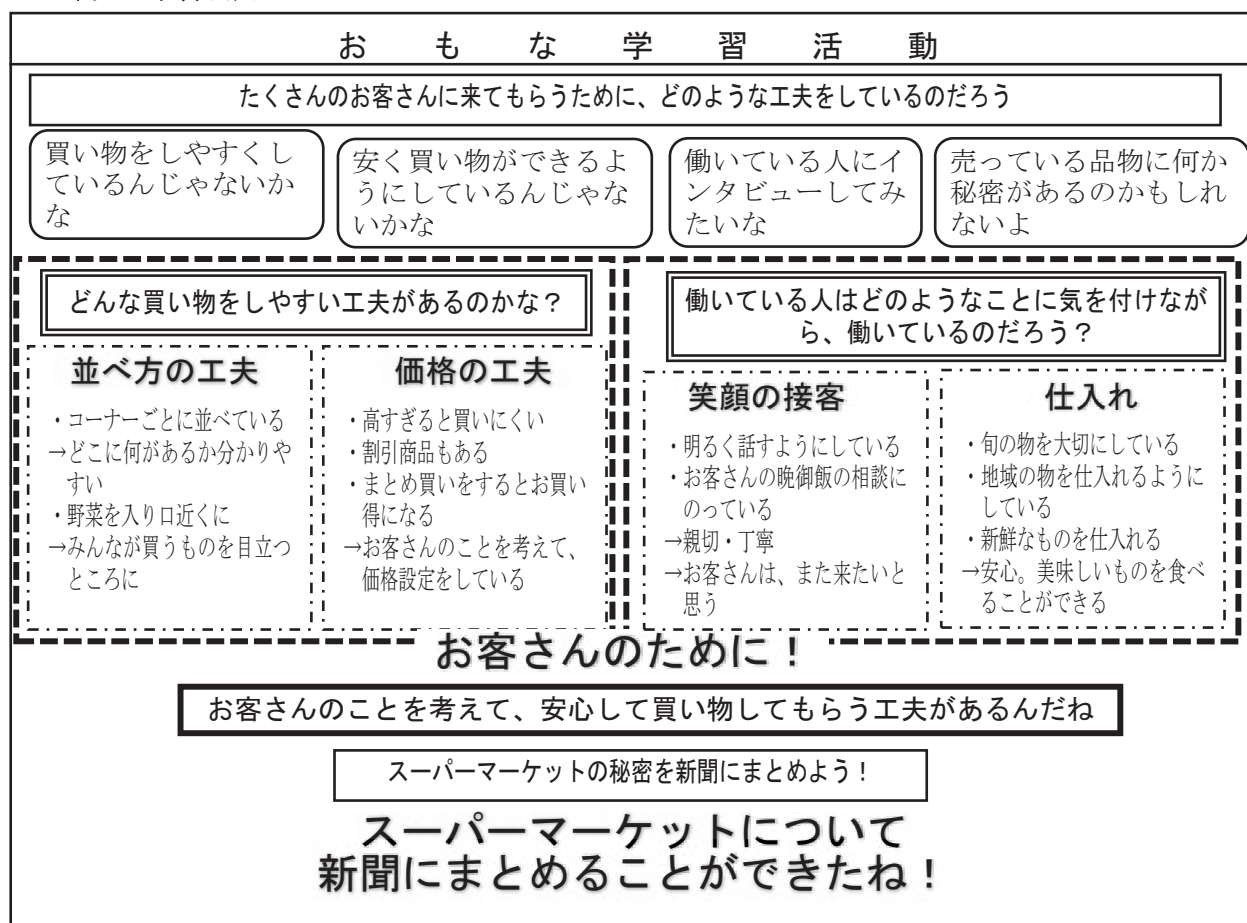
イ. 単元と新聞のかかわり

本単元では、スーパーマーケットについて学習する。スーパーマーケットで働く方にインタビューをしたり、あらかじめ教師が撮っておいた陳列棚の写真を見たりしながら、スーパーマーケットの売り方の工夫に気付いていく。単元の最後には、集めた情報を基に、スーパーマーケットの秘密を新聞にまとめる。

ウ. 単元の目標

スーパーマーケットにおける消費者の願いや販売の仕方、他地域や外国との関わり等について調査する活動を通して、消費者の願いと販売の仕方を比較・関連付けることで、販売に携わっている人々の工夫に気付き、自分の考えを新聞にまとめることができる。

エ. 単元の学習展開



3 - 2. 指導案

第3学年 社会科指導案

日 時 令和3年8月～10月

児 童 札幌市立伏見小学校3年1組

男子21名 女子18名 計39名

授業者 秋元 来舞

ア. 単元名「工場の仕事」

イ. 単元と新聞のかかわり

本単元では、西山製麺の工場の仕事について学習する。パンフレットや教科書、インターネットでの調査活動を通して、麺を作る時の工夫や運ぶ時の工夫に気付いたり、作り人の思いに触れたりしていく。単元の最後には、集めた情報を基に、西山製麺の秘密を新聞にまとめる。

ウ. 単元の目標

西山製麺の工場の仕事について調べる活動を通して、安心安全でおいしい麺を作るための工夫や思いに気づき、自分の考えを新聞にまとめることができる。

エ. 単元の学習展開 「工場の仕事」

お も な 学 習 活 動			
札幌にはどんな工場があるのかな？			
Google map で工場を見ると、街から離れたところにあるね	自分が住んでいる場所の近くには、工場があまりないな	食べ物・飲み物工場が多いな	製麺所がたくさんあるよ。札幌はラーメンが有名だよ
どのようにして麺を作っているのかな？		麺を作る以外には、どんな仕事をしているのかな？	
材料のこだわり ・北海道の地下水を使っている ・地元の材料にこだわっているみたいだよ →お客さんが安心安全だと思ってくれる	作り方のこだわり ・麺の熟成時間を変えているよ ・機械で効率良く作業するところもあるよ →おいしくて安心安全な麺を作っているんだね	運搬・販売 ・遠いところには、トラックや飛行機で運んでいるよ。近くはトラックだね。 ・ラーメン屋さんに売っているし、どんな麺がいいか相談にも乗っているよ	品質管理のこだわり ・運ぶ時にも冷やして運んでいるよ ・麺を作る時には白い服を着て、衛生面に気を付けているよ →お客さんが安心
どうして何種類も麺を作っているんだろう		西山製麺のこだわりを新聞にまとめよう！	
お客さんの好みに合った麺を作っているんじゃないかな	たくさんの麺があると、売れると思うよ。	今回は、枠が決まっていないから、自分で枠を考えるぞ	
お客さんのことを考えて、たくさんの麺を作っているんだね		西山製麺のこだわりについて新聞にまとめることができたね！	

4. 成果と課題



1回目と2回目の新聞を比較すると、文章が分かりやすくなったように感じる。これは、本物の新聞を読んで、文章の書き方を学んだことと、社会の学習だけではなく、係活動や国語の時間にも新聞を書く経験を踏んだからだと考えられる。また、単元の終わりに新聞を書くことで、自分の学びを振り返ることができることが分かった。

○成果

- ・新聞を作成することで、自分がこの単元で何を学べたのかを視覚化することができた。
- ・本物の新聞を読んでから、文章を書くことで、事実と考えを分けて書くことの大切さを理解することができた。

▲課題

- ・「この情報は、新聞でなければ伝えられない」という必要感を持たせる必要があった。
- ・誤字脱字があると、直すのがたいへんであった。ICT等を活用して、文章の書き直しをしやすいと、子どものやる気を持続させることができたように感じる

全校での NIE（3 年目の取組）

岩見沢市立中央小学校 教諭 富樫いずみ

1 はじめに

今年度、岩見沢市立中央小学校は NIE 実践指定校 3 年目となった。中央小では、342 名の全校児童に対する NIE の取組を進めている。NIE 実践校となってから、標準学力検査 (NRT) や全国学力・学習状況調査 (自校採点・分析) の国語学力のポイントがどの学年も全国平均を上回っており、全校をあげての NIE の取組が学力向上の一助となっていることを改めて教職員が実感している。

実践校 1 年目、全学年で様々な場面における NIE の取組を行った。学年の実態に応じて、教職員の創意工夫により、のべ 34 項目にわたった授業・活動を行い、児童にとって NIE が身近なものとなった。

2 年目、全学年による取組を継続するとともに、年度に 1 枚以上の個人作成している新聞を一斉に掲示して鑑賞し合う校内新聞展示会を行った。コロナウイルス感染拡大防止のため、新聞作成の際に行っていた校外での取材活動や校外からの外部講師の招聘がなかなかできず、それ以外の場面でも他学年との交流が極端に少なくなった。このような状況下だからこそ、実生活ではなかなか出来ない異学年の交流を行うことにもつながり、外部の方に審査をしていただくことにより外部との連携も深まった。

今年度は 3 年目。昨年度大きな評価を得た、校内新聞展示会や各学年の取組は今年度も継続することとした。今年度新たに行った活動を、ピックアップして報告する。

2 特別支援学級における取組

本校では年に一度以上全学級が校内で授業公開し、それを参観して事後交流することで研鑽をしている。その研修で、昨年度から積極的に NIE 実践に取り組んでいる特別支援学級の担任が、NIE の取組を公開した。

新聞に触れ、真剣に学ぶ子ども達の姿は他教職員にとっても大きな刺激となった。



知的障害特別支援学級 国語科学習指導案（本時案）

【单元名】 新聞に触れよう (全7時間)

教材名 「写真の喜怒哀楽をみつけよう」

2. 本時の目標・・・新聞の写真から喜怒哀楽の表情を探し感情を考える。

目々に合わせた漢字テストを配布して
組みませる。間違いはその場で訂正
する。

説後、二枚シールを配布する。

【知識、理解】

- 正しく漢字を覚えることができたか。
- 【思考、判断、表現】
- 言葉のまとまりをつけて抑揚をつけて読めるようになったか。

楽しみの感情を

を結びつけることができたか。

手どんな場面だったか説明する。

悔しさ、驚きなど	【思考・判断・表現】
----------	------------

けることができた。

する。
○写真に適し

しに着目させよう。を想像できたか。

見つけたものを共有する

【思考·判断·表现】

共感する。たか。

友だちのよさに気づき
次時に繋げる

面や感情をうまく表

たて

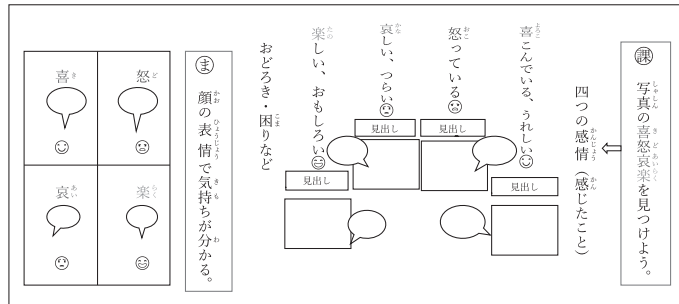
--	--

4. 本時の評価…○新聞記事に目を向けることができたか。
○喜怒哀楽と言言言葉を知り、4つの感情について想像することができたか。

＜参観者から＞

- ・新聞を広げながらの対話。子どもたちの心にスッと入っていく様子がわかった。
- ・どの学年、どの学級でも実践の価値の高い授業だと思った。
- ・人の表情から感情を読み取る。とても大事なことだし、新聞から見つけるのがいいなと思った。

【板書計画】



- ・一つの授業の中に訓練のための様々な活動が取り入れられていた。はさみで切る、のりをつける、紙をはる、吹き出しの中に思ったことを書くなど。必要な動きをしっかりと取り入れた授業だった。また、タブレットの活用でも、写真を撮る、写真を先生に送るなど、これからの子どもたちに必要な力を育てていた。他にも漢字や音読なども、とても大切な活動も行われていた。
- ・気持ちを想像することが難しい特別支援の子にとって「表情から読み取る」という切り口は有効だった。導入に先生のお子さんの写真を使っていたことは子どもの興味関心を引き出していた。
- ・新聞に触れる中で見出しなどに興味を持つ姿もあり、子どもたちの世界が広がったりつながりあったりするいい活動だと思った。

<授業者から>

- ・表情を読むのは新聞でなくてもできる内容ではあるなと思いながら進めたが、いろんな顔を見つけるにはいい教材となった。
- ・3時間目までは自分で新聞を開かない、表にある記事しか見ないという実態だったが、5時間を終えて、自ら新聞をめくれるようになりしっかり積み重なっていると感じた。

4 空知こども新聞の取組

本校が実践校となった1年目に空知セミナーを開催した折に、参観に来てくださった販売所の方々と知り合うことができた。その後新聞展示会の審査をお願いするなどのつながりを通じて「空知こども新聞の子ども記者になってくれませんか。」というあり



がたいお話をいただいた。例年は公募している子ども記者が、新型コロナウイルスの影響で難しくなり発行できずにいたという経緯があったとのことだった。総合学習で『炭鉄港』を学んでいる6年生が引き受け、10チームに分かれてそれぞれが一つの記事を担当した。授業の中で岩見沢市内のゆかりの場所を巡ったり、ゲストティーチャーから話を聞いたりするなどの取材を経て記事にし、12月に空知全域に配布された。

記事を書くにあたっては、北海道新聞本社から記者を招いて書き方の指導を仰いだ。また、記事を書いた後は、ゲストティーチャーに改めて記事の添削をしてもらった。校内でも



自分たちの学びを同じく地域の特色を学ぶ4年生に発表する機会を設けるなど、取材と様々な形での発信の経験を積むことができた。

多くの制約がある中、6年生にとっても本校にとっても学び多い機会をいただいた。

NIE が繋いでくれている縁と学びに感謝して、今後も全校で教職員が創意工夫をしながら NIE を推進していきたい。

(新聞記事：2022年1月21日北海道新聞朝刊空知版より)

Let's Try！NIE～中学年でのNIE活動～

札幌市立手稲宮丘小学校 教諭 志村 知子

1 はじめに

本校は、児童数約683名、学級数22学級（通常級21、特別支援級1）、近隣には、宮丘公園、白い恋人パーク、札幌市生涯学習総合センターちえりあ、地下鉄宮の沢駅などがあり賑やかでありながらも自然に恵まれた地域にある。



令和元年度、令和2年度に引き続き、NIE実践校の認定を受けることとなった。提供された新聞は、北海道新聞、読売 KODOMO 新聞、朝日小学生新聞、北海道小学生新聞、日本経済新聞、産経新聞の6紙である。

今年度は、小学3年生の担任となったため、初めて中学年でのNIE活動に取り組むこととなった。学級で新聞を購入している家庭は約三分の一ほどである。新聞は図画工作で使ったことはあるが、紙面を見たことがないという児童がほとんどであった。まずは、新聞に親しむことを目指して活動を始めた。

2 実践内容

3年生の学年目標が「Let's Try！」であったため、「Let's Try NIE」というテーマで活動を進めることにした。総合的な学習の時間を中心に行った。新型コロナウイルス感染症による休校や学級閉鎖を懸念して学習を進める必要あり、活動時間を設定することが難しかった。



朝の会での記事紹介

まずは、新聞にどんな記事が出ているか知ってもらうために朝の会で担任が選んだ記事を紹介することにし

書画カメラで拡大し、テレビに映して紹介する



朝の会で紹介した記事を教室
に掲示した

た。紹介した記事は教室に掲示し、見るができるようにした。写真がメインの記事から紹介し、地域に関わる記事など興味をもてそうなものを選ぶようにした。朝日新聞の「しつもん ドラえもん」や読売新聞の「ポケモンとまなぼう ことわざ大百科」、クイズなどはどの児童も興味をもって見ていた。漢字や使われている言葉が難しいため、読むのに苦労している様子が見られた。

新聞スクラップに Let's Try

新聞を一部ずつ渡し、どんな記事がでているか交流した後、気になった記事をスクラップする活動に取り組んだ。新聞のページの多さや毎日出ていることに驚いた児童が多数いた。テレビ欄、お悔やみ欄、広告、4コママンガなどテレビで見るニュース以外の記事があるのを発見し、「難しいと思っていたけど、意外と面白いな。」という感想をもつ児童もいた。



気になる記事を探す



見つけた記事をスクラップ用紙に
貼って選んだ理由や感想を書く

写真やクイズ、広告を選ぶ児童が多かった。スクラップには、選んだ理由や感想を書くようにした。一般紙だけでなく、小学生向けの新聞でも行った。回数を重ねると、スポーツや動物などを扱った記事を見つける児童が増えてきた。継続して取り組む時間を設定するのが難しかった。

スクラップ活動の後は、他の児童のスクラップを読んでも、付箋に感想を書く形で交流を行った。新型コロナウイルス

防のためグループでの活動ができなかった。読み合って、直接感想を伝えることができなかったのが残念だった。



友達が選んだ記事について付箋に
感想を書き交流する

スクラップ新聞作りに Let's Try

スクラップ活動に慣れてきたところで、スクラップ新聞作りに取り組んだ。まず、スクラップ新聞の作り方を説明し、実際に担任が作って見せた。その後、新聞にどんな記事が出ていたか確認し、自分で集めてみたい記事のテーマを決めるように伝えた。なかなかテーマが決められない児童には、写真や見出しを手がかりに「かわいい」「かっこいい」「おもしろい」「おいしそう」などのキーワードで記事を探すように伝えた。一般紙だけでなく小学生向け新聞からも記事を探すようにした。



テーマやキーワードから記事を探す



食べ物、動物、スポーツの記事を探す児童が多かった。中には、違う新聞の4コマ漫画を集めたり、将棋や天気予報を選んだりする児童もいた。記事は3から5つほど集めるようにした。読めない漢字や意味が分からない言葉があり内容が読み取れなかったり、切り抜く範囲が分からなかったりと苦勞する児童が多かった。新聞のタイトルや記事のレイアウトを考え、記事ごとにコメントを付け、最後にスクラップ新聞を作った感想を書いた。「たくさん記事があって選ぶのが難しかった。」「レイアウトを考えるのがおもしろかった。」「新聞から新聞を作ったのが楽しかった。」「出来上がってうれしかった。」などの感想が聞かれた。

記事のレイアウトを考える

その後、お互いに読み合っ、付箋に感想を書いて交流した。友達が書いた感想を読み、「がんばったところをほめられてうれしかった。」「今度は、〇〇さんみたい新聞にしたい。」「またやってみたい。」などスクラップ新聞作りの楽しさを感じていた。



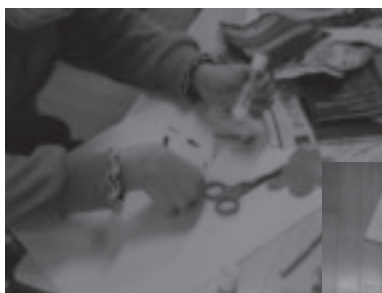
友達が作ったスクラップ新聞の感想を付箋に書いて交流する

新聞コラージュに Let's Try

8月、昨年度の実践報告書を見た NIE コーディネーターの中村都先生（静岡市立井宮小学校）から丁寧なお手紙と中・高学年での実践資料が届いた。すてきな作品例を見て、是非3年生でもやってみたいと思った。子どもたちは「新聞で絵を作るよ！」と聞いて驚いていた。中村先生から頂いた資料とエリック・カール「はらぺこあおむし」を参考にどんなコラージュにするかイメージをもたせることができた。スクラップ新聞で記事選びに苦労した子どもたちは、色や模様で選ぶと聞いて驚くと同時におもしろそうだと感じたようだ。「赤あった。」「この写真、何かに使えそう。」などとつぶやきながらどんどん記事を切り抜いていった。記事から絵ができる過程を楽しみながら作品作りに取り組んでいた。



作品例や「はらぺこあおむし」を参考にイメージをふくらませる



切り抜いた記事から絵を作る



3 成果と課題

NEI 活動に携わってずいぶんになるが、初めて中学年で取り組んだ。新型コロナウイルス感染症により学級閉鎖や休校が懸念される中、低学年に比べて余裕



「海藻いっぱい海」
作った子は他の子から褒められてとても嬉しかった

時数が少ないため NIE 活動にあてる時間を確保するのに苦労した。

スクラップ活動やスクラップ新聞作りは総合的な学習の時間、社会、国語を、新聞コラージュは総合的な学習の時間と図画工作の時間を当てた。新聞に触れることで社会の出来事を知ったり、分からない言葉を国語辞典で調べたりできた。札幌では小学3年生はオリンピックミュージアムに見学に行き、オリンピック・パラリンピックについて学習する。今年度、東京オリンピックが開催され、多くの新聞記事が掲載された。これらを結び付けて活動を構成することも考えたが、4学級中1学級での取り組みであったため難しかった。学校として、学年として取り組む体制が提案できなかったことが残念であった。

「新聞に親しむ」ことを目指して活動してきたが、もっとできたことがあったのではないかなと思う1年でもあった。国語「これがわたしのお気に入り」では、3年生で作った作品から一つ選んで紹介文を書く学習をする。図画工作の作品を選ぶ子が多い中、スクラップ新聞を選ぶ子が数名いて、担任が思っていた以上に心に残る活動になっていたことを知って、嬉しかった。

国語学力形成を保障する NIE 実践を考える

夕張市立ゆうばり小学校 富樫忠浩

1 今、学校現場に必要な NIE 実践とは

夕張市立ゆうばり小学校は、平成 23 年 4 月、市内 6 校の小学校が統合されてできた、市内唯一の小学校で、今年開校 10 年目を迎えた。夕張市の中央に位置し、富野、滝の上をはじめ市内各地域から通学する子どもの約 6 割は、スクールバスや路線バスを利用して登下校している。こういった本校のような登下校スタイルは今後の北海道のモデルケースになり得るだろう。

新聞を購読している家庭は本校でも少ない。実践校として新聞をいただくことによって、「新聞が身近にある環境づくり」を実現できている。また校内には、ゆうばり小学校の児童に関する記事の掲示場所がある。そこに立ち止まり、自分や友達の記事を読んでいる子が多い。

実践指定校としての責任として、子供の学力向上に貢献できる NIE について検討する必要がある。検討の際に肝要なのは、「思いつきの実践」にならないこと、教科書教材を支えるものになっているか等の点である。また、その NIE の取組が自ら学ぶ力に寄与するののかも重要である。新聞はタイムリーである。教師がそこにいなくても、新聞があれば自分で学びを深められるようになるまで指導する必要がある。

2 実践報告1「全国学力・学習状況調査」から考える「新聞づくり」の指導

校内研修で国語科の授業改善についての学習会を行う際に、研修部でこれまでの全国学力・学習状況調査のこれまでの問題の分析を行った。分析の一つとして、問題で扱われている「学習用語」をピックアップした。その一部が以下である。

話題、疑問点、情報、関連、印象、要点、説得、取材、数値、立場、提案、記事、目的、報告、資料、対象、回答、地図、関心、分類、図、表、調査、結果、インタビューなど

これらの「学習用語」を教科書指導で 6 年生になるまでに習得・活用できるようにさせる必要がある。NIE は教科書教材を支える可能性が十分に考えられる。

全国学力・学習状況調査には小学校でも中学校でも新聞に関する出題も多い。

例えば、以下のような内容である。

○記事の特徴を聞く問題

- ・「見出し→リード→記事」へとだんだん具体的な記述になっていく。
- ・始めに要点をまとめて述べた上で、具体的な数値を取り上げて詳しく書く。

○記事から「事実」の箇所を抜粋させる問題

○記事にあるグラフの意図を読む問題

○投書にある具体的な内容に対応する抽象的な内容（選択肢）を見つける問題

国語科授業の中で、「新聞記事の構成」を指導しているか、「具体」「抽象」の対応、「連続テキスト」と「非連続テキスト」の対応への指導をしているかが上記の出題で問われているのである。

これらの指導は NIE でなければできないわけではない。しかし、カリキュラムにある新聞を書かせる学習活動（中学年）や新聞記事を比較させる学習活動（高学年）を行う際に、国語学力を形成させるという意識で、そして指導事項を具体化する必要があることが求められている。3年生の新聞づくりは次のように指導した。以下、子供たちに汎用的に活用させる「学習用語」（具体的な指導事項）をアンダーラインで示す。

（1）インタビューの指導

- ① 取材とは「記事の題材を取り集めること」である。
- ② 取材の一つの方法にインタビューがある。
- ③ インタビューを適正にするための知識・技術（「学習用語」）視線，速度，反応
- ④ 模擬インタビュー（なりきりインタビュー）を教室で経験させる。

（2）メモの指導

- ① 子供の思考を保障しないワークシート（静的）ではなく、動的に活用できるメモ（マルチ・プランシート、野口芳宏氏考案）を扱う。
- ② メモを適正にするための知識・技術（「学習用語」）を指導した。
（例）素早く，短く，たくさん，要点
- ③ 模擬インタビュー（なりきりインタビュー）の際にメモを教室で経験させる。

ラベル欄→抽象的な内容を記述

ブランチ欄→具体的な内容を記述

ビニールハウス 中は暑い。 空気の入りが ある。 水の通り道	ハチ 受粉 30日目 鹿児島から	夕張メロン学習 名前 ()	
手間と愛情 1つの株から 3～4個 残りは摘み取る。	本名 タ張キング 父「スパイシー・ カンタロープ」 母「アールス・ フェボリット」		栽培 日をずらす。 5月から8月
共撰 糖度10%以上 ネット40%以上 1kg以上	食べごろ ヘタしおれる。 黄色		

マルチ・プランシート『プランくん』

(3) レイアウトの指導（3年生のため、基本的なレイアウトを示した。）

① 最も伝えたい、最も届けたい内容をトップ記事にさせる。

② 題字を工夫させる。

③ 見出しの説明をし、検討させる。

・ 主見出しは、記事を7～8字に要約する。

・ 5W1Hの要素から決定する。

・ 記事の完成後に決める。

(4) 記事の執筆の指導

まず、5W1Hが記事の柱（骨格）になると指導する。5W1Hを記述させた後、さらに取材で得た情報（「会話文」など）を加えさせた。この要素を指導すると作文が「苦手な子でも見通しを持って記述できる。

(5) 校正の指導

校正にも国語学力を要する。「5W1Hは正確か。」「文体（常体・敬体）は揃っているか。」「見出しは短いか。」など、「学習用語」で評価させ、改善させた。

3 実践報告2「いっしょに読もう！ 新聞コンクール」の取組

昨年度に引き続き、本校では上記のコンクールに取り組んだ。そして、2名の児童（3年生と5年生）が奨励賞をいただき、さらに今年度は「学校賞」を受賞した。

このコンクールには「家族や友だちと記事を共有できる」というよさがある。現行の学習指導要領解説にもあるように「主体的で対話的で深い学び」を実現できるのである。

深い学びは一人では実現し難い。友だちや保護者など、誰かの考えと自分の考えを交流する中で、自分の考えを形成できるのである。

今年度は昨年度以上に、子供たちに育成したい資質・能力を明確にして指導した。

1 この記事を選んだ理由と、記事に読んで思ったこと、考えたことを書く。(150～200字以内)

まず、学校にストックしている各社の新聞から、記事を選ばせた。家で新聞を購読している子は、家で見つけてもよいとした。

感動した記事、「なぜなのか？」と疑問に思った記事、みんなにも紹介したい記事などから記事を選ばせるように指導した。

2 家族や友だちなどにも記事を読んでもらい、その人の意見を聞き取って書く。(150字以内)

「この記事を読んで私は～と考えたのだけれど、〇〇さんはどう考える？」……このよ

うに友だちに自分の現在の考えを伝えさせ、友だちの考えをメモさせた。保護者の考えを知りたい子には、家で質問するように指導し、翌日にメモを持ってくるように指導した。

また、保護者には協力依頼の文書を配布した。コンクールの趣旨や効果を記述したため、多くの保護者に協力していただいた。保護者にもNIEを知っていただくよい機会となった。

他者の考えを引用する際は「」（鉤括弧）でくくるように指導した。また、『引用』とは、自分の作文の中で、他者の文章などを用いることである。」と定義を指導した。また「引用の際には必ず、どこから引用してきたのか『出典』を明示しなければならない。」と指導した。「引用」は過去の全国学力・学習状況調査において3割程度の児童しか理解できていなかった「学習用語」である。適正に指導したい。

3 話し合った後のあなたの意見や提案・提言を書く。(300～400字以内)

意見、提案、提言の定義を指導した後、他者の考えを引用させ、さらなる疑問を書かせた。そして、その疑問から、改めて自分の考えを記述させた。「1」の段階では自分だけの考えだったものが、他者との交流を通して、変容したり、深まったりする。……これは学校ならではの学びと言えよう。

人は文章を読む際、読んでいるようで読んでいない場合が多い。読み流したり、読み飛ばしたりしてしまいがちである。しかし、引用すれば、じっくりその一文と向き合い、丁寧に読むことができる。

アンダーラインで示した「学習用語」を改めて見ると、どれも子供たちの言語活動を上達させるのに必要なものばかりである。これまで国語科授業で指導してきた「学習用語」を確かめたり、活用させたりできる効果がこのコンクールにはある。

これは「家庭学習」の指導になる。選択した記事から引用し、その引用からの疑問に対する答えを推測するという「考えを形成するプロセス」は、「自立した学び」に貢献する。

4 おわりに——NIEで学力形成を保障し、未来の読者を育てよう。——

本稿を振り返ると、アンダーラインで示した「学習用語」が多く登場している。つまりNIEで国語学力を具体化し、指導できるのである。

「新聞を読めば学力が上がる。」……NIEに関する文章の中によく記載されている一文である。学力が上がっている新聞の読者の子供たちは、新聞の読み方を理解し、体得しているのである。また、この読み方自体も学力である。

毎朝、新聞を読んでいるが、子供たちが興味を引くだろうと思える記事は決して多くはない。コンクールに向けて記事を選ぶ際に、子供たちが興味深く読んでいた記事の多くは、地域版の紙面である。自分の身近な場所や知っている人が取り上げられているからである。

つまり、NIEの発展にとって、それぞれの地域にある支局の役割は大きい。新聞は子供たちの資質・能力の育成に欠かせない。そして未来の読者を育てることにもつながるだろう。

2021年度 NIE実践報告書

多種多様な新聞活用～新聞を身近なものに～

登別市立富岸小学校 教諭 貝澤 佑磨

1 はじめに

本校は、NIE 実践校 5 年目となる。これまで実践を行ってきた教諭は異動していき、過去の実践を知る人物が少ない中で、どのようにして NIE の取組を行っていくかが課題となった。よって、今年度は、「NIE 活動を様々な学習に取り入れながらも、この活動を他学年や他の教員に広め、新聞を身近なものとして捉えてもらうこと」を焦点にして取組を行った。

2 環境整備

(1) NIE コーナー

本校のロビーに設置している新聞コーナーの一つ。地方紙から全国紙まで各種揃えており、NIE としての活動はもちろんのこと、学年・教科に関係なく、自由に手に取り、利用することができる。実際は、高学年だけではなく、その下の学年も利用する姿が見られた。



(2) 小学生新聞コーナー

本校の図書室前に設置している新聞コーナーの一つ。学校司書が管理のもと、児童向けの新聞が並ぶ。本校は学校図書が充実しており、図書館利用者が多い。自然と小学生新聞が児童の目に付くことが多くなるため、手に取って見る児童もいるようだ。



図書室内にも、各学級や児童会で作られた新聞が掲示されている。

3 学年としての取り組み

(1) 回し読み新聞

① 記事に対する意見を述べる

グループまたは個人での活動となる。記事を一つ選び、それに対する「事実」、「意見と根拠」、「提案」を専用の用紙に記述する。用紙は、字で埋めることが前提である。



これにより、記事の内容を整理・把握することや物事に意見を述べる力が磨かれる。これにより、学級全体で書く力が伸びたように思う。

② 話し合い、深める

①に慣れてくるころに、より新聞づくり近い活動を取り入れた。個人またはグループで作った①の用紙をそれぞれ持ち寄り、画用紙に張り付けて、実際の新聞のような形にする。「誰の用紙を第1記事にするのか」、「空きスペースには何を書くのか」などを話し合っ、一つの物を作り上げていく。話し合いは非常に盛り上がり、出来上がりも回数を重ねるごとに良いものになっていく。回し読み新聞が完成した後の発表「プレゼンタイム」も盛り上がる。



回し読み新聞の完成形

③ より新聞らしく、見た目にもこだわる

写真は実際の新聞から切り抜き、記事は児童が新しく書き直して、新聞を作り上げる。あらかじめ担当スペースを確認し、そのスペースが埋まるように、記事の量を調節することを特に気を付けた。①～②の実践を経ているため、スムーズに作業が進んだ。ここまでくると、回し読み新聞の完成度が高くなる。イラストやレタリングなどの「見た目」の工夫を凝らしてくる。プレゼンタイムの後は、児童一人一人が投票して、特賞とデザイン賞を決めた。新聞の中に光るものがあれば、特別賞として貝澤賞を設けるなど、児童がより熱をもって取り組めるようにした。

(2) 様々な教科での活用

新聞を学習活動に取り入れることは、国語の時間が多かったが、単元によっては、社会科や図工でも活用できるだろう。また、回し読み新聞で培われた技能が様々な教科で役立つことがあった。その一つが、総合の時間に行った、リーフレットづくりだ。道内の市町村の中から1つをピックアップし、その町の紹介をする。地方紙に取り上げられている地域の話題などから情報を集め、整理して作っていった。回し読み新聞で鍛えたレタリングのデザイン力が発揮され、良い物ができた。

このように、新聞を作ることが目的ではなく、NIEで鍛えた力が様々な場面で発揮できるという発見があった。



(3) 個人新聞の作成

本校の6年生は、修学旅行のまとめとして、個人新聞を作成した。これまでの回し読み新聞やリーフレット作りなどのNIE活動の集大成といえる取組だ。新聞作りに入る前に、書き方のポイントをまとめた資料を配付して、新聞の構成を各自で練ってから制作に入った。児童にとってはこれまでの経験が生き、担任からの添削なしの完全に自力で1枚の新聞を完成することができた。児童の達成感が大きく、保護者に配付をして大好評だった。



4 学級児童有志による取り組み

(1) 学級新聞

私が担任するのは、持ち上がりとなる6年生クラスで、NIEの取組は彼らが5年生の時から始めていた。昨年度の1学期の時には、学級全体で回し読み新聞のみ行ってきたが、2学期からは有志を募って学級新聞作りに着手した。第1号の新聞は、修正箇所が多く、決して上手にできたとは言い難い物だった。そこから、先代のNIE実践教諭たちが残した資料や、実際に学級新聞を作成してきた卒業生にアドバイスを受けながら、修正をしていった。1年が経つ頃には、新聞づくりのルールや見出しの工夫の仕方などを学び、内容だけではなく見た目にもこだわった新聞を作れるようになった。6年生になると、新聞作りに興味をもつ児童が増え、初めは5人でスタートした新聞部が10人までに増えて活動することになった。活発に取組が行えるようになり、週に1回のペースで学級新聞の発行をしていった。すると、他の職員からの注目度が上がっていった。



学級新聞 通常号

学級新聞 特別号

5 他学年への広まり

学級新聞を発行するにあたり、前年度までは学級内と職員へ配布していたが、今年度からは更に4～6年生全員に配布することにした。記事の内容についても、これまで扱ってきた学校全体の話題だけではなく、多くの学年に興味をもってもらえるように様々な先生にインタビューをするなどして、対外的な発信を念頭に活動をしてきた。すると、低・中学年からの注目度が上がり、他学年の方から「学習のまとめ新聞の手本」として取り扱ってもらえるようになった。また、他の職員からも関心を得て、学校全体としても児童会図書委員会が中心となり、「図書新聞」というA5サイズの図書の紹介新聞を書く取組も行われた。



図書新聞

6 おすびに

継続的な取組を行うことで、情報を読み取って整理する力、社会に目を向ける力、批判的思考のもち方等、子どもたちの成長に手ごたえを感じた。教室にとどまらず対外的な情報発信を意識して活動を行ったことで、他学年児童の関心を集めるだけではなく、新規の教員の実践希望者が現れたことは僥倖だった。実践したことはデータ化をし、多くの教員が今後の教育活動に生かせるようにして、来年度の実践へと繋げていきたい。

日本の産業遺産を築いた 日本遺産『炭鉄港』

美唄市立美唄中学校 教諭 鹿糠 昌弘

1. はじめに

かつて日本有数の産炭地として栄えた美唄市は、札幌と旭川の間地点に位置しており、日本七大焼き鳥の一つとして知られる美唄焼き鳥をはじめ、道内でも屈指の生産量を誇る米やアスパラ、また国内屈指の生産量を誇るハスカップなど農産物が豊富である。また、日本遺産にも登録されている数々の炭鉱遺産や、ラムサール条約登録の宮島沼、広大な田園風景などの景観も魅力的であり、美唄出身の彫刻家・安田侃さんの作品を屋内外に展示しているアルテピアッツァ美唄をはじめ、いつ訪れても魅力溢れるマチが美唄市の特徴である。

そのような恵まれた環境の中にある本校は、素直で礼儀正しい子供たちが集う全校生徒176名の学校である。学校教育目標『自律』『誠実』『創造』をもとに「志を持ち、自らの可能性に挑戦する生徒の育成」を重点目標に掲げ、日々の教育実践を積み上げている。

2. 実践内容

①NIE 全国大会 特設授業公開

令和3年8月16日 NIE 全国大会札幌大会において特設授業「日本の産業基盤を築いた 日本遺産『炭鉄港』」をテーマに授業公開を行った。美唄中学校と本会場をオンラインで結び、その様子はオンデマンドでも全国に配信された。また、授業後の研究協議に生徒も参加する形をとった。

本授業では、自分たちが住む町に現存する貴重な有形・無形の地域素材（ヒト・モノ・コト）について「過去・現在・未来」と時系列で考えること、様々な立場で考える（多角的に思考する）ことを重視した。また、教科書に示される公民的分野「地方自治」との関連性を考慮しながら、新聞記事を効果的に活用し、協働的に学ぶ合うことで理解を深めることができた。

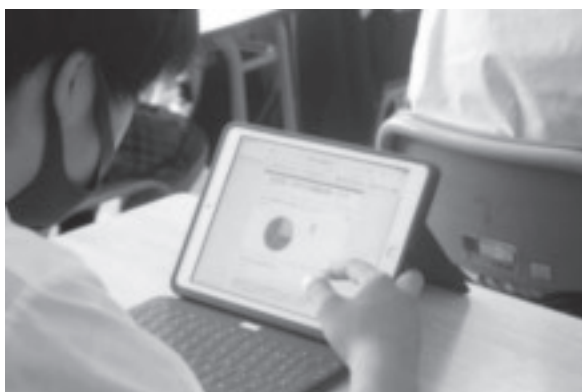
自分たちが住む地域（マチ）のことをよく知り、郷土に対する“愛着”と“誇り”を持つことは極めて重要であり、それを土台として次世代を担う生徒たちに「主権者」として自覚を促すことが大切である。

今後も生徒一人一人が様々な事象を「自分事」（社会と積極的に関わりを持つ）として捉え、社会に対する「見方・考え方」が広がっていくことを期待する。



ICT を有効活用し、教育的効果を高めていく

これから予測不能な未知の世界を生き抜くために必要な資質・能力を育成するためには一人一台端末の利点を最大限生かしながら学習を進めていくことが必要不可欠な要素である。生徒の学習意欲を高め、国際化、情報化、環境の変化、少子高齢化などに対応し、主体的に問題解決に取り組もうとする態度を育てることが教師の責務である。急激に変化する社会の中で、心豊かに生きるためのコミュニケーション能力や情報活用能力を高めるとともに、環境を保全し、より良い環境を創造する態度や、共に励まし合って生きていこうとする協働の心などを育てていきたい。北海道には豊かな自然や文化、観光産業等の教育資源が数多く存在し、意外と知らないところにも地域の宝が眠っている。ふるさと教育・観光教育の充実を図りながら、多様な地域学習を積み重ねることで、これからの社会を担う生徒たちに、主体的、創造的に生きていくための資質・能力が確実に身に付くことを期待する。



②新聞記者をゲストティーチャーとして

近年、インターネットの優位性が高まり新聞を読む機会が極端に減っている現状ではあるが、今後も「情報活用能力」を高めていくためにそれぞれの特性（長所）を生かしながら教育を推進していく必要がある。

そして、新聞記者も含め多様な方々との「つながり」を大切にし、教育効果が高まるような工夫をしていかなければならないと考えている。

本実践では全国紙（毎日新聞）と地方紙（北海道新聞）の比較を行い、その相違や印象について意見交流を行った。また、新聞記者から新聞の構成や取材する際の心得、新聞ができるまでの過程、各紙の特徴などを学び、「情報を発信する立場」という視点で学ぶことができた。これまでの「読者の立場」からこのような機会を通して異なった視点で記事を見つめ直すことで、考えを深めることができたことは大変有意義であった。



③地域新聞づくり

本校の「総合的な学習の時間」では、『地域学習～ふるさと美唄を学ぶ』をテーマに中学校3年間の教育課程を系統的に編成している。1年生では「地域に触れる」、2年生では「地域をより深く学ぶ」、3年生では「地域の良さを発信する」というテーマを設定し、「ふるさと教育」を学校全体で取り組んでいる。学んだことをまとめる発表物については学年の実態に応じて「地域新聞」や「フォトブック」「美唄PR動画」等を作成し、市内郷土資料館に展示したり、ホームページに掲載するなどして、保護者や地域住民にも広く発信している。

また、美唄市教育委員会が推進している「美唄学」にも貢献し、学校と地域・自治体との相互協力による学習において生徒たちは豊かな体験や確かな学びを得ている。

3年間を見通した学習を進めることで生徒の郷土への理解が愛着へと繋がり、社会参画への意識が高まっていくものと確信する。

【地域新聞】



④日常的に新聞に触れる

日常的に活字に触れることはとても大切なことである。そこで空き教室を利用して、新聞を自由に閲覧できる環境を整備した。新聞を通して様々な情報と巡り会い、社会状況を把握した上で自分なりに考えを持つ。また、普段の何気ない仲間との会話の中で社会的事象を様々な角度から捉え、他者の考えを知ることによって自己の思考も深まっていくことが大いに期待できる。

そのような体験の積み重ねが、新しい視点から物事を見る力の育成に繋がり、さらには知識や思考の幅を広げ、そして本質を見極める力を身に付けていくことができると確信する。



⑤北海道みんなの日(道みんなの日)

少子化による学級数減により学校には空き教室が増加しており、そのスペースを有効活用しながら教育的効果を高める方策がないかを考えた。そこで毎年7月17日『北海道みんなの日(道みんなの日)』に着目した。

「道みんなの日」は北海道の魅力と価値を再発見し、北海道を誇りに思う心を育み、より豊かな北海道を築き上げることを期する日として制定されたものである。

毎年この日をきっかけに、今一度、北海道に愛着や誇りを持ち、北海道の魅力を発信する機会になることを期待する。本校では「炭鉄港」に関する掲示物はもちろんのこと、北海道開拓・アイヌ文化と歴史、地元「美唄」に関する資料や写真の掲示、そして世界遺産に登録された北海道・北東北縄文遺跡群など子供達の学びや興味が広がっていくような工夫を凝らし、各教科・領域との関連も考慮しながら意図的なレイアウトに作り上げた。

その際、これまで蓄積してきた新聞の「関連記事」を同時に掲示することで、社会的事象に対する関心をより高めていくことができた。



【廊下掲示の充実】

3. まとめ(成果と課題)

今年初めてNIE指定校として実践に取り組んできた。「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業改善に向け、新聞とICT活用のベストミックスを図りながらそれぞれの長所を生かすよう努めてきた。新聞は自らの知識力を高め、俯瞰力や大局観を養い、ICTは学びの「可視化」や「時間の有効活用」(タイムマネジメント)という面で大きな効力を発揮する。また、両者を効果的に活用することで必然的に「個別最適な学び」と「協働的な学び」を実現することができ、身に付けるべき「資質・能力」を確実に育むことができることを再認識した。



新聞から情報を読み取る力をつけよう

札幌市立北辰中学校 教諭 面 由佳

1 はじめに

本校は生徒数550人を超える学校であり、札幌駅より北に地下鉄2駅のところに所在した中学校である。今年度よりNIEの実践指定校となり、2学年の「総合的な学習の時間」に授業実践を行った。新聞閲覧については、2学年のみならず多くの生徒に新聞と触れ合う機会を設けるため、職員室に近い3学年中心のフロアと2学年中心のフロアに各社の新聞を展示し、生徒が自由に読める環境を作った。(見開きの新聞台は用務員さんが作成)また、月ごとに新聞社を変え、閲覧できるようにした。



2 実践紹介

(1) 情報スキルを身に付ける (3時間)

新聞に触れる機会の少ない生徒が、新聞に触れ書かれている情報を読み取る力を身に付けるところから始めた。

【1時間目】

[illegible]

①新聞の構成について学んだ。

(例：見出し、リード、キャプションなどの新聞用語)

②新聞に書かれている内容を観点を決めて読み取った。

1人新聞紙2部(出版社別)を配布し、左記プリントの項目を記入後、考えたこと、初めて知ったことなどを記入した。

【2時間目】

①前時に記入したプリントをもとに、グループで自分の考えを発表し、交流した。

②同じ出来事を扱った記事を2社比較し、気づいたこと・考えたことなどを記入し学級内・グループ内（学級裁量）で発表し交流した。

【3時間目】

①各社の新聞を読み比べ、新聞のなかから疑問に思ったこと・質問したいことを挙げ、下記プリントに記入した。

北海道新聞社N I E推進センターの中川様に書面で答えていただき、新聞がどのように情報を扱っているかなどを学んだ。

《③生徒からの質問一部》

（写真について）

- ・白黒と色つき写真のちがいは何ですか。
- ・記事に写真（図やグラフも）を付ける記事と付けない記事の違いは何ですか？
- ・新聞に載せる写真を選ぶ基準は何ですか？
- ・一般の人から写真を借りることはありますか？

（トップ記事について）

- ・トップ記事に選ばれる記事の決め手は何ですか？

（見出しについて）

- ・文字数を数えたら10字前後だったのですが、決まりはあるのでしょうか？

（天気予報について）

- ・なぜ3時間ごとに天気は載っているのですか？
- ・なぜ、北海道の新聞に東京の天気が載っているのでしょうか？

（2）情報スキルを身に付ける （2時間）

【1・2時間】

12月2日に北海道新聞社の「まわし読み新聞」の講座を受講した。当初の予定では9月に計画をしていたが、緊急事態宣言が出ていたため延期し、体育館にて感染対策を十分に行い実施することができた。

北海道新聞社NIE推進センター中川様から総合的な学習の時間の課題『何のために働くのか』についてのご講和を頂き、『まわし読み新聞』の取り組みを6～7名のグループで行った。

北海道新聞社から生徒1人に3部（北海道新聞2部+まなぶん1部）の新聞を頂き、その中から自分が気になった記事を集め、それぞれが持ち寄って新たに1つの新聞を作成した。新聞作成後、北海道新聞社の方々が選んでくださった数班が全体の前で話し合いの活動の様子や新聞作成の意図などを発表した。



後日、2学年の廊下に掲示し、全グループの作品を見ることができるようにした。

3 終わりに

普段新聞に触れる機会が少なかったが、校内に展示することで新聞記事を目にする機会が増え、休み時間等に新聞についての話題で話している生徒の姿を見ることができた。新聞社への質問を考える授業では教師が新聞についての質問例を20個ばかり挙げていたが、生徒から出てきたのは教師の質問例とは違った多角的な視点で新聞をとらえていたことがわかった。クローンプックの導入により、インターネットから情報を得る機会は増えてはいたが、新聞に触れることでデジタルの記事と活字としての新聞記事を比較することができた。

また、コロナ禍でなかなか学年が集まって課題に取り組む時間やご講演を聞く時間がもてない中で、今回の北海道新聞社の出前講座「まわし読み新聞」の活動は大変貴重な時間となった。

時間の都合により、今回は取り組むことができなかった企画があり、次年度以降に内容を精査して実施したいと考えている。

*今年度未実施企画

【自分だけのオリジナル新聞づくり】

①自分が調べたい観点を決める。

(例：お菓子に関すること／野球に関すること／アニメに関すること／アイドルに関すること)

②各社の新聞から観点に関する記事を集める。

③集めた記事を切り貼りして1つの新聞を作る。

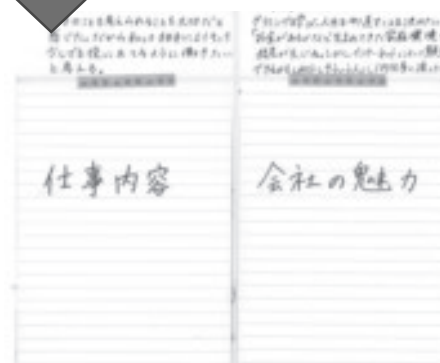
④作成した新聞に自分の「編集後記(感想文)」も付ける。

⑤交流する。



*生徒レポート

- ・上にタイトルを書いた紙を貼り、発表時にめくるスタイルにしている(右写真)
- ・発表時には拡大機を使用



新聞に親しみ、教室と社会をつなぐN I E ～授業での活用と読解力向上を軸にした1年目の取組～

札幌市立あやめ野中学校 教諭 近野 秀樹

1 はじめに

札幌市立あやめ野中学校は札幌市中心部より南西の市街地に位置し、地下鉄駅至近で大型商業施設と隣接しつつ、農業専門学校の「八紘学園」の牧草地とも隣接し、教室の窓からはキツネの姿や、秋になると牧草ロールを丸める様子が見られる特色ある環境に立地している。通常7学級・特別支援2学級で全校生徒 244 名(2022・1月末現在)と市内では比較的小規模の中学校である。

NIE全国大会札幌大会への道徳科授業公開を機会に、NIE実践指定校の初年度として、学校教育に新聞を有効活用すべく、道徳科以外にも総合的な学習の時間、国語科、社会科、技術・家庭科、保健体育科などにおいて、授業中での新聞活用を実践しているところである。

2 実践例① 道徳科での活用(全国大会公開授業の実施)

今年度からの NIE 実践に取り組むきっかけとなった「第26回 NIE 全国大会札幌大会」での道徳科公開授業について紹介する。

ア. 主題名(内容項目)

「尊い命をつなげる」(D生命の尊さ)

イ. 主たる教材として活用した新聞記事

本授業では読売新聞の記事「高校生 医療現場へ」(2017 年9月 25 日)を主たる教材として活用した。

記事の内容は、重症心不全治療や心臓移植手術について高い実績をもつ大阪大学医学部附属病院で、医師を目指す高校生が心臓移植手術の見学、移植を待つ小児患者とのふれあい、講義、縫合体験などを5日間に渡って体験する濃密な「早期医療体験プログラム」を取材した特集記事である。

心臓移植手術立ち会いの際は、医師技術力や移植された心臓が拍動を始める様子などに圧倒されるばかりで、命の重さやドナー家族の思いなどを考える事までは至らない生徒たち。しかし担当医の講義の中で、心臓移植の待機中に脳死となった女兒の家族が、一転して臓器提供を決断した事例を紹介されたことをきっかけに、生徒たちが命の重さ、尊さなどについて考えを深める様子が取材されている。

記事が医師や患者ではなく中学生にとって年齢が近い高校生を中心に取材されており、授業の中で生徒が自我関与をしながら考えを深められる可能性があり、また命と向き合う医師・患者やその家族の「生き方」が、新聞記事らしいリアリティをもって伝わることから、優れた教材としての素質を感じ、本実践授業の教材とした。

ウ. 本時の目標

早期医療体験プログラムで心臓移植手術立ち会いなどを体験し、命の重さ、尊さについて考えた高校生の姿を通して、生命の尊さについて考えさせ、自他の命を大切にしようとする心情を育てる。

エ. 本時の展開と授業記録

本校の道徳科では、全学年教諭の共通理解のもと、展開の中で可能な限り「『動き』のある授業」*に取り組んでおり、本授業もこの授業法を取り入れた展開で実践している。

「『動き』のある授業」は、教材の場面を再現する体験的な活動である「動き」Ⅰと、ホワイトボードとマグネットを活用した対話・交流を行う「動き」Ⅱから構成される。

*平成29年から令和元年に行われた日本道徳教育学会、日本道徳教育方法学会、日本道徳科教育学会で、磯部一雄・杉中康平・近野秀樹が発表した授業方法。「場面の再現化」やホワイトボード・マグネットを活用した「対話・交流」によって、生徒の「心」を動かす、主体的・対話的な授業。

学 習 活 動		教 師 の 働 き か け と 実 際 の 生 徒 の 反 応	留 意 点
導 入	記事の題材である「心臓移植手術」に関心をもつ	○「心臓移植手術」について聞いたことはありますか。 →心臓移植の概要について動画視聴（YouTubeより）	患者の傷口等の描写はカット
展 開	教材を読む。 教材の内容を短文文化によりおさえる。 生徒の前理解を表出させる「動き」Ⅰ	記事の教師範読 「医師を目指す高校生が大阪大学医学部附属病院で心臓移植手術を見学した」という新聞記事。 ○記事で印象に残ったところや感想を教えてください。 ☆ドナーが見つかったときの患者の家族の様子を再現する。 ・「やった！」などと喜ぶ ・とにかく驚く。 ・（電話を切った後）号泣する。（同意5名） ・とにかく急いで準備。まだ助かったわけじゃないから。 ・小さくガッツポーズする。 ・嬉しいけど、不安もある。 ・大喜びするのは、ちょっと違う（同意多数） ☆（移植待ちから一転、ドナーとなった女兒の話聞いて、高校生たちが）「生徒の目の色が変わった」様子を、心のつぶやきや表情で再現する。 ・（目を見開いて）そんな事があるのかと驚く。（2名） →ドナーも「子ども」だということを考えていなかったから。 ・真剣な目つきになる。	教師が判読する。 再現した生徒にその時の気持ちを聞く場合があるが、詳しく理由解説させる必要はない。 適宜、周囲と「雑談」と称した小グループ交流を行う。
	自我関与を深める「動き」Ⅰ 他者との対話により広い視野から多面的・多角的に考える「動き」Ⅱ	◎高校生たちは、このプログラムを通してどんなことに気付いたと思いますか。 ・命の重さ、大切さ（多数） ・医師や医療の責任の重さ ・ <u>円満ではないということ</u> ・愛、ドナーの気持ち ・命を預かるということは <u>こういうことなんだ</u> と思う。 ※ ホワイトボードと磁石（もっと詳しく聞きたい：青、共感：緑）を基にした対話で考えを深める。 ※ 閲覧と磁石貼付時の密を避けるため、ボードを近づけ自席で見る。	小型ホワイトボードに一人ずつ意見を書き、掲示する。 <u>下線の部分</u> は他生徒からの問い返しにより対話が生まれた部分。次ページに記録あり
実際の意見（ボード）			
終 末	・文章化（感想）	今日の授業を通して、大切にしたいと思ったことをワークシートに書く。	

・ホワイトボードとマグネットをもとにした対話の実際

(S:生徒、T 教師。S_xは授業撮影時、名前の代わりに呼称とした生徒の番号)

①S₂₅「円満ではないということ」(青【質問やもっと詳しく聞きたい】:12名)

→質問 S₉「円満ではないというところを、具体的な内容を詳しく教えて」

→S₂₅「ドナーの家族とか、あまり喜んでないと言うか、悲しんでいる人もいるので、円満ではないかなー、と。」

②S₂₃「命を預かるということはこういうことなんだろう」

(青【質問やもっと詳しく聞きたい】:6名)

→質問 S₇「『命を預かるとは、こういうこと』の、『こう』の説明がほしいです」

→S₂₃「命を預かるということは、(お医者さんの)責任が大きいということです」→6名納得

→T「先生からもみんなに質問。これは、誰の命を預かって
いるんですか？お医者さんは。」→S_{6他}「ドナー」

→T「ドナーは手術してもしなくても、亡くなっちゃってるのでは？ドナーはもう助からないんじゃない？」

→S_{多数}(ざわざわ… 周囲と少し相談する様子が見られる)

S₆「ドナーも患者も」 S₁₂「二人分」→T「ドナーも患者も？二人分？」(S 多数うなずく)

→T「え、だって片方はもう亡くなっちゃってるんだよ？」(S:4人ほど同時に意見を言い、少しざわつく)

→T「ちょっと周りと喋って(少し時間をとる)」(S:近くの人と意見交流)

T「脳死って、絶対に助からないんだよね？心臓を取ってしまったら、死んでしまう。だから、もう亡くなった人からしかもらえない、そういう話だったはず。」(S:さらに意見交流活発に)

(指名され)S₁₉「その、一個の心臓あるじゃないですか。(手術が失敗したら)どっちも助からない。その心臓で、その…(考えはあるがうまく言えず、先程話していた S₁₈を見る)」

→S₁₈「脳死している人の心臓を、患者にあげるか、あげないか。あげられなかったら、その心臓も死んじゃうじゃないですか」→T「ほうほう。『あげるって決めた』ことも、背負ってるってこと？」(S 多数うなずく)

→(指名され)S₅「心臓を移植して、そして貰うっていうと…臓器は、その人の一部だから…(隣を見る)」

→(隣の)S₁₇「さっき話してたのは、脳が死んで、心臓を移植して、患者が助かるということは、『心臓はまだ生きてる』から、あげれるんじゃないか。心臓も一つの命なので、(責任をもって)預からないと、無駄にしちゃうんじゃないか。」→T「なるほど。心臓も生きてるんじゃないか、という意見ですね。(さらに交流を指示)」

→(指名され)S₁₆「僕はなんか、心臓自体が本当に生きてるのか、って言われると、ちょっとわかんない。でも…(隣のS₁₅を見る)」

→S₁₅「心臓は、人間です。(きっぱり言う)」→T「おお、真っ向対立した意見もあるね。みんな雑談続けて」

S₁₇「心臓は、まだ生き続けるんじゃないか」

S₂₄「水泳選手の心臓を移植したら、水泳がそこまでだった(好きじゃなかった)人が、泳ぎたくなったりとかっていうのを聞いたので、心臓にもちゃんと人の意識とか、宿ってるんじゃないかって」

S₂₁「心臓を移植することで、生きていられる人もいるので、心臓があるだけで(命じゃないか)。」

S₁₇「そういう感じ。それを言いたかった。命を送ってる。リレー。」

---(後略)



3 実践例② 総合的な学習の時間での活用(学校司書との連携)

本校では、総合的な学習の時間において、特別支援学級も含め全学年で冬季間に実施した「SDGs課題探究学習」の教材として、本校学校司書の協力を得て「SDGs×新聞×本」コーナーを設置し、探究学習に生かしている。NIE 全国大会での実践発表「学校図書館とNIE」を参考に、設置場所を図書館前ではなく、全校生徒が通る1階の玄関前ホールとした。司書が内容・ジャンル分けした各紙のスクラップを掲示し、スペースに生徒が感想や疑問を付箋で貼り付け、参考になった付箋をシールで投票する形式としたことで、活発な交流が生まれ、探究に活かす学習となることを期待している。



4 実践例③ 短学活等、授業以外での活用

1階ホールには新聞閲覧台4面と、新聞架を設置している。1階を生活階とする1学年生徒を中心に、休み時間など普段から新聞記事に触れ、記事の内容について交流する姿が見られている。

1学年を中心に、朝学習の時間を利用して毎週「よみとき新聞ワークシート」(理想科学工業㈱提供)に取り組んだり、短学活での1分間スピーチを「最近気になった新聞記事」の紹介と感想・意見を交流するなど、日常的な新聞活用を促し、実社会での出来事に興味をもって調べたり、文章読解・表現の育成に役立てるための取組を行っている。読み解き新聞の記事部分をChromebook(GIGA スクール構想における一人一台端末)で配布・閲覧をし、ワークシート記入はプリントで行ったり、単学活でのスピーチを新聞を見ながら行いたい生徒は閲覧台の新聞記事を端末で撮影したりと、端末との効果的な併用をしながら NIE の取り組みを推進しているところである。

5 実践例④ その他各教科での活用

4項までで紹介した以外にも、各教科では随時授業に役立つ記事を紹介したり、直接記事をもとにした教材を作成したりといった実践を行っている。

国語科でのレポート課題、保健体育科でのレポート課題、技術・家庭科ではコロナ禍における新たなマルチ商法の手口の記事、社会科では社説の読み比べからメディアリテラシーの育成、および単元に関わる時事の話題を紹介する、などと教科での学びを実生活・実社会とつなげ、実感をもって受け止めるのに効果的であると感じている。

6 まとめ

道徳科の授業実践では、実社会で起きた出来事として新聞記事を紹介することで、生徒がリアリティをもって自我関与し、生命の尊さについて考えを深める様子が見られた。道徳科の教材として書かれていない新聞記事を教材化して授業を行い、有効かどうかを検証することは簡単なことではなくハードルは高い。しかし、道徳科の教科書にも新聞記事を利用した教材が多数収録されており、そういった教材は活用しやすい。また、授業の補助教材として記事を示すなど「主たる教材以外」での記事活用も含めると、意外と活用場面は多いと考える。

本校では以前から散発的に授業での記事活用がされていたが、NIE 実践校として複数の新聞記事が生徒のもとに届くようになり、より活用場面が広がっている。また、以前より新聞に親しむ生徒が増えたことにより、新聞記事を教材化したときの苦手意識の軽減や、学習意欲の喚起につながっているのではないかと考える。

日常的に新聞記事に触れる取組では、閲覧台近くに教室がある1学年以外の生徒の利用場面が限られてしまうことや、「いつでも読み返せる」「様々なニュースに万遍なく触れられる」などの紙の新聞の良さをより生かす取組を行うことなどを、NIE 実践2年目以降の課題と捉え、より効果的な実践を検討しているところである。

「問い」を発する子どもの育成を目指して

札幌市立真駒内中学校 教諭 山田 耕平

1 はじめに

本校では、目指す子ども像を「常に自ら進んで学習し、自己の可能性を追い求める生徒」と設定し、取組の最重点を『見通す』『振り返る』学習活動の充実」としている。昨年度の生徒アンケートでは、「学校は授業中、課題に対して、ノートやワークシートに自分の意見やまとめを書いたり、ペアやグループで活動を行うなど、生徒の学力向上に向けた取組をしている」と回答した生徒が、92.3%となど、教科の枠を超えて「振り返る」学習活動の充実に向けた成果が表れ始めている。

上記の学習活動をさらに充実させるために、今年度はじめて実践指定校として「新聞記事を活用した教育実践」を学校全体で取り組んだ。

2 実践内容

◇次の学びのステップにつながる新聞を活用した学習

課題を解決する思考力・判断力・社会参画力など、いわゆる「21世紀型学力」が今ほど子どもたちに求められている時代はない。

特に、判断力では、「筆者の主張をどう思うか」「賛成か反対かを自ら判断する力」が求められている。そんな中で、新聞ほど、社会に対して「なぜ?」「どうして?」と「適切な問い」を発することのできる教材はない。新聞は、教科書と現実社会をつなぐ窓なのである。

新聞を活用する際、決して表面的に新聞を扱うのではなく、

教科書で知識・技能を習得し、身近な情報満載の新聞を「地域の出来事」「発展的教材」として「問い返し」の場面等で扱うことで問題解決型学習を充実させていくのである。



- ・新聞記事を拡大して提示(扱う部分を黄色く表示)。
- ・GIGA メモ：PDF化した記事をGoogle Classroom等を活用して、配布/活用することも可。

以下の指導案は、第26回NIE全国大会札幌大会 新しい学びを創るNIE ～家庭、教室、地域をむすぶ～で公開した「中学校 社会科 地理的分野 2年生「北海道地方」～豊かな自然を生かした観光～」の実践である。なお、本時で使用した「新聞記事」については、4つである(記事の添付については省略する)。

◇いずれも、北海道新聞データベースを活用(PDF)。

※授業等で使用したい記事を検索できます(札幌市内の学校は無料で使用可)！

- ✚ 新聞記事【餌やり罰金】(2021年3月24日 北海道新聞)
- ✚ 新聞記事を提示【ニセコの源泉が不足】(2020年8月2日 北海道新聞)
- ✚ 新聞記事【自然・歴史・共生の機運 知床】(2018年5月4日 北海道新聞)

本時の展開

(1) 本時の目標 (5/6 時間目)

- 北海道の観光業の持続可能な発展に向けて必要なことについて考察し、表現することができる。

【思考・判断・表現】

	学習活動	教師の働きかけ	○新しい学び ◎評価
導入 5分	■写真に共通していることは、何かな？ (世界自然遺産に登録されている「知床半島」や「摩周湖」を提示)。 ・大自然。北海道を代表する観光地。世界自然遺産に登録されている。 ■これは、何を表すグラフかな？ (北海道を訪れる外国人観光客の数のグラフの提示)？ ・観光客の数・北海道を訪れる外国人観光客の数 	- 写真を題材に、北海道の観光資源の共通点を考えさせる。 - 北海道を訪れる外国人観光客の数のグラフであることを補足しながら、観光客が増えていることを確認する。	
展開前半 35分	課題：北海道の観光業の持続可能な発展に向けて、必要なこととは何だろう。 ◇<u>新聞記事の内容【餌やり罰金】</u> (2021年3月24日 道新)を確認する。 観光客は、どんな気持ちで餌を与えたのかな？ ・かわいい。・餌を食べる様子を見たい。撮影して、SNSに投稿したい。 餌やりの罰金に、賛成ですか、反対ですか。 ◆賛成派【観光客側】【行政側】 例 【観光客側】…餌付けされた熊がどうなるかを考えない観光客が悪い。 【行政側】…注意しても変わらなかったから罰金はしょうがない。 △反対派【観光客側】【行政側】 例 【観光客側】…罰金はあまりにもやり過ぎだ。もっと話し合っ対策を考えるべきだ。 【行政側】…これ以上ヒグマが増えて、農作物への被害が大きくなるの困る。罰金とは違う方法で対策を考えるべきだ。 北海道の自然(動物・植物)に対する市役所や観光客の共通の思いとは、何だったのだろうか。 ・北海道の自然を守りたい ・北海道の豊かな生態系を維持したい。 ・北海道の自然を守りながら、観光を楽しみたい。 そもそも、なぜ(何を求めて)、観光客は北海道を訪れるのかな？ ・北海道の雄大な自然 ・北海道の雪や寒さ ・新鮮な食べ物 ・貴重な動植物 ↓ 「豊かな自然環境」を求めて北海道を訪れている。 【問い返し】 本当に生態系の保全と観光の両立ができるのかな？	・<u>新聞記事【餌やり罰金】</u> (2021年3月24日 道新)を通読する。 ・ネームプレート(観光客側に赤の付箋/行政側に青の付箋を貼る)を利用し、立場を確認する。 【個人思考 3分→全体交流 8分】 ・それぞれ立場は違うが、『北海道の豊かな生態系を維持したい』という共通の思いに気付かせたい。 ※「豊かな自然環境」を求めて北海道を訪れていることを確認する。 ・「北海道観光の現況2020」(北海道経済部観光局)を提示し、観光客別の旅行目的を確認する。 ※自然環境と共存した観光の発展の在り方についてより深く考えさせたい。	
展開後半 5分	◇<u>新聞記事を提示【ニセコの源泉が不足】</u> (2020年8月2日 道新)。 ■外国資本がなくなるとニセコの経済はどうなる？ ■外国人観光客は減少するのでは？ ◇「知床五湖周辺で設置された高架木道」の写真を提示 ■歩道は、どうなっているかな？ ・植物が踏み荒らされないような工夫がなされている。 ◇<u>新聞記事を通読する【自然・歴史・共生の機運 知床】</u> (2018年5月4日 道新)。	・写真「知床五湖周辺で設置された高架木道」や<u>新聞記事【自然・歴史・共生の機運 知床】</u> (2018年5月4日 道新)を提示することで、エコツーリズムの取り組みが進められていることに気付かせる。	8 評価について 【思考・判断・表現】 ○○北海道の観光業の持続可能な発展に向けて多面的・多角的に考察し、意見交流を通して、自分の考えを深めることができる。(ワークシート・発言)
終末 10分	・今日の授業の振り返りをワークシートに記入する。 まとめ：豊かな自然を観光業に生かすとともに、<u>自然保護との両立を目指した観光業(エコツーリズム)を模索</u>することが大切である。	・ノートにまとめた内容を交流し、必要に応じて自分のまとめに付け加えるよう働きかける。	

■ 成果

■ 課題

[illegible]

水産業では、全国漁獲量の過半数を占める。以前は、北洋漁業と太平洋漁業の盛んなところから、今では大西洋に北上して行われるまで、太平洋漁業が主で、アワビ・イカリなどが主だったとされている。しかし、自然的資源減少の懸念により、この漁業は大きく制限された。そのため、「人工的な方法」でも育てる「養殖漁業」が、魚種・相場で見て海に近い近海漁業に大きく傾き方を多変した。特に養殖魚種のほとんどが、栽培漁業はすべてアワビが多い。つまり北海道の特産品は、「寒さと大きな面積」を利用した産業を行っている。

④ 稲作は、石狩平野を中心に、全国2位の生産量を誇るが、泥炭地のため栄養成分が少なく、コシが硬いという理由で、間作や露作や田舎米、米麦と土地改良をした上、果実・野菜と北方作物も、アメリカンクローと呼ばれる。20日は、作物を育てるのに通じた土壌改良農士、3月には、なつたがしやめダツルなどの品種改良をしたことで、しかし近年米の収穫量が減少している。その理由は、米の生産量を抑える環境政策や米の輸入の自由化、経費不足にある。

北海道は観光に力を入れている。しかし近年、自然の動物の生態の問題、水不足の問題、ラッコが下ってきている。そのため、自然保護と観光との両立「エコツーリズム」の推進に注目が集まっている。地元の人と観光客の協力によって持続可能な観光を実現させている。

66

◇思考を深め、発信する

「政治」「経済」「地域」等に対して「なぜ？」の「問い」を育てる実践として、「書き慣れノート」を紹介したい。これは、教育評論家の尾木直樹先生が行っている実践を応用したもので、新聞記事を切り抜いてノートやワークシートに貼り、自分の意見を書き込む学習活動である。具体的には、記事を読んで、自分が面白いと思う箇所に「波線」、何を言っているかわからない箇所には「?」、自分の意見とは違うと思う箇所には「×」を付けていく。そして、印をつけた部分について、「なぜ、そう思ったのか」意見を書いていくのである。

卓上四季

「下に、下に」。道中その声が多く、沿道にいた者は行列が通過するまで上座を余儀なくされた。江戸時代に行われていた参勤交代である。家臣が多ければ行列は長くなる。加賀百万石の前田家は4千人に及んだというから、通り過ぎるまでのかなりの時間、頭を下げて続けねばならなかった。1年おきの行列で各藩も大きな負担を強いられた。紀州徳川家の場合、和歌山から江戸までの行程で1万3千両近くかかったとの記録がある。今で言えば約13億円。これは莫大の金として、大盤振る舞いは御用金に費したが、それだけ藩の財政を圧迫した。安藤優一郎著「大名行列の秘密」(NHK生活人新書)から引いた。カネを使わねば幕府を起せなくなる。その幕府の腐敗通、徳川の安泰は長く続いたが、ついに各藩の領民に回された。都市へヒトとカネが集中する一方、地方が疲弊する現代日本と対比して見える。その参勤交代の逆パターンを解明する著者の豊彩崎さんが喝えている。「田舎への参勤交代」だ。経済偏重で便利さはかり追いかける都会人を地方の自然と向き合わせ、人間本来の感性を取り戻させることが目的という。働く場の確保を難しい問題はあるが、都会と地方を頻りに往来すれば新たな市場も生まれよう。あれだけ声高に叫ばれていた「地方創生」がなすも中、豊彩崎さんの発想は魅力的だ。 2016.5.23

新聞記事【卓上四季】
(2016年5月23日 北海道新聞)

圧迫した
だけなら
一つの藩
でいいの
ういのお金
があったのが。

お金はどこ
に保管し
ていたのか。

4千人がおるまでの
時間はとても長い
った。

記事の感想
「通り過ぎるまで、頭を下げて続けねばならなかった」という所から、幕府の力はすごかったという事を改めて思った。→ 殊更、紀州徳川家もかなりの負担を強いられ、幕府を起すのにもよった。

「書き慣れノート」
実践例

□実践における成果と課題

・成果

週に1度「書き慣れノート」の課題を出し、授業の中で、交流した。その結果「先生の新聞を扱う授業は楽しい」という声が聞かれるなど、子どもたちは、「書き慣れノート」を通して、自ら学ぶ楽しさに気付く様子が伺えた。

R3 全国学力学習状況調査において、「新聞を読んでいますか」という質問に対し、肯定的な回答が、23.4%と全国・全道平均を大きく上回っている。

・課題

R3 全国学力学習状況調査において、「新聞を読んでいますか」という質問に対し、「新聞を全く読まない」という生徒が半数近くいる。

そのため、学校全体として、授業等での活用はもちろんのこと、昼休みや放課後の読書、学校図書館・地域の図書館の利用の促進等を通して、新聞を読むことが、地域や社会の動きを知る一つの手段であることを実感させたい。

学校が目指す生徒像の実現に向けた新聞活用

平取町立平取中学校 教頭 金丸 剛輝

1 はじめに

平取町は日高西部に位置し、トマト「ニシパの恋人」やブランド牛「びらとり和牛」が特産の町である。町を貫く沙流川上流には、特色あるアイヌ文化を今に伝える二風谷地区があり、伝承事業の取組も盛んである。

平取中学校には、町内の4つの小学校から生徒が集まり、今年度は全校生徒99名が学校生活を送っている。地域の特徴として、アイヌ文化との結びつきが強く、アイヌ文化に対する偏見も少ない。身近にアイヌの文化が存在するため、アイヌ語や工芸技術などの伝統が日常に違和感なく溶け込んでいると言える。特色ある教育活動として、全ての学年の「総合的な学習の時間」の教育課程にアイヌ文化学習が位置付けられ、アイヌの血を引く地域住民の方々を講師に招き、木工や刺繍の技術等を体験的に学んでいる。一方、先進的なICT設備の整備も進められ、校内LANや各学級に設置された電子黒板など、情報化社会に適応した教育活動も可能な、環境整備がなされている。伝統文化と、これから求められるITを活用した学びを、バランス良く進められる恵まれた環境である。

本校の教育の柱の1つに「言語能力の育成」がある。各教科の学習活動には積極的に話し合い活動が取り入れられ、「書く活動」も盛んに行われている。生徒は、これらの活動によって、言語コミュニケーション能力を高めている。しかし他方、各種学力調査の結果を見ると、「読む力」に課題があるとされている。文章から適切に情報を読み取ったり、筆者の意図を捉えたりすることが苦手な傾向にあるとのことである。

今年度、本校がN I E実践校の指定をいただくことになり、新聞というツールを活用して、こうした「弱点」を少しでも克服できたという期待を持ちながら、1年目の取組を進めてきた。



本校の外観：ツートーンのおしゃれな校舎は、日当たりが良く、明るい雰囲気です。

2 N I E 実践指定校 1 年目の取組の実際

<主な取り組み>

- (1) 気軽に新聞を読める環境づくり…新聞配架・掲示の工夫
- (2) 学校祭「壁新聞部門」の復活と新聞の活用…壁新聞の「お手本」として活用
- (3) 主に国語科における教材・資料としての新聞活用…情報源としての活用

(1) 気軽に新聞を読める環境づくり

必要な情報はインターネットで検索し、文字よりもテレビやネット動画などの画像・映像から情報を受け取る現代の傾向は、本校の生徒も例外ではない。生徒会では「メディア委員会（いわゆる図書委員会）」が活動しているものの、明るく元気で体を動かすことが好きな生徒が多い中で、休み時間などにメディアルーム（図書室）を利用している生徒は、決して多くない。

本校のメディアルームは、「部屋」ではなく、廊下と一続きのいわゆるオープンスペースである。スペースの制約があるせいか、三方の壁に、それほど高さのない書架が配置されていて、蔵書数も十分とは言えない状況である。

N I E の取組を進めるに当たり、まず取りかかったのは、何気なく新聞が目に入り、新聞が手に取りやすい環境づくりである。

従来から、定期的に送られてくる「読売中高生新聞」を、廊下の壁に吊り下げ掲示する取組が行われていた。生徒にとっては、活字ばかりの一般的な「新聞」に比べ、大きな写真やイラストがふんだんに掲載されている「中高生新聞」は、新聞に親しむきっかけとして有効である。さらに、吊り下げ掲示を終えたバックナンバーを、前述のメディアコーナーの一角に並べておくことで、新聞を目にする機会を増やすようにした。



廊下に吊り下げられた「読売中高生新聞」



メディアコーナーに並べられた
「中高生新聞」のバックナンバー

今年度からは、N I E の実践校指定に伴い提供された一般紙も、メディアコーナーの一角に「新聞コーナー」を設置して配架した。常に2紙以上が届くため、新聞名を表示した上で、最新の新聞を手前に置き、同じ新聞の当月のバックナンバーを、その奥に積み上げておくことで、継続して報じられているニュースの、紙面上の取り上げられ方の移り変わり（ニュースの変遷）を追えるようにした。こうした配架の工夫で、同じニュースが繰り返し報じられている時の、真相が明らかになってきた様（時系列＝「ニュースの縦のつながり」）や、同じニュースの新聞社ごとの報じ方（立場や思想）の違い（「ニュースの横のつながり」）が感じられやすくなったと考えている。



バックナンバーとともに、新聞社同士を読み比べることができる新聞コーナー



新聞社ごとに重ねてカウンター内に収められ、いつでも使えるようにしておいた一般紙のバックナンバー

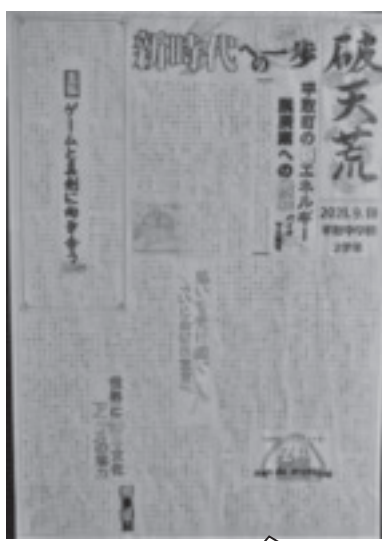
(2) 学校祭「壁新聞部門」の復活と新聞の活用

本校では今年度、学校祭において、数年ぶりに壁新聞制作の取組が復活した。記事の作成や題字・中字のデザインに時間がかかり、紙面の大きさから、ごく少数の生徒しか活躍できないことなどを理由に、数年前に、「壁新聞部門」の代わりに「研究発表部門」が設けられ、学級で決めたテーマについて、より多くの生徒が情報を集め、それを模造紙数枚の大きなレポートとして掲示する取組になった。しかし今年度、学校祭の計画段階で、自分たちが暮らす地域に取材に出かけ、住民の声など集めた情報を、限られた枠（字数）の中に凝縮し、レイアウトや題字・中字を工夫し、見やすくまとめた壁新聞の、美しさや書き上げたときの達成感を見直す機運が高まり、久しぶりに「壁新聞部門」が復活することになったのである。

壁新聞には紙面づくりのセオリーがあるが、記事づくりには、情報の要点をわかりやすくまとめ、決められた字数で表現する文章力が求められる。文法や用語・用字の吟味など、推敲する力も必要である。長い時間をかけて、何度も文章を吟味し、「新聞記事らしく」表現する際に、1つのお手本となったのが「本物」の新聞各紙である。生徒は、プロの新聞記者が書いた記事を読み、事実と主張を区別して伝える文章構成を学び、自分が書く記事に反映した。実際の新聞記事が、まさに格好の「お手本」となった。



1年生壁新聞「極光」



2年生壁新聞「破天荒」



3年生壁新聞「威風」

(3) 主に国語科における教材・資料としての新聞活用

年度当初は、本校教職員の間で、N I Eの実践についてのイメージがつかめず、また、ねらいや進め方についての共通理解も進んでいなかった。そこで、今年度については、取り立てて新聞活用の場面を設定せずに、日常の実践の中で新聞を活用した際に、その場面の写真や活動の概要を簡単な様式にまとめながら、実践の記録を蓄積していく形をとった。

実践の場としては、国語科をはじめ、社会科や「総合的な学習の時間」、道徳のほか、前述の学校祭などの行事とその準備活動など、様々な場面での新聞活用を想定したが、結果として、殊に学習場面においては、教育課程の中に新聞の活用が明確に位置付けられている国語科における実践例のみが、新聞を活用したと言える実践として挙げた。

2年生の学習活動では、新聞への投書を想定した学習の中で、新聞各紙に掲載されている実際の投書をサンプルとして活用し、テーマを決めたり、説得力のある文章表現を探したりした。投書欄の良さの1つに、生徒たちと同じように、プロの記者ではなく、一般の市民が書いた文章だという「親近感」がある。自分たちにも書けそうだと意欲を持たせたり、幅広い視野でテーマを探させたりするには効果的であった。また、投稿者それぞれの考え方に触れることにより、生徒自らの考えに広がりや深まりを持たせることもできた。自分が決めたテーマについて、関連する記事を集め、主張の根拠として活用する姿も見られた。

一方、実際の新聞記事を想定して、経験したことや自分の思いを紙面に表す学習活動の場面でも、本物の新聞紙面は、「生きた手本」として活用することができた。5W1Hの文章構成など、記事のセオリーに気づき構想することで、記事らしい記事や新聞らしい紙面に仕上げることもできた。

3年生の学習では、新聞各紙の社説を読み比べ、それぞれの思想の違いや、自分の考えとの共通点や相違点をまとめる活動を行った。新聞にも「立場」があることに気づき、その後のグループワークでは、各紙の主張の要点や、それに対する賛否、自分の考えなどを交流し、学びを深めることができた。

新聞を教材として活用するポイントは、新聞記事が事実を伝える文章であるという側面と同時に、その中に、新聞社や記者の立場や思想が表れているということを意識させることだと考える。N I E実践指定を受けて、複数の新聞社の紙面を比べられる環境が得られたことで、そのポイントをより生かした学習活動を展開することが可能になり、生徒の「深く読む力」の育成につながったものと考えている。

4 おわりに

継続2年目となる予定の次年度は、年度当初から各教科の先生方に知恵を出してもらいながら、より多くの場面で新聞の効果的な活用法を探っていけるよう、呼びかけていきたい。見渡せば、毎日更新される数多のニュースが敷き詰められているこの「情報と思想の宝庫」を教材として、生徒たちの世界を広げてあげられればと思う。



浦幌町立上浦幌中学校 教諭 中村 宏喜



今年度より新聞提供事業を受けることができました。「新聞は生きた教材」を合言葉に、様々な実践に挑戦しました。教科のみならず、横断的に多様な新聞活用や新聞づくりを通して、言語活動の活性化を念頭に、「ものの見方・考え方を広げる」授業づくりに結びつけて実践を試みました。

新聞名	9月	10月	11月	12月	1月	2月
朝日新聞	○		○			
毎日新聞		○	○		○	○
読売新聞		○		○		
朝日学生新聞				○		
朝日中高生新聞		○				
朝日産生新聞				○		

新聞名	9月	10月	11月	12月	1月	2月
朝日新聞	○		○			
毎日新聞		○	○		○	○
読売新聞		○		○		
朝日ウイーク				○		
朝日中高生新聞						
読売中高生新聞					○	
日本経済新聞	○		○	○	○	
産業経済新聞						
北海道新聞	○	△	○	○	○	△
十勝毎日新聞	△	○	○	○	○	○

NIE (Newspaper in Education)
 ・本紙に新聞用紙は、当該新聞と
 対応した読み方・新聞の役割・読み
 方のマテリアルを添付するものと対応

日本では1973年に読売新聞が初めて
 生徒が読める新聞の創刊号を発行。以後
 読者定数には基準をもち、新聞が「読
 られる」ことになった。

提供された新聞は、図書室内に新たな閲覧場所を設置し配置しました。中学生が読めそうな本が紹介された記事は、ピックアップして新刊図書の紹介と共に掲示しました。



また同時に、「アイヌの人たち」の様子が分かるコーナーも設置。前年度のストック分も含めて、北海道新聞社で特集を行った記事を毎月掲載しました。アイヌ民族に伝わる説話や暮らしぶり知ることができ、社会科や道徳の授業などとも関連をもたせた「横断的な学習」に、一歩踏み込むきっかけにもなりました。

オリンピックの開催に伴い、普段はあまり見慣れない競技のルールや日本人の活躍に向けて



のエピソードなどを展示しました。また、コロナ禍であっても全国を回った聖火リレーについて特集も継続して掲示。地理的な学習とリレーする方々の気持ちを知る機会にもなりました。

3 総合的な学習の時間

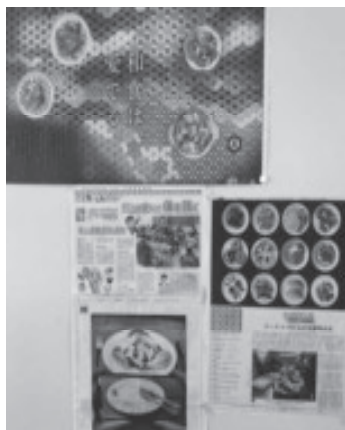
1年生では地域を学ぶ・深く見つめる学習を行っています。この後押しとして、浦幌町に関する新聞記事のコーナーを設置しました。また、1年生は新聞スクラップ（後に記述）でも浦幌町に視点を当てた取組を行ったので、活用範囲が広がりました。



4 その他の掲示活動

標語コンクールに応募するために、新聞広告の中でインパクトのある標語を集めて掲示し、標語作りの一助としました。

また、新型コロナ防止・予防のために、保健室前にも新聞から得られるタイムリーな情報を使っ



ての掲示がなされました。こうした情報提供が、新聞スクラップをする際のテーマなどにもなり、興味関心事という観点から「考えを深める」という観点、そして活動に

広がりを見せました。
給食の配膳コーナーや家庭科室前の廊下には、「食育」を意識し、子どもたちがすぐに目を向けられるような記事や広告を掲示しています。
こうした“掲示”という「可視化」を重視した活動が、学校で



学んだことと社会生活とを結びつけられる一助となればと考え、半年間、様々な形でアプローチを行いました。小さな地域で育つ子どもたちにも、視野を広げ、深くものを見る力や考える力がつくのではないのでしょうか。

新聞で思考・判断・表現力を育てる（国語科）

1 新聞活用

① 新聞記事の発表（全学年）

毎時間、冒頭の5分、新聞記事の発表の時間を設定。9～11月は新聞の第一面から、12月以降はどのページからでも良いことと





しました。

記事の選択は自由。内容を紹介し、自分の考えを付け加え、3分前後で発表します。その後1分前後で教師のコメントを添えました。

11月からは「伝える」から「伝える」を意識した発表に発展させました。写真やグラフなどを

指し示しながら発表をしたり、そのために事前に読んで伝えたい部分に線を引いてくる（→写真）生徒も見られるようになりました。

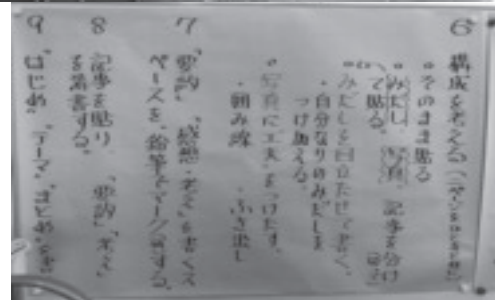


② 広告づくり（1年生）

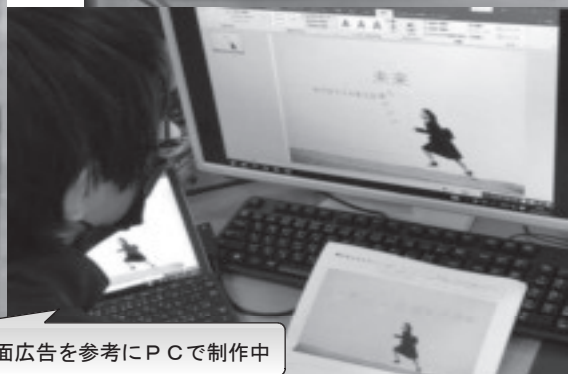
新聞の活用は、記事だけではなく。写真や広告など、あらゆる部分が活用可能です。

1年生では「広告を作ろう」の授業の1ヶ月前から、教室横の多目的室に「新聞広告」を貼り出しました。キャッチコピーなども重視し、できるだけ「全面広告」を使用しました。

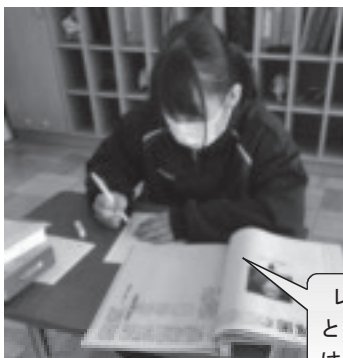
生徒の興味の引くものから、世相を映し出すもの、頑張ろうとする前向きな言葉など、「こういう風にも使うのか」と様々な表現に触れられるようになっていきます。これらを参考にしながら、各自が「設定された会社」のキャッチコピーを考え、PCを活用しながら広告作りに挑戦しました。



参観日には保護者にも見ていただきました。



新聞全面広告を参考にPCで制作中



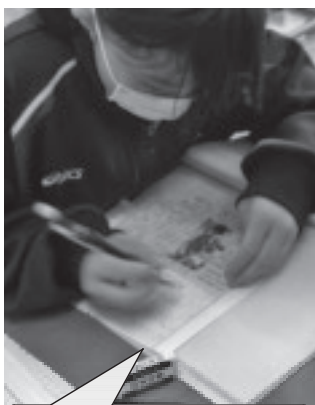
③ 新聞スクラップ（全学年）

「新聞スクラップ」の取組を長期休業も活用し実施しました。「読解の力」だけでなく「書く力」や表現力育成に結びつけました。

夏休みには学年ごとにテーマを提示（1年：浦幌町，2年：十勝，3年：北海道～日本），その中で小テーマを各自設定しました。

レイアウトの後、記事の「要約」と、記事についての「自分の考え」は、下書きをしてから臨みました。

この経験を生かしながら、冬休みは各自でテーマを設定し、課題解決学習としま



1年生にとっては難しい表現も、興味をもった部分に関して考えを書くことで視野を広げることにも繋がりました。

した。

自らの設定課題に沿って、10以上の記事をチョイス。新聞スクラップのやり方を周知するために他校生徒の作品を見本とし、スクラップの仕方を細かく記した教師の手本も掲示しました。

できあがった夏の作品は文化祭などでも展示され、全て展示され、仲間の作品を見ることで得たり考えたりしたことを、更に冬の作品に加筆する生徒もいました。また、作品は、全十勝スクラップコンクールにも出品され、最優秀賞ほか数名の入賞者が出るなど、管内でも認められる取組となりました。



新聞に加え、PCで疑問点なども検索。日付を確認する生徒もいました。

2 新聞形式でのまとめ

① はがき新聞（全学年）

「書く力」を養うために「はがき新聞」の取組を継続して行いました。

「自己紹介」、「文化祭を終えて」、「芸術鑑賞」などは全学年で取り組みました。また、「投稿原稿を書く」（2年生）では、批判的な見方で新聞投稿文を書きました。「修学旅行紀行文」（3年生）では、『奥の細道』にならい、俳句（川柳）とともに紀行文を新聞形式でまとめました。



はがきサイズに加え、A5版も活用しました。作品は文化祭での教科展示のみならず、「全国中学校総合文化祭」にも北海道を代表して出品され、高い評価をいただきました。

② 学級新聞づくり（1・2年生）

新聞のレイアウトや見出しの付け方、写真の効果的な活用などを学びながら、新聞作りに挑戦しました。

国語科の授業で書いた文章を記事に書き換えたり、総合的な学習でのまとめ（1年生はSDGs、2年生は職場体験学習など）ともタイアップして、半年間の学びを「学級新聞」という作品でまとめました。

まとめにかえて

「読み取る」「まとめる（要約）」「書く」という国語の力をつけることを中心に、あらゆる方向から新聞を活用してみました。次年度も新聞提供に感謝しながら、多くの教科で子どもたちの豊かな言語活動の育成のために、新聞活用を図っていきたいと考えています。



実践テーマ

新聞記事を読んで社会への関心を高めよう

函館市立銭亀沢中学校 教諭 平沼 和彦

1. はじめに

函館市には19の公立中学校（＋義務教育学校1校 計20校）があり、その中で、銭亀沢（ぜにかめざわ）中学校は小規模校です。全校生徒41名（東小学校と石崎小学校の2校から生徒は入学）が在籍しています。生徒は、明るく素直で、学ぼうとする意欲が旺盛です。また保護者の教育に対する意識もとても高く協力的です。

2. 実践の概要

NIEの実践について、今年度は「実践1年目」になります。新聞6紙（函館新聞を含む）が学校に入る4カ月間は、2階ホールに机を置き、毎朝、生徒の登校前に新聞を替え、新聞6紙の「1面記事」などを観てもらい取り組みを続けています。

社会科の授業では、新聞の一面記事をみせることや、身近な話題の記事・授業に関係のある記事を印刷・配布（どうしん電子版データを引用）し、社会科と国内外の出来事への興味・関心が深まるよう実践をしてきました。（道南の小中学校で実践指定校は、銭亀沢中学校だけです）

以下の指導案は、中学3年生で行った「新聞記事を利用した授業の指導案」です。

1. 題材名：公民分野（地方自治より）

北海道新聞の記事を読んで、「地域の活性化」について考えよう

2. NIEの観点から

今年度は、NIE実践の1年目になります。1年目のテーマ（ねらい）としては、新聞に親しみ「社会の中で起きていることに目を向け、事件・事故の課題点や疑問に感じたことなどをどのように解決できるか考えてみよう」です。普段の授業では“どうしん電子版”を利用し、地域の話や国内外での大きな出来事などをプリントで配布しています。新聞を通して日ごろから、身近な社会の出来事に興味・関心を高めてもらい、社会の変化に関心を持つような試みを日々実施しています。

3. 本時案

(1) 本時の目標

○新聞記事を参考にして、自分の地域をPRするために何がよいか考える。

○新聞記事を参考にして、地域をPRするための方法をいくつか考えることができる。

(2) 本時の展開

	学習活動	教師の働きかけ	評価
導入	・めあての確認 ・ワークシートの記入 ・自分の地域をPRする方法を考える ・<u>北海道新聞の記事を読む</u>	ワークシートの配布	・主体的に取り組んでいるか
展開	新聞記事をもとに自分の住んでいる地域をPRする方法を考えてみよう		
	・新聞記事を読んで、地域の活性化をPRする動画内容を考える	・説明 ・個人の活動	・主体的/思考 - 活性化の観点から考えているか
	・グループで意見交流する ・ワークシートに交流意見を記入する	・グループでの活動 ・グループの考えを発表	・対話的/思考 - 他者の意見を聞きながら意見交流しているか
	・発表内容の確認 ・他地域のPR動画を視聴する	・確認をする - 他地域の取り組みを理解する	・確認/深い学び ・本時の目標について発表内容を確認する
まとめ	・NIE授業の感想記入 ・次時の連絡	・感想発表	

4. 資料など 新聞記事：どうしん電子版より（北海道新聞 2021年12月3日）



手越祐也さんが道産海産物をPR 札幌 市内で動画撮影、ユーチューブで公開

2021/12/03 22:07 更新

アイドルグループ「NEWS」元メンバーの手越祐也さんが3日、札幌市中央区の札幌市中央卸売市場近くの飲食店「まるさん亭」を訪れ、道産海産物をPRする動画を撮影した。海産物の

通販サイトなどを手がける雪国物語（札幌）が、新型コロナウイルス禍で落ち込む消費を底上げしようと、取引先である同店と協力して企画した。

個人的にも北海道をよく訪れるという手越さんは、雪国物語が仕入れた道産のタラコを食べ「ぷにぷにでおいしい！」と笑顔を見せ、タラバガニやイクラなどを堪能。撮影後の取材に「年末年始においしい道産海産物を、できれば道内旅行で、多くの人に食べてほしい」と話した。動画は年内にもYouTubeで公開される。（北海道新聞 2021年12月3日）

○資料：ワークシート

NIE《教育に新聞を》授業 地方自治：地域おこしについて

①あなたは、地域をPRするためには、「どんなこと」を「どのように」PRした方がよいと思いますか。

②新聞記事（電子版）を読んで、どのようなことを考え（思い）ましたか。

③（1）_____を使って、どのような作品をつくるのがよいと思いますか。（書きましたら、右上の②（2）も書いてください。）

◎新聞掲示について

○2階ホールに新聞6紙を置き、いつでも新聞を
読める環境づくりをしています。



新聞を活用した授業の様子



3. 成果と課題

○生徒は新聞を楽しそうに関心をもって読んでいました。本校は、小規模校ですが、生徒の新聞に対する興味関心はとても高いです。今回のN I E授業でも、生徒は意欲的に考え発表していました。

○新聞6紙が学校に入っている間、生徒は朝の登校時に1面記事のタイトルを見て、新聞社ごとの違いを確かめていました。休み時間や昼休みに新聞を手にとって読んでいる生徒もいました。生徒に関わりがある内容は、授業の最初に新聞をみせて関心をもってもらうようにしてきました。新聞を通して社会のできごとに興味をもつ機会が増えたことは大きな成果です。

生徒も、「北海道新聞以外の新聞を読むことができてとてもよかった。特に全国紙（読売新聞・朝日新聞・毎日新聞）を読めて楽しい」と話していました。また、「新聞の種類が、こんなにも多くある（北海道新聞、函館新聞、読売新聞、朝日新聞、毎日新聞、日本経済新聞の6紙）とは、知りませんでした」という驚きと喜びの声が出ていました。

○学習（社会科・総合的な学習の時間など）に新聞を用いることで、教科書や資料集などで学んだ知識と、社会で起こっている出来事などを結び付けて学習することができるのが、新聞活用の利点だと思います。

子どもたちの学習意欲の向上や社会に興味・関心を高めることにつながる新聞記事を、もっと授業に取り入れていこうと思っています。次年度は、さらに新聞をじっくり読む時間をつくり主体的に取り組み、考える力の向上に注力していきたいと考えています。

2021 年度 NIE 実践報告

特別支援学級におけるNIE活動

札幌市立藤野中学校 教諭 三上 毅朗

1. はじめに

本校は自然豊かな札幌市南区の藤野地区にあり、素直で純朴な生徒が多い印象を受ける。特別支援学級には1年生3名、2年生5名、3年生2名の計10名が在籍している。

新聞に親しむことをねらいとし、一昨年度からNIE活動を始めた。これまでの活動を通し、学習環境に新聞が少しずつなじんできたように感じる一方、在籍している生徒の実態に合った活用の仕方について模索した一年間でもあった。

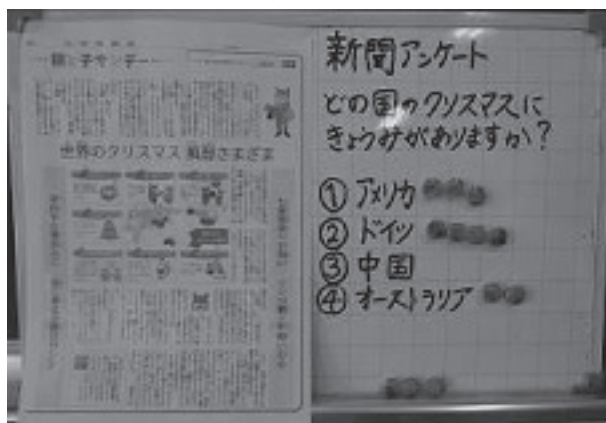
今年度取り組んだ実践内容について以下で紹介する。



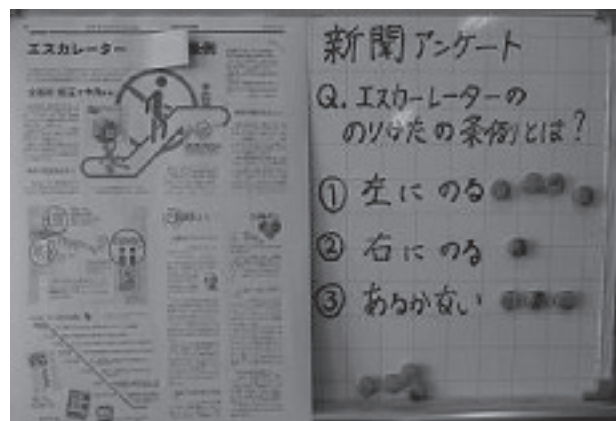
2. 実践内容

① 新聞アンケート

教師が生徒に読んでほしい記事を選び、ホワイトボードに貼り、説明や質問等を書き加えて、黒板に掲示した。生徒は記事を読み、質問に答えたり、自分の意見を書いたりした。



写真①



写真②

はじめは生徒の興味関心を引くような記事を用いて、参加しやすい質問やクイズ形式で掲示した（写真①②）。

徐々に記事に対する自分の考えを「賛成・反対」で表す新聞アンケートを掲示した（写真③）。

記事の内容は身近な話題をはじめ、社会のあり方についてなど、様々な分野のニュースに触れられるよう選んだ。「賛成・反対」や自分の考えを記入する中で、お互いの意見を聞き、考えを深め合う様子が伺えた。



（朝日新聞 2021 年 11 月 23 日 ウサギ OK、犬猫は販売禁止「納得できない…」進む動物愛護に賛否）

②国語科において

本学級では、教科学習は習熟度別のグループで取り組んでおり、今年度、担当したグループは実態でいうと小学校低学年程度であった。読むことのできる漢字が多くないため、子ども新聞を活用して以下の取り組みを行った。

『カタカナを探せ！』

カタカナの学習の一環として行ったこの活動は、文章中からカタカナの言葉を探し出すというシンプルな取り組みである。平仮名との違いに気付き、カタカナの言葉を1つのまとまりとして捉えることで、カタカナ混じりの文章をよりスムーズに読むことをねらいとした。

グループの生徒の様子として、カタカナで単語は読めるものの、文章になると詰まってしまうことが散見されていた。そこで、カタカナ混じりの文章を分解し、段階を踏んで読んでいくため、『カタカナを探せ！』に取り組んだ。

教材として活用した子ども新聞には、ふりがながあることで生徒が自分で読み進めていくことができる。また、イラストや写真がふんだんに使われ、生徒の興味関心をひくような多種多様な記事がある。生徒によって異なる記事を使うことで、同じグループ内にある実態差にも対応することができた。



【好きな昆虫の記事から
カタカナの言葉を探し出す生徒】



【ふりがながあり、写真やイラストが多くて
取り組みやすい子ども新聞の記事】

新聞記事を黒板に掲示し生徒に取り組ませたところ、ゲーム感覚で楽しみながら行っていた。カタカナを探し出した後は、その言葉を黒板に書き出させた。多くの言葉を見つけることができ、達成感を感じているように見えた。カタカナ混じりの文章を読むことにはまだ時間はかかるが、その基礎的な部分につながる学習として行うことができた。

③社会科において

(1)「信用できる情報とは？～道新データベースを使ってみよう！～」

本学級では、多くの生徒が自らのスマートフォン等を所有して、ネット環境を利用している。休み時間には、そうしたネット環境で得た情報がクラス内を飛び交っているが、玉石混交であるネット上の情報について、その真偽について考えている生徒は少ないように感じていた。

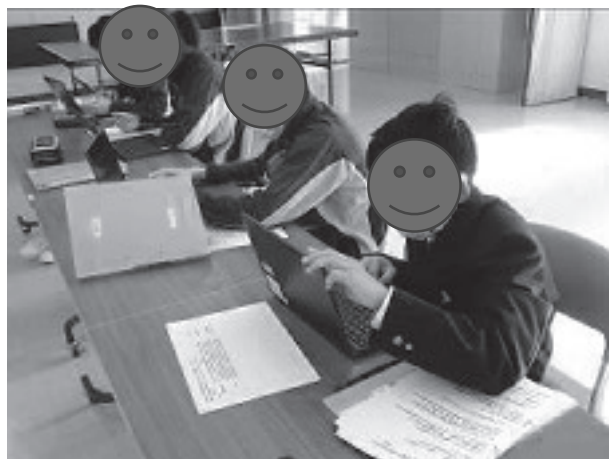
そこで、今年度より一人一台配備されたＩＣＴ端末を利用し、「信用できる情報とは何か？」を考えていく活動を行った。この活動を進めるにあたり、はじめに、生徒がどのような場所から日ごろ情報を得ているのかを確認した。ゲームの掲示板、Wikipedia、ネットニュースなど様々な媒体から情報を得ていたが、その違いについてはほとんど意識していなかった。

そのような現状が確認できたため、本単元の導入として新聞記事の作られ方について学習した。グループ内に Wikipedia の編集をしたことがある生徒がいたため、手軽に誰でも情報を書き換えられる点を新聞記事ができる工程と対比しながら学習を進めることができた。気軽にアクセスできるが、誰がどのように編集したか分からない情報と比べ、丁寧な取材を元に複数の目で文章や見出しを推敲して、責任をもって仕上げた新聞記事のどちらがより信用できる情報であるのか、共通理解をもって展開部分に入ることができた。

単元の展開部分では、生徒は好きな題材を一つ選び、ＩＣＴ端末でそれについて情報を集めた。その際、「どこから得た情報なのか、出どころを明記すること」を一つの条件とした。はじめは自分で情報を集めることに苦戦すると予想したため、道新データベースを使用した検索の仕方について確認した。キーワードを打ち込むとそれに関連する新聞記事が表示されるが、サーチエンジンに比べて検索結果の数が絞られているため、必要な情報が見つかりやすいことを生徒は感じ取っていた様子であった。

その後、ネット上全般から情報を集めさせた。検索結果が膨大な数になるため、どこを見れば良いのか判断に迷う生徒もいたが、「情報の出どころを明記すること」を条件にしたことで、ゲーム機の Wii について調べた生徒は任天堂のホームページ、元号について調べた生徒は内閣府のホームページなど、発信元がしっかりと分かる情報を探そうとする意識をもち、活動を進めることができていた。

特別支援学級の生徒も急激に広がるネット社会の中で生きていくことになる。そこから情報を得る際、その情報は信用できるのか、立ち止まって考える意識をもってほしいと考えている。



(2)「同年代の投書から考えてみよう！」

NIE 活動を通して、社会の出来事に興味をもったり考えたりするようになってほしいと考え、社会科でこの取組みを行った。社会の出来事に触れる際、生徒にとって取り組みやすい題材とは何かを考え、投書、それも同年代の人が投稿したものを扱った。メリットとして、気になる話題の肌感覚が同じであること、用いられている言葉が理解しやすいことがあった。

他校での取組みを参考にさせてもらい、「そう思う」部分には傍線、「そう思わない」部分には波線を引かせた。はじめは、「線を引く箇所は少なくともいいよ」とハードルを高くしないよう心がけた。次第に多くの線が引けるようになり、自分自身の考えが出るようになってきた。

投書のテーマは、学校での話題(校則や制服について)、ゲームの是非についてなどであった。自分たちに身近な話題を通して、「自分はどう思うか?」「どのように変わっていったらいいか?」と考える習慣がついていくことで、社会で起きている事象に対しても自分なりの考えをもったり、疑問の目をもったりすることへ繋がっていったらいい、と考えている。



＊使用した新聞
北海道新聞
2021年12月8日
ぶんぶん time

【投書の話】

- ・兄がつけた名前大好き
- ・中学校 私服で行きたい
- ・ステイホーム 前向きに
- ・学校 睡眠取れる時間を

3. まとめ(成果と課題)

18歳成人となり、特別支援の生徒においては、高等支援学校卒業とともに一人の成人となる。そのため、中学校段階においても、これまで以上に社会の出来事に興味関心をもち、自らの考えや疑問をもったり発信したりしていく姿勢が大切になってくる。そういった部分を育てることのできる活動がNIEだと考えている。

成果としては、過年度よりも障がいの程度が重い生徒に対して、色々と模索しながらNIE活動を実践することができた点である。特別支援学級では実態が様々な生徒が在籍しているため、その年度によって、生徒の実態に寄り添った実践が求められることをあらためて感じた。

課題としては、それぞれのNIE活動によりつながりを持たせ、様々な場面で教育効果が広がるような計画を立てる必要があった点である。それぞれの授業においてNIE活動を取り入れていくことも一つの方法ではあるが、学級の重点目標として定めたり、教育課程に位置付けたりすることでより効果的な取組みとなる。そういった部分を考慮しながら、今後のNIE活動を進めていきたい。

学校教育における SDGs（持続可能な開発目標）

実現に向けた新聞の活用

～生徒が主体的に新聞を活用し、SDGs の 17 の目標に迫る～

札幌市立もみじ台中学校 佐藤 尋之

1 はじめに

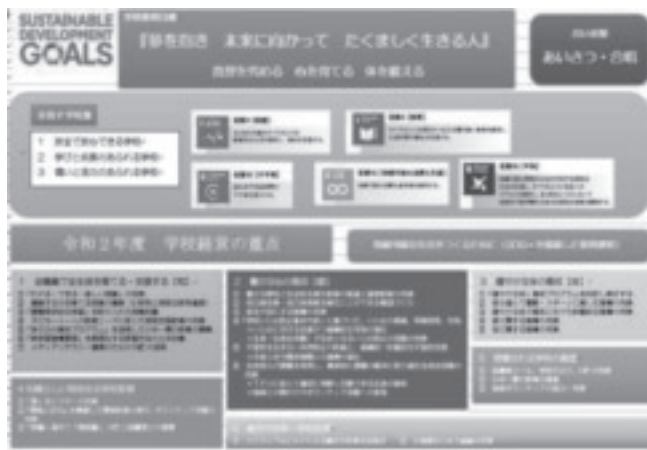
昭和 50 年 3 月 26 日に、母体校の信濃中学校 1・2 年生 382 名で開校式が行われ、同年 4 月、第 1 回入学式で 288 名の新一年生が加わり、もみじ台中学校の歴史は始まった。その後ピーク時は各学年 10 学級規模の時代もあったが、現在は校区地域の人口減少と少子高齢化の影響で、全校生徒 240 人ほどの小規模校となっている。家庭環境に問題を抱える生徒や、固定化された人間関係の中で、仲間づくりを苦手とする生徒や SNS のトラブルも増えている。

2 学校教育目標と SDGs

SDGs とは国連が定めた、2030 年までに達成を目標とした「持続可能な開発目標 Sustainable Development Goals」のことである。これは、17 のゴールが設定されていて、世界中がこのゴールを目指して実現しようと努力している。

本校でも、この SDGs を意識した学校の取組みがはじまった。学校教育方針を、その 17 の目標のうち、目標 3「保健」目標 4「教育」目標 10「不平等」目標 12「持続可能な消費と生産」目標 16「平和」の 5 項目に合わせるのである。

本校の学校教育目標は「夢を抱き、未来に向かってたくましく生きる人、真理を究める、心を育てる、体を鍛える」である。この目標はまさに SDGs の「誰一人取り残さない持続可能で多様性と包摂性のある社会の実現のための方針」と合致する目標でもある。



(SDGs と関連づけた学校教育方針)

3 実践内容

N I E実践校の認定を受け2年目となり、本校の実践テーマである「学校教育におけるSDG s（持続可能な開発目標）実現に向けた新聞の活用～生徒が主体的に新聞を活用しSDG sの17の目標に迫る～」を更に深められるように取り組んだ。また、提供された新聞は、北海道新聞、読売新聞、毎日新聞、朝日新聞、日本経済新聞、産経新聞、読売中高生新聞の各紙である。学校長のリーダーシップの下、図書館司書、各教科の支援を得ながらの実践となった。その実践の中で主なものを紹介していきたい。

（1）もみじ台中学校新聞閲覧コーナー

「新聞に親しむ」「北海道や国内外の情報に興味を持つ」ことを目標に通年で正面玄関ホールに閲覧台を用意し、購読した各紙の新聞を閲覧可能とした。コーナー設置当初は関心を示す生徒は少数だったが、徐々に興味を示す生徒が増え、休み時間や放課後に友達同士で新聞を読む生徒が広がっていった。図書館のオススメの本とタイアップしたり、中高生新聞をPRしたり期間ごとに工夫して展示することができた。



（玄関前の新聞閲覧コーナー）



（図書館司書さんの企画「縄文特集」）

（2）「いっしょに読もう新聞コンクール」への参加

2年生の国語「立場を尊重して話し合おう」の学習の中で、自分で新聞記事を選び、その記事の内容と自分の考えを相手に伝え、相手からもコメントをもらうという活動を行い、実際に「いっしょに読もう新聞コンクール」に送ることができた。一生懸命に新聞を読んで記事を選び、自分の考えをまとめていたが、どの子も楽しそうに新聞記事を選んでいたので印象的だった。

①新聞記事を選び、ワークシートに感想や考えたことを記入する。



②選んだ記事を読んで、相手からコメントをもらい、記入する。2人～3人からコメントをもらうようにし、複数の意見を聞いた後、最後に学習を通したまとめをした。普段読まない出来事やニュースを知るきっかけになったり、同じ記事を読んで別の立場の考えに気付くなど多面的に見る機会となったりした。学習の振り返りをクロームブックのグーグルフォームを活用して行った。



（４）「中高生のための朝日 SDGs ジャーナル」の活用

1年生の国語では「話題や展開を捉えて話し合おう」の学習で朝日新聞の「ペタッと SDGs」の付箋を使い、グループディスカッションを行った後、ポスターセッションを行った。

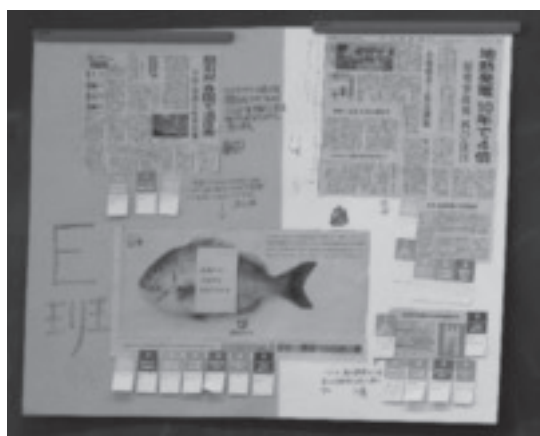
選んだ記事がSDGsのどの目標に関連するかを考え、交流するなかで、自分の考えが整理されたり、他の目標とも関連することに気付いたりすることができた。



①「SDGs スタートブック」を使い、SDGs について学習したあと、「中高生のための朝日 SDGs ジャーナル」を読み、どのような記事がどの目標に関連してくるのか考えた。どのような記事がどの目標につながるのかを考えるリハーサルとなった。



②ストックしておいた日刊紙を使い、興味を持った記事を切り抜き、関連する SDGs の付箋を貼っていく。このとき、他にも関連する目標がないかグループ内で交流しながら活動を進めた。付箋には目標に関連するキーワードや強調したいことを書き込んだ。



③記事の概要とそれがどのように SDGs の目標に関わってくるのかをグループごとに発表し、ポスターは学年の廊下に掲示した。

4 成果と課題

実践校の2年目になり、昨年度よりも教科と連携を取り一歩踏み込んだ形で新聞を活用した取組を行うことができた。次年度は新聞をより身近に感じられるように日常的な活動を増やしていきたい。

新聞が身近にある日常を感じ、「読む力」や 「社会を知り、考え、つながる力」を育てる

むかわ町立穂別中学校

教諭 小林潤平・タケオ菜々子・佐々木祐哉

片岡日菜子・北村拓海・日下 剛

1、はじめに

NIEの実践指定校2年目となりました。本校は、1年生8名、2年生15名、3年生17名の全校40名、教職員20名の合計60名が集い、学ぶ、1年中お花とパイナップルが育つ、四季のはっきりとした清流鷗川の流れる穂別地区にある小規模な中学校です。

昨年度、5月から毎朝3～4紙の新聞が届き、新聞がある非日常に生徒・教職員も少しずつ慣れてきました。常時、新聞を見比べることのできる環境が当たり前の「日常」となり、存在を忘れてしまっている生徒・教職員も多いです。

ですが、それこそが現実の日常です。「新聞の活用を！」とはやる気持ちも募りますが、そこはぐっとこらえて、今年度も背伸びをせずに、できること、続けられること、何より「非日常」を楽しむ・おもしろがるスタンスで新聞との関わりがスタートしました。

2、今年度の実践から

(1) あっ新聞記事からつながった…

①「タマゴマン」の巻

新年度早々の4月30日(金)、北海道新聞(夕刊)に『心ほっこり「絵ことば集」 「タマゴマン」作者の坂本勤さん コロナ禍に「言葉の力」』との記事が掲載され、担当者の目に留まりました。その記事が、毎朝の朝読書に使うミニ新聞の1面を飾ります。タマゴマンの坂本先生には、本校にも熱狂的なファンがいて、「ぜひ、全校道徳などでお呼びして、ほっこりするお話を聞きたいね。」等、話題にのぼっていました。この時も早速「絵ことば集」を購入し(タマゴマンの愛蔵版もありましたが、高額だったので断念…)、お会いできることを楽しみにしていました。



北海道新聞 2021/4/30

さらに、夏休み明けの8月20日（金）、北海道新聞の『考える大切さ 絵と文に詩画家・坂本さん 「タマゴマン」愛蔵版、絵ことば集同時出版』の記事にも出会い、「これは、もう、呼ぶしかない。」と意を決し、親交のある隣町中学校の元同僚の養護教諭に連絡を依頼しました。はじめ、コロナ禍で難色を示されましたが、そこをどうにかとしつこく頼み込み、12月に「あなたの止める力は何ですか？」と題する、全校道徳授業＋保護者・教職員向け講演が実現しました。送迎片道1時間45分の坂本先生とのおしゃべりドライブで楽しませていただきました。



北海道新聞 2021/8/20

②「コロナ対策トイレ」ポスター・「SDGs新聞」の巻

本校廊下の掲示には、新聞記事の拡大ポスター印刷、通称「壁新聞」が校内の廊下に所狭しと貼られています。2階男子トイレの壁の穴をふさぐように、「トイレのコロナ対策」ポスターが貼られています。これも、担当者が偶然新聞記事で見つけて、インターネットからダウンロードしたものです。

また SDGs 関連教材として、「中高生のための朝日SDGsジャーナル vol.1・2」を取り寄せ、新聞を活用して学びを深めることができました。



（２）新聞記者さんを通して新聞とつながった ～ インタビューフォーラム ～

本校では、仕事を通じて豊かなまちづくりに参画する地域人材の協力による学習活動をとおして、穂別の将来の展望を考えるとともに望ましい職業観（キャリア発達）を促す目的で、「インタビューフォーラム」を実施しています。今年度のテーマと講師は、次のとおりです。

ア テーマ 「ふるさとの地域づくりを支える人々 ～ 穂別の魅力と学び・人生選択」

イ パネリスト マスコミ：北海道新聞 苫小牧支社 記者 木村 みなみ 氏

商工業：メイプルリーフカフェ 店主 鈴木 哲 氏

教 員：むかわ町立穂別中学校 英語教諭 松本 真帆 氏

ウ コーディネーター とまこまい広域農業協同組合 青年部 中澤 和晴 氏

この中で一番生徒たちに年齢の近い、記者の木村みなみさんに質問が集まりました。

Q6 中学・高校のうちにやっておくといいいことは？

A6 地域の特徴を知る！穂別ではどんな産業が盛んで、どんな職業があつて、どんな問題があつて…



というようなことを調べることは、自分が将来やりたいことを見つけるヒントになると思います。「穂別に残るつもりはない！」という人もぜひやってみてください。私が取材した人の中には、「森林が多い地元の町では木材を使ったものづくりが盛んだったけど、厚真では木材を使う仕組みが全然ないじゃないか！」と広島県から厚真に移住し、木材を地元で消費する仕組みづくりに取り組んでいる人もいます。

Q7 人が亡くなる事件を担当している時、精神的に辛くなることはありませんか？

A7 いつもとてもつらいです。交通事故で息子を亡くしたお母さんに話を聞いた時は、お互いわんわん泣きました。でも、みなさん必ず「私のような思いをする人をこれ以上増やしたくない」とおっしゃいます。当事者の方の思いを多くの人に伝えることが、悲惨な事故を減らす一助になればと思い、取材しています。

質問に真摯に答えてくださる木村さんの姿を通して、生徒は、新聞記者をより具体的に理解することができたと思います。さらに、木村さんの署名記事を見つけ、新聞をより身近に感ずる生徒もいます。



北海道新聞 2022/2/3

(3) 地域ともつながった

インタビューフォーラムの参観に来てくださった、「むかわ町地域おこし協力隊」の村井エリカさん・両角創平さんが、海外での生活体験を卒業控えた3年生と「穂別から未来を考える～バックパッカー・海外生活から世界を知る～」(仮称)と題して、授業を3月に行います。中学校から徒歩3分の穂別高校で10月にお二人が行った講演会を新聞記事で知ったのが、今回の企画に結びつきました。

穂別地域で活躍されているお二人の挑戦エピソードは、穂別・穂別中を巣立つ3年生の心に響くものと今から楽しみです。



苦小牧民報 2021/10/26

(4) 生徒ともつながった

朝日小学生新聞の「天声こども語」、北海道新聞の「卓上四季」、朝日新聞の「天声人語」を活用した視写の取り組みにも、細々と取り組んでいます。家庭学習としてコツコツ毎日取り組む、各学年1～2名の頑張り屋さんや朝読書でクラス全員の取り組みに救われています。

1年生当初は、「天声こども語」からスタートして、2年生から「卓上四季」や「天声人語」にスライドし、感想に要約・見出しまでレベルアップをしている生徒もいます。

さらにコラムを読み、書き写す中で、考えたこと、疑問に思ったことを家庭で話題にし、調べてみる探究活動に広がっています。「いつでも、どこでも、だれでも」引っかかりたら取り組めるように、毎日の記事の更新は、これからもコツコツ続けていきたいと思っています。



5、おわりに ～「新聞紙」がつながる～

【成果】

- ①活字に触れる機会が増えた
- ②新聞がある毎日が、「非日常」から「日常」になりつつある
- ③新聞紙が使える：バックナンバーの活用、習字・美術等の下敷き、下足箱の紙として…



【課題】

- ①実際に挑戦しない生徒が少なからずいる
- ②活動の広がり鈍さ

現状、教科の中で新聞を活用した活動を行うことがあまりできていません。少しずつ新聞を利用して、「読む力」「社会を知り、考え、つながる力」を育てていきたいと思っています。

- ③受信者から発信者へ

情報を受け取り、引っかけから、言葉少なくとも表現・発信する穂別中へ努力していきます。

来年度も、活動を継続していきます。

細く、長く・・・

あせらず、あわてず、あきらめずに・・・

震災の記憶を地域の方と共に刻む防災学習 ～新聞を活用した防災教育について～

むかわ町立鵜川中学校 教諭 片岡 鉄也

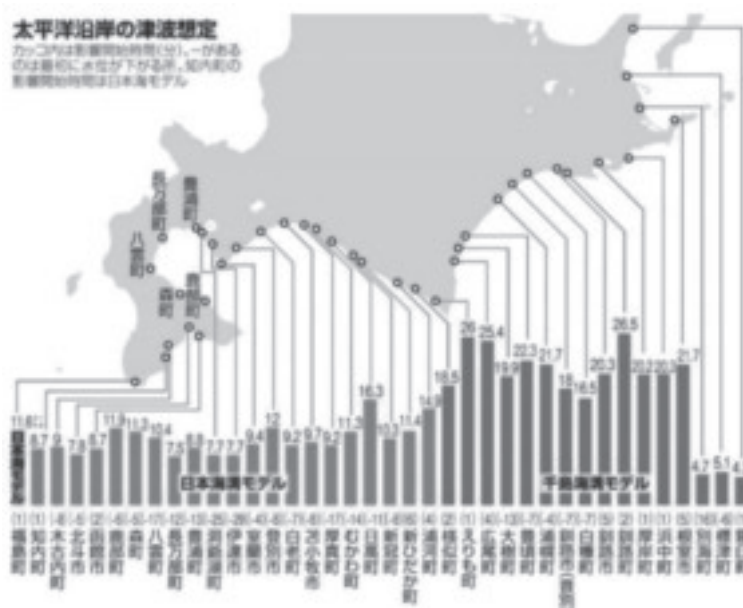
《はじめに》

2021 年 7 月 19 日、朝日新聞にショッキングな記事が掲載されました。「北海道は、千島海溝・日本海溝沿いの巨大地震に伴う津波の浸水想定を公表した。対象は太平洋沿岸の 37 市町。東部を中心に 9 市町で最大 20 メートル以上の津波が襲い、37 市町の最大浸水面積は計 9 万 1 千ヘクタールになる可能性がある。道は、今回の想定結果に基づいたハザードマップの作成を自治体側に求めている」（朝日新聞 2021 年 7 月 19 日朝刊）。

2018 年 9 月 6 日午前 3 時 7 分。むかわ町立鵜川中学校は震度 6 強の揺れに見まわられました。幸い、震源が内陸部であったため津波の被害はありませんでしたが、揺れが収まった直後、東日本大震災の津波が脳裏をよぎった多くの町民は、内陸部をめざして深夜の避難が始まりました。鵜川中学校は、太平洋から 1 km、一級河川からも近い立地で、津波や河川津波の心配がある地域です。そのため、本校における防災減災教育は、待ったなしの喫緊の課題として取り組んでいかなければなりませんでした。

その年の 9 月 6 日。「守ろう わたしの命 あなたの命 つなげよう 9.6 あの日のわたしと未来のわたしたち」をスローガンに、はじめて行なわれた防災ウィーク集会で防災ウィーク宣言『むかわの記憶』が生徒会によって宣言されました。そして、あの日から『むかわの記憶』を風化させない取り組みがはじまりました。

本報告では、新聞を活用しながら、どのように本校で防災教育を進めてきたか報告したいと思います。



千島海溝・日本海溝沿いの巨大地震に伴う津波の浸水想定を公表。勤務校は最大津波水位が 11 メートルを越えると予想された（朝日新聞 2021 年 7 月 19 日）

《実践報告》

1. 新聞を活用した防災教育 ①

～震災から3年を経て、いま被災地にはどのような課題があるか

新聞を活用して知る（全学年社会科）～

(1) 活動の概要

胆振東部地震から3年が経った今年度、被災地はどのように復興してきたか、また、どのような課題を抱えているのかを知るために、複数の新聞記事を読み比べました。

まず、胆振東部地震が発生した9月の1ヶ月間、新聞各社の紙面では、どのように胆振東部地震が扱われているのかを知るために、地元紙の北海道新聞、苫小牧民報社をはじめ、朝日新聞、産経新聞、日本経済新聞、毎日新聞、読売新聞を購読しました。

各紙の見出しや取り扱っている紙面を比較しながら、震災から3年が経った被災地で何が課題なのか調べました。各紙の見出しは次の通りです。

新聞	9月6日（月）		9月7日（火）	
	紙面	見出し	紙面	見出し
苫小牧民報	1面	復興へ前進 決意新たに	1面	被災3町長インタビュー 新たな人材育て人口増へ
	2面	犠牲者37名の名前を刻む つたえり公園に慰霊碑	1面	慰霊碑に黙とう
	2面	「住まいの再建」完了 「記憶と記録」後世につなぐ	2面	被災地小中学校で防災教育
	3面	胆振東部地震3年 被災地を巡る	2面	震災学習プログラム作成へ 被災地ツアーを学びの場に
	4面	ブラックアウト回避へ備え 電力「地産地消」進む	第2社会面	被災地産木材でベンチ 苫小牧広域森林組合が寄贈
	第1社会面	災害時の行動確認 市内小中学校「胆振防災教育デー」	第2社会面	被災地産木材でベンチ
	第1社会面	花を手向け犠牲者慎む		
北海道新聞	1面	元の居住地7割戻れず 仮説退居後自宅再建費が壁	1面	激震 記憶つなぐ 犠牲44人慎み
	1面	コロナ下 パラ開幕 メダル51個 「共生」理念発信	1面	土砂到達 国想定の倍 火山層 滑りやすい粘土質に
	地域	犠牲者37名 慰霊碑に刻む	5面	必要水量67%未把握 酪農家に道調査 断水対策進まず
	第1社会面	進む復旧 癒えぬ心	11面経済	事業継続計画策定13% 道内中小 人手やスキル不足
	第1社会面	厚真中心部に慰霊碑 被害最大地区は見送り	地域	教訓生かし復興へ歩み
			地域	犠牲慎む思いさまたま
			第1社会面	遺族 悲しみ胸に歩む 未来「考え続ける」
朝日新聞	1面	東京パラ 開幕	1面	総裁候補 まとまらぬ派閥
	地域	復興へ 「立ち止まらない」 厚真町民ら追悼式	地域	慰霊碑に復興誓う
	地域	「絶対忘れないよ」それでも前へ		
	社会面	44人の思い 受け継ぐ		
毎日新聞	1面	多様性体现 パラ開幕 コロナ下 メダル51個	1面	混迷の自民総裁選
	第2社会面	立ち止まらず前へ 胆振東部地震3年	1面	まだ3年 もう3年 北海道・胆振東部地震

新聞	9 月 6 日 (月)		9 月 7 日 (火)	
	紙面	見出し	紙面	見出し
毎日新聞	地域	向かい合い「安らぎ」 住民の交流促す設計	地域	恋しい記憶と生きる 両親と祖母犠牲 兄弟祈り
	地域	「忘れない」厚真に慰霊碑 37 人慎み遺族ら式典	地域	「一步踏み出す時」 思い出の自宅が全壊
			第 1 社会面	両親の魂 住む家を 土砂撤去 実家跡にログハウス
読売新聞	1 面	東京パラ開幕 コロナ 異例の大会完結	1 面	コロナ下の完遂 一里塚
	第 3 社会面	北海道地震 3 年 慰霊碑除幕	地域	米作り 思いつなげる
	地域	インフラ復旧 一区切り 厚真町移住支援に重点	地域	犠牲者 ずっと忘れない
			地域	森林破壊 遠い再生
			社会面	母と暮らした厚真で生きる 仮説から転居
新産経	1 面	東京パラ開幕 多様性示す	1 面	米「首領殺害を優先」 混乱招く
			社会面	進む復旧 残る心の傷
日経新聞	1 面	コロナ下 歴史つなぐ 東京五輪・パラ開幕	1 面	ホンダ・GM、EV 共通化
			地域	北電、2 本の大動脈太く ブラックアウト 3 年

震災があった 6 日付の各紙では 19 本、7 日付の各紙では 24 本、計 43 本の記事が 6 日、7 日の両日に掲載されました。

(2) 活動の振り返り

【成果】

- ・ 「震災」と一言で言っても、各地域が抱えている復興への課題が異なっていることに気づくことができた。
- ・ 教科書ではなく、新聞を活用することで、震災復興への道程が、地域産業の観点や地理的要因等から知ることができ、複眼的に見ることができた。
- ・ 上記のように様々な観点から震災を考察することで、震災を「自分事」としてとらえることができた。

【課題】

- ・ 千島海溝・日本海溝沿いの巨大地震に伴う津波に対する避難行動のあり方や一級河川があるので心配される河川津波など地域の防災課題が多方面にわたり、テーマ分けして調べていく方が良かった。
- ・ 教科で既習事項となっている防災に関する知識（地震や火山の仕組み等）にあわせてテーマを絞ればよかった。

【生徒の振り返りから】

- ・ 北海道支社がある新聞社とそうでない新聞社で 1 面の取り扱いの軽重がちがっていて驚いた。
- ・ 被災したときに、どのような「自助」「共助」の行動がとれるか考える機会となった。
- ・ 震災から 3 年がたった今、復興のために何が必要なのか、何が課題なのか知ることができた。

2. 新聞を活用した防災教育 ②

～地域の住民とともに町の防災について考えた

ハザードマップ学習と DIG 学習（2 年社会科地理分野）～

(1) 活動の概要

千島海溝・日本海溝沿いの巨大地震に伴う津波の新浸水想定に関する記事を読み、今まで予想されていた被害とどのようにちがった被害となるか考えました。そして、以前の津波ハザードマップと比較し、どのくらい浸水域が広がるか予想を立てました。その後、地域にどのような被害がもたらされるかフィールドワークを実施して検証しました。このフィールドワークには 34 人の町民も参加しておこないました。

① ハザードマップ学習

避難迅速化に向けた、適切な避難行動や判断力の向上のため、7 月公表の津波ハザードマップを使い、フィールドワークで学校周辺の津波危険度（津波浸水深や浸水開始時間）を学びました。

② DIG 学習（災害図上訓練）

参加者は大きな地図を囲み、全員が災害情報等を書き込みながら議論をしていきます。その過程で、被害の様相はより具体的なものとして描き出し、その地域の災害に対する強さ弱さも明らかにしていきました。

(2) 活動の振り返り

【成果】

- ・ 校区は海と一級河川に囲まれて高台がなく、津波への不安が大きいと大人は考えていましたが、生徒たちは災害上弱点だと思われていた点をプラスにとられ、自分たちの命を守るためにどのような最善が尽くせるか考えていました。
- ・ 生徒と町民が、同じ目線で地域の防災についてともに考えることができました。

【課題】

- ・ 道路の凍結や積雪がある冬季、どのように避難行動をするかその課題を整理すると良かった。
- ・ 近隣の高校や小学校と連携を図った防災学習につなげていく必要性を感じました。

【生徒の振り返りから】

- ・ 平地が多くて高台がない分足腰の弱いお年寄りも避難しやすい。
- ・ 普段何気なく通っていた通学路がこんなに津波で浸水してしまうとは驚いた。
- ・ 普段挨拶くらいしかしていなかった近所の人と防災について話すことができた。
- ・ 生徒と話してみてもこんなに頼もしいのだと感心しました（町民の方）。



浸水する場所や危険な場所がないか、どのように避難行動をとればいいのか生徒と町民がともに考えました。

社会の出来事に興味・関心を持ち、新聞記事を読み取る力をつけよう

札幌市立新川中学校 教諭 永野亜也子
(特別支援学級)

<はじめに>

新川中学校の特別支援学級での指定校としての実践が3年目となった。新一年生が3名加わったが、今年度は旅行的行事が延期、中止、また復活等、一年中旅行的行事の生活単元学習を行っているような状態で、新聞を使つての授業は3学期からとなった。

しかし、これまでの学習で2、3生が新聞を読む習慣ができていたため、毎朝新聞記事の話題が教室を飛び交っていた。学級に新聞があることで、日々のニュースの話題が広がり、新聞が学級に根付くように感じられる。

<実践報告>

○生徒の実態

在籍は8名。簡単な物語の内容をごく大まかにとらえることができる生徒や小学校高学年程度の文章読解ができる生徒。昨年からは毎日新聞に触れることで、政治、スポーツ、事件、事故などの日々のニュースに関心を持つ生徒が増えてきている。自分の考えをわかりやすくまとめたり、伝えたりすることが苦手な生徒は多い。

○取り組みの重点

- ・記事のおおまかな内容を理解する。
- ・記事の内容を理解し、自分の考えをもつ。
- ・社会の出来事への関心を高める。

○取り組みの内容

[ニュースしらべ]

前任校から続けている、教師がコピーした記事の内容を生徒がワークシートに記入する形式を続けている。

その日の、生徒たちが理解しやすく身近に感じ興味を持ちやすいような記事を探し、人数分コピーをして配布する。

「いつ」、「どこで」、「何があった」という部分を教師が蛍光ペンでそれぞれ色分けしてマーキングする。(いつ・・・緑 どこで(だれが)・・・オレンジ 何があった・・・黄色)

生徒たちはその色の部分を見て、「いつ」、「どこで」、「何があった」を見つけ、自分でワークシートに書き込めるようになっている。

見出しを書き写す部分もあり、「新聞は見出しを見れば、どんな記事かがわかる」ということを意識させている。

また、その記事に沿った質問を設けることで、もう少し深く記事に興味を持ってほしいと考えた。

最後に、この記事に対して「思ったこと」をどんなに短くてもよいので書くようにしている。

ワークシートを配布する前に、記事をみんなで読んだり、教師がだいたいの内容を説明したりしている。漢字がまだたくさん読めない生徒には、個別にふりがなをふっている。

今年度は、1年生(3名)の生活単元学習の中で取り組んでいる。

大相撲 御嶽海優勝の記事



いつ
どこで
何があった

ワークシート

今日のニュース
1月 24日 (月)

自由し
御嶽海V大関昇進へ

いつ
23日

どこで
東京・両国国技館

何があった
大相撲10日目の御嶽海が優勝を果たし、11日の11時25分、12時15分、13時15分の3回、大関昇進を果たした。

思ったこと
相撲は見ていない、でも読んで知ることができた、すごいと思う。

R4.1.24 毎日新聞

3名ともあまりお相撲は、見ないという。

学習初日は、「いつ」「どこで」「なにがあった」を色分けしてマーキングしても、その意味が理解できず、やみくもに取り組み始める生徒ばかりだった。

相撲は、テレビでもやっているの、見たり聞いたりしてなじみがあるかなと思ったが、3名とも、「すもうは、あまり見たことがない」と書いてあった。

うまい棒値上げの記事



ワークシート

今日のニュース
1月 24日 (月)

自由し
うまい棒 値上げへ

いつ
24日

どこで
東京・両国国技館

何があった
大相撲10日目の御嶽海が優勝を果たし、11日の11時25分、12時15分、13時15分の3回、大関昇進を果たした。

思ったこと
相撲は見ていない、でも読んで知ることができた、すごいと思う。

今度は、なじみがあるでしょ。
遠足にはかかせない「うまい棒」

えー！あまり食べないのね。
値上げに少しはびっくりしたかな？

うまい棒もあまり食べないという生徒が2名。それでは、1979年の発売以来初めての値上げ！というところにびっくりしてほしかったが、

思ったこと
値上げは別に重大ではないのですね。

生徒にとって
値上げは別に
重大ではない
のですね。

今年度は、「いつ」「どこで」「だれが」と「思ったこと」のほかに、もう一步深く読んでほしいと考え、簡単な質問をつけることにした。

「うまい棒」の記事での簡単な質問に、皆すらすら答えられたので、次の日のコロナ関係の記事で、少し掘り下げた質問をつけた。

コロナ関連の記事



北海道新聞 R4.1.26

「どうして」とか「なぜ」という質問の意味がよく理解できない生徒も、このコロナのニュースに関しては、尾身会長がうったえた理由がわかったようである。「コロナがうつったらたいへんだから」と書いてある。

トンガ沖噴火での津波の記事



ワークシート

今日のニュース
1月26日(木)

出した 今まで以上にマスクと換気を

いつ 25日

だれが 尾身会長

何をした 今まで以上にマスク着用と
き屋をが大事とまでおっしゃるまで
がわかった。

尾身会長は、なぜ、そううったえたのでしょうか
コロナがうつらしたらたいへんだから

思ったこと コロナウイルスが怖いので、
7つおちこまるので"マスク"をします。

ワークシート

今日のニュース
1月27日(金)

出した 広域で津波奄美1.2メートル

いつ 16日(木)

だれが 気象庁

何があった トンガ沖で地震があり、津波が起きた。

思ったこと 津波が怖いので、避難場所に行きます。

これは、昨年の形式のワークシート。トンガ沖の噴火は、いろいろな視点から記事が書かれていたので、2日に分けて学習した。



トンガ沖 噴火のニュース

北海道で津波がいちばんはやく来たところは（第1波）どこですか

金川足湯

それは、最大何センチでしたか

40cm

北海道で、一番 波が大きいところはどこですか

苫小牧市

それは、何センチでしたか

90cm

苫小牧市では、昔も津波の被害がありました。それは、いついつの何という地震の津波でしたか

1952年

被害の人数

17名

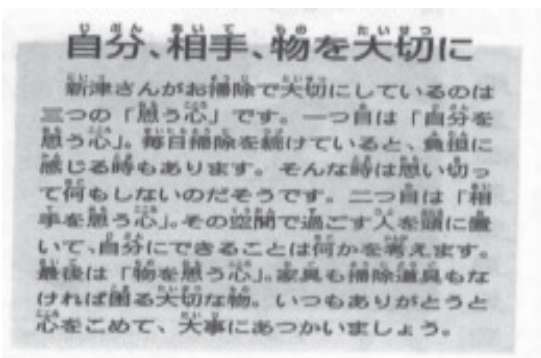
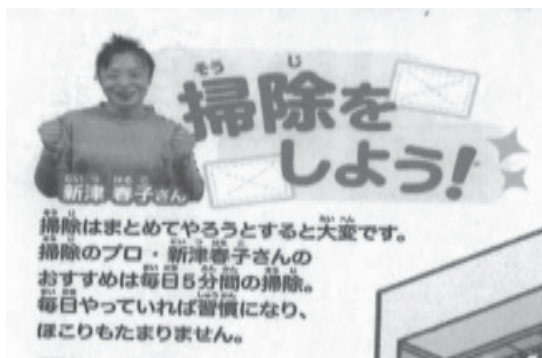
被害の人数

17名

同じ日の記事だが、こちらは北海道への津波の影響の記事である。1年生は、平成20年生まれで東北の震災の時の記憶がない世代である。今回は幸いにも犠牲者が出なかったが、かつては、何人もの犠牲者が出ていること、昔も遠い国でおきた地震によって北海道に津波が来たことなどを学習できた。

< 成果と課題 >

今年度は、1年生が「ニュース調べ」に取り組んだ。はじめは、何をしてよいのか戸惑う場面もあったが、回を重ねると要点を見つけワークシートに書き込むことができるようになった。普段の生活でも自分の考えをまとめて書くことが苦手な生徒たちであるが、この学習がなければ一切触れることのなかったであろう世の中のニュースに対して、一言でも感想を書くことができたのは成果である。



朝日小学生新聞R3.11.29

これは、清掃の達人「新津春子さん」のお掃除の特集記事である。3年間教室に新聞のある生活をしてきた3年生の男子生徒。道徳の授業で彼女のことを知りその後この記事を見つけて一言。「ここ！」と。それは、【大切にしていることは、相手を思う心】。道徳で学習したときにも新津さんが言っていた言葉である。彼は、高等支援学校の受検で清掃の技術が学べる学科を選んだ。そして面接練習に向けて考えた内容が「将来、清掃の仕事につきたい。なぜなら相手のことを考える仕事だから」というものだった。

義務教育学校開校につなげるNIE活動

富良野市立樹海中学校 杉 本 仁

1 はじめに

本校は富良野市の南東部に位置し、校名の通り、広大な自然林を有する東京大学北海道演習林に隣接する、全校生徒16名の学校である。令和元年度から、NIEを学校運営計画に位置付け、学校全体としてNIEを活用した実践を推進している。富良野市の市街地まで車で30分ほどかかる本校生徒は、書店（市街地に1店舗のみ）や市立図書館へ行く機会も限られ、読書環境が充実しているとはいえず、活字に触れる機会が少ない環境である。NIEの取り組みを進めることで新聞をはじめとする活字に触れることを身近なものとして捉え、生徒の読解力や表現力の向上、更に多様な考え方に触れることで得られる、多様な価値観の醸成や他者理解に結びつけることを意識し、日々の実践に取り組んでいる。

2 実践の経緯

（1）学校経営計画の明記と組織的な取組へ

本校が目指す目標の一つに生徒の学力の向上があげられる。全国的な学力調査でも、「読解力・表現力」に課題があると分析されており、「読解力・表現力」の向上は急務である。前述の通り、活字に触れる機会や、読書環境の面では課題が多い本校の状況を、NIEの実践により改善していくため、今年度も継続して、「NIEの実践」を学校運営計画に明記し学校全体として取り組んできた。（ただし、今年度は義務教育学校開校に向けた教育計画の全面的な見直しが行われたため、記述は教務部の学習係のみとなった。）

取組の推進は本校の組織「学力・体力向上プロジェクト」が担い、生徒の現状を踏まえながら、具体的な方策を立てている。右の資料にある通り、NIEの取り組みを、教科の授業や道徳で活用し、2紙の記事の違いを見つけることなどで、多面的・多角的な価値に触れさせたり、現代社会の諸問題を考えるきっかけにしたりという例を示している。

このような中、今年度も全校体制のもとで実践を進めた。



「学力・体力向上プロジェクト」会議資料

3 実践の概要

今年度も次の3点を全学年で統一して取組を進めた。

- ① 取り組む時間と場所を明確に設定する。
- ② 継続できるよう無理のない取組にする。
- ③ 全校で統一した取組方法を明確にする。

(1) 取り組む環境の工夫

本校では、毎週月曜日の朝の10分間を「N I Eタイム」と位置付け、全学年、朝の会前の時間帯に取り組んでいる。取り組む時間に限りがあり、活動を円滑にするため、生徒が生活する教室と同じ空間に新聞を設置し、すぐ手に取りやすい環境に整えた。毎日送られてくる最新のものは週ごとに専用の棚に掲示した。また、過去の新聞記事に戻って取り組めるよう普段から施錠していない図書室の机に過去1か月分の新聞を置くスペースを作っている。生徒はより自分の関心事に合わせた記事選びが可能になり、意欲的に取り組む様子が見られた。



図書室で新聞を読む3年生



(左) 過去の新聞は図書室に (右) 最新版は新聞棚に配置。

(2) 継続させるための工夫

「学力・体力向上プロジェクト」で話し合い、継続させるためには無理のない取組が不可欠であると判断し、次の工夫を考え実践している。

【継続させるための工夫点】

- ① 記事選びは「こうあるべき」というような強制は一切行わず、生徒の興味や関心に委ねる。選ぶ記事がたとえ小さかろうが、新聞広告であろうが生徒が気になった内容を優先させる。

実際には、初めはスポーツの記事ばかりだった生徒が、ミャンマー問題など、社会問題の記事に目を向けていく変化を感じ取ることができ、生徒の成長を実感することができます。

- ② 記事選びと発表について、(1) で設定した時間で行うことを原則とし、2週を1サイクルで行う。

また、発表自体は短時間で設定し、そのための準備に手間をかけない。



-

全校体制で行うため、(2)で記した工夫を徹底させるため、全学年で統一して同じシート(右)を活用している。使用するシートには、「記事を選んだ理由」と「記事を読んだ感想・考え」を60字程度で書けるマス目とし、発表の際の原稿用紙としても活用させた。ここには、記事についての自分なりの考えが表されており、発表後に記事と一緒に掲示したりファイリングしたりすることで自分の取組や学びの蓄積とさせた。生徒の中には、自分の取組の蓄積を振り返り、新たな記事との関連を述べる者もいた。

[illegible]

NIE特集号に掲載していただいて

掲載していただいた記事は、台紙に貼り廊下に掲示し生徒がいつでも見られるようにした。

8月15日 北海道新聞NIE特集号より



4 終わりに

現代社会を生き抜くには、巷にあふれる情報をしっかりと見極め、情報の真偽はもちろん、自らに必要な情報を取捨選択し、正しく活用する能力が必要である。インターネット社会の良さは、十分に理解されており、それをどのように活用していくかが非常に重要である。ある意味アナログな紙媒体の新聞の役割が薄れつつあると感じるときもあり、実際に新聞を購読せず、ネットニュースに頼る風潮は、若者だけでなく広がっている。

活字離れ、新聞離れが進む中で、学校で新聞を読み、社会の様々な情勢に興味を持つことは、非常に貴重な機会であり、重要な経験となる。令和4年1月に文部科学省が発表した、第6次「学校図書館図書整備等5か年計画」で、学校図書館への新聞の複数配置が予算化された。配置するだけでなく、どう活用するかが重要である。

NIEの実践は、活用方法の宝の山ともいえる。NIEの取り組みを経験している学校が、今後のリーダーシップをとっていくことになる。

樹海中学校は、令和4年3月で閉校し、4月から樹海学校という義務教育学校が開校する。NIEについては、これまでの取り組みを生かし、対象を5・6年生にも広げて実践していく予定である。

新聞やインターネットの特徴を理解し、新聞で気になった記事の内容を、インターネットで深く調べたり、関連する内容を調べたりするなど、更なる広がりがイメージされる。

何よりも、図書室で新聞を読む8年生・9年生の傍らで、1・2年生が楽しく絵本を読んでいる姿を想像すると、義務教育学校の教育に期待が膨らんでくる。



樹海学校の校章



樹海学校の校舎となる現在の樹海小学校の校舎
(緑色の東屋の左側に増築し、樹海学校の校舎となる。)

中学校社会科で新聞を活用した実践

音更町立緑南中学校 教諭 掛水 成幸

1. はじめに

①学校の概要

全校生徒 374 名 16 学級（特別支援学級含む）である。

本校は、広大な十勝平野のほぼ中央部に位置する音更町南東部にあり、畑作地帯の真ん中に立地しているが、帯広市のベッドタウンということもあり、保護者が農業従事者である割合は低い。

生徒は明るく素直で、挨拶がきちんとできる。学習に意欲的に取り組む生徒が多いものの、学習の基礎・基本の定着度には差がみられる。



②これまでの NIE 活動

本校では、これまで教科や総合的な学習の時間で学んだことを、はがき新聞やタブロイド新聞などにまとめる活動に積極的に取り組んでいる。また、学習以外でも学級新聞づくりにも取り組んでいる。これまで5年間 NIE 実践校の指定を受け、新聞提供事業を継続して受けることで、授業等での新聞の活用、新聞の閲覧コーナー、掲示による情報提供など充実した活動を行っている。



歴史的分野の最後に、現代の日本の課題について「はがき新聞」にまとめ、公民的分野をスタートさせた。



③授業実践のバックアップ

授業実践ではタブレット端末から、北海道新聞社の新聞記事データベース「まな bell」を使い、生徒各自が課題に関わる新聞記事を見つけ、課題解決につなげた。更に地元新聞社である十勝毎日新聞社から単元に関わる新聞記事の情報提供を受けるなど、授業実践に関わり全面的なバックアップのもと研究を深めることができた。

2. 実践の内容

【実践1】身近な地域とSDGsを活用した実践

(1) 3年 社会科「現代社会の特色と私たち」

(2) 単元（題材）について

この単元では、現代社会の特色「グローバル化」「情報化」「少子高齢化」の三つのほか、それから影響を受けて生じる課題を解決するための必要な考えとして、「持続可能な社会」と「社会参画」を取り上げている。

今回、生徒の生活体験と学習内容である現代社会を結びつけるために、**身近な地域（音更町）**の事例を学習に取り入れて単元を構成した。

新聞記事を活用することで、日常生活と学習内容を関連付けることができ、具体的事例を通して、持続可能な社会に向けての取り組みやグローバル化について理解を深め、多面的・多角的に考察することを考えた。身近な地域社会との関わりを意識した課題を追究することで、自分のこととして捉え、主体的に社会に関わろうとする生徒を育てたい。

(3) 実践の内容

持続可能な社会を実現するために様々な視点から社会を考察し、課題解決のために自分の考えをまとめることを目標に授業を行った。

まず、SDGsの資料を基に、17の目標を確認し、身近な食品ロスとつながる「つくる責任 つかう責任」を取り上げた。世界では生産された食料の1/3が捨てられ、日本でも年間約600万t（1人あたり年間約50kg）の食料廃棄があることを実感させた中で、その対策を考えさせた。さらに、互いの考えを交流することで、多様な対策に触れ、自分の考えを深めることができた。

また、校区内の身近なスーパーの新聞記事を取り上げ、日常の社会生活と学習内容を関連付けた。新聞記事から「つくる側」が規格外野菜を商品化していることを読み取り、生産物の有効活用化や付加価値化について追究した。

単元の指導計画（5時間扱い）	
時間	学習内容・学習目標
1	T市のまちの様子から現代社会をながめてみよう ○身近な地域（音更町）に見られる現代社会の特色について自分の体験や調べたことをまとめる。
2	1 持続可能な社会に向けて ○持続可能な社会の実現について、 身近な地域（音更町） の事例を通して多角的な視点で考察する。
3	2 グローバル化 ○グローバル化により、便利になった点や課題について、 身近な地域（音更町） の事例を通して多面的な視点で考察する。
4	3 少子高齢化 ○少子高齢化の進行や家族の多様化に伴う課題、解決に向けた 身近な地域（音更町） の取り組みについて、自分の考えを表現する。
5	4 情報化 ○情報化の進展により、 身近な地域（音更町） の中で便利な点、課題を挙げ、解決のためにできることについて考察し、表現する。



【実践2】道新まなbellを活用した実践

- (1) 3年 社会科「現代社会の特色と私たち」
- (2) 単元について【実践1】と同じ単元
- (3) 実践の内容

この授業では、グローバル化の仕組みや、グローバル化が日本の農業にとってどのような影響があるのか、地元音更の事例をもとに考えることを目標に授業を行った。

生徒一人一人がタブレット端末を使い、北海道新聞まなbellの記事データベースから記事の検索を行った。

音更の製菓が他地域からの客を集めている理由を新聞記事から「安い」「お得」とともに「交通が便利になった」ことを読み取り、交通が発達することで他地域との結びつきが強まり、世界の一体化を進める要因になっていることを理解させた。



グローバル化が進むことで国際競争・国際分業が進むことに触れ、それにより日本の食料自給率が低くなっていることを確認した。その中で、日本の食料基地と呼ばれる北海道の農業に競争力がないのかという疑問をもたせ、音更の輸出品について記事データベースを使い現状を調べさせた。

調べると地元乳業メーカーの「牛乳」がシンガポールへ輸出されることが書かれた記事があり、なぜ北海道の牛乳が遠く離れた場所で、しかも日本よりも高値で販売されているのかを追究し、グローバル化のメリット・デメリットをまとめさせた。

【実践3】新聞の投書

- (1) 実践の内容

学習したことをもとに「農業の魅力どう高める」のテーマで新聞の投書に挑戦した。

「小中学校で農業の科目を設ける」「修学旅行と農業体験を結びつける」「体験型・観光融合型農業」「AIを活用し高齢者・若者の双方にメリットある農業」「地域の魅力ある農産物のブランド化」など生徒の知識と感性が詰まった提案が多く見られた。

新聞から学んだ知識を、授業の中で追究し、自分の文章としてまとめる。そして、その文章が新聞に掲載されることで、さらに多くの人に読んでもらい広がっていく。生徒にとって貴重な経験になったと思います。



十勝毎日新聞 2020.2.18

3. 成果と課題

(1) 成果

身近な事例を扱った新聞記事（特に地元音更町）を使うことで、日常生活の中から社会的な事象を捉えるきっかけをつくることができた。単元を通して音更町を取り上げることで、子どもたちの学習意欲が高まり、追究活動に意欲的に取り組む姿が見られた。

食品ロスの考察では、自分たち消費者視点以外に、規格外野菜の活用を扱った新聞記事を活用することで、生産者視点からも考えることができ、学習内容の理解を深めることができた。

記事データベースを使うことで、子どもたちが自分の力で学習内容にあった出来事を調べることができた。ネット検索するより、必要な情報をより絞ったかたちで手に入れることができた。また、検索した記事から、地元音更の農産物が海外へ輸出されていることに気づくとともに、日本国内よりも高値で販売されている商品のパッケージから世界の中で「北海道」がもつブランド力を知ることができた。

(2) 課題

記事データベースを活用では、一斉に活動を進めることができない場面があった。教師も子どもたちも慣れていないこともあり、予想外に時間がかかってしまった。今後も ICT の活用を継続していくことで、よりよい使い方を研究していきたい。

新聞記事では、長い文章の記事もあり、内容把握に時間がかかる生徒が見られた。国語科との連携や新聞スクラップの活動に取り組むことなどで、記事の内容を要約する力を高めるとともに、記事をあらかじめ加工するなど、より読み取りやすい記事の提示方法を工夫していきたい。



4. 終わりに

学校で学習したことを記事の中に見付けた生徒たちは、自分たちの地域についての社会認識が深まる。そして、日本の他地域ではどうなのか、世界ではどうなのかと、自分から進んで学びに向かうようになる。それこそが「学びに向かう力、人間性など」を育むことにつながることを今回の実践を通して学ぶことができた。今後も新聞を活用することで、生徒の力を引き出し育てたい。

「小樽の未来をつくる北陵生の育成」に取り組む N I Eについて

小樽市立北陵中学校 教諭 野里 岳司

I はじめに

本校は、「小樽市立北山中学校」「小樽市立末広中学校」の2校が統合し、新設校としてスタートを切ってから5年目を迎えた。教育目標を「小樽の未来をつくる北陵生の育成」と定め、「深く学び、考え、表現できる生徒」「豊かに人とつながり、思いやりのある生徒」「たくましく心身を鍛え、自らを律する生徒」とし、故郷小樽のまちづくりの担い手となる生徒の育成に努めている。

しかし、全国学力・学習状況調査の結果から、本校の生徒は、国語科では「書くこと」「読むこと」の領域が全国平均を下回り、数学科においても理由を説明する問題で無解答率が高いなどの課題が明らかになっている。また「語彙」が不足していたり、言葉を紡ぐ術が未熟だったり、物事の発想の基となる「実体験」に乏しいなど多くの課題を抱えている。

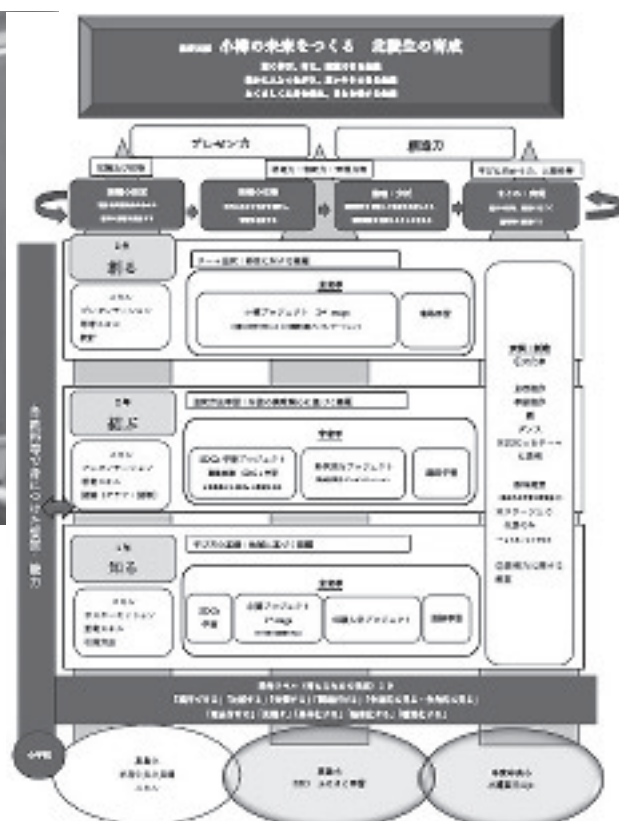
これらの課題を解決する一つの方法として、教育課程の中に、週に一度の「N I Eタイム」を設定し、「書く活動」「読み取る活動」に取り組んでいる。

II 実践の概要

1. 教育課程への位置づけ

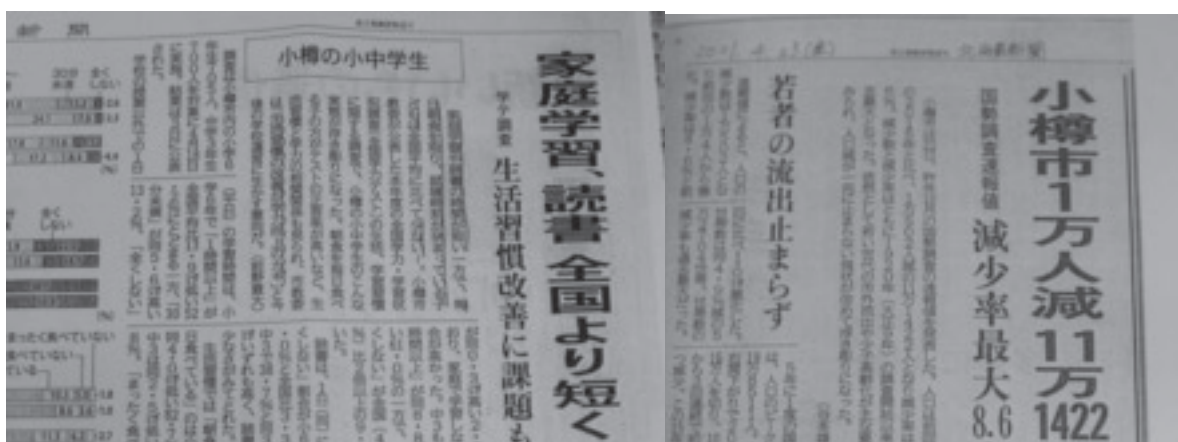
（1）小樽の記事を読んで考える～総合的な学習の時間での活用～

本校の総合的な学習の時間は、小樽の地域創生を考える「小樽プロジェクト」を中心に展開している。その取組において、導入や課題発見時に新聞を活用している。また、「N I Eタイム」で「小樽の今」を見つめるため、年間を通して新聞を使用し小樽のことを知る機会を設け、総合的な学習の時間へのアウトプットに活かしている。



（２）４種類のワークシートで考え、表現する～NIEタイムでの活用～

「小樽の未来をつくる北陵生の育成」を目指し、本校生徒の「書くこと」と「読むこと」の領域の課題解決を目指し、教育課程の中に「NIEタイム」を設定し、毎週金曜日に４種類のワークシートに隔週で取り組んでいる。



(小樽の記事を読む) ↑北海道新聞 2019/9/11

↑北海道新聞 2021/4/23)

①「NIE」を通して付けたい力

【NIEを通して付けたい力】

1. インプットする力（速く、正確に読み取る力）
→「コラム」を2分で読めるようにトレーニング
2. まとめる力（キーワードを基にイメージする力）
→「要するに何なのか」をつかむトレーニング
3. アウトプット力（思いを分かりやすく伝える力）
→「思い・考え」を言葉にして伝えるトレーニング



②「４種類のワークシート」

- ・小樽の記事を読んで考える。
- ・コラムを読んで、文章を書く。
- ・さまざまな記事を読み、情報を読み取る。
- ・長文を読んで、答えを導く。



また、今年度は第2学年において読売新聞の「読解力向上プロジェクト」に参加し、読解力向上を目指した。前期15回配信された記事教材に取り組み、事前事後の効果検証を受けた。その結果、事前事後テスト平均点で0.84ポイント向上することができた。

【事前・事後の得点】

シートに取り組んでいない子どもたちと事前・事後テストの平均得点を単純比較。

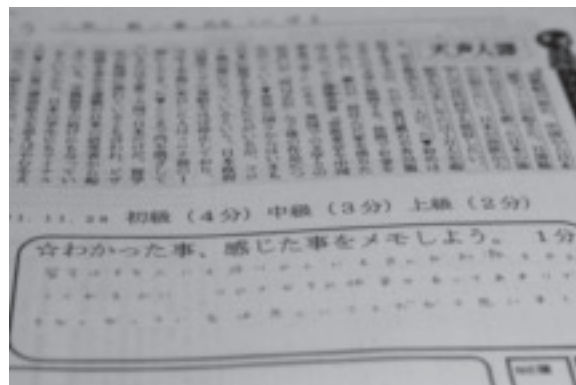
◆全体（中学生）			
	事前テスト	事後テスト	両テストの得点差
全国平均（1755人）※中2	4.68	4.90	0.21
小樽市立北陵中(71人)	4.25	5.08	0.84

③道新川柳への応募

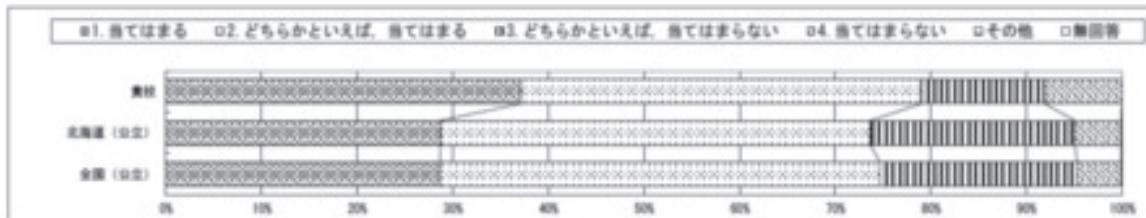
コラムを読んで考えたことを川柳や短い詩で表現をしている。そのワークシートを担当者がチェックし、優れた表現作品を「どうしん川柳」へ投稿している。コロナ禍の中で、なかなか取り組みない期間もあったが、本年度はすでに12月現在、40作品を投稿し、5作品が新聞に掲載された。

④生徒の変容

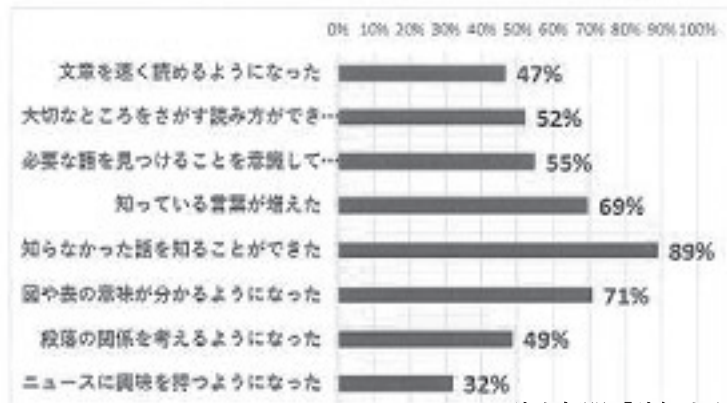
コラムの活用では、裏面の原稿用紙に、その記事を読んで自分が考えたことを200字にまとめる活動も行っている。10分という短い時間の中で、まとめることを繰り返しながら、少しずつではあるが、書く事への抵抗感は少なくなりつつある。その結果は、3年生の全国学力・学習状況調査の質問紙からも見て取ることができ、「目的に応じて自分の考えが伝わるように根拠を明確にして書いたり表現を工夫して書いている」と回答した生徒が全国平均より8.5ポイント高くなっている。



質問番号	質問事項										
(49)	国語の授業では、目的に応じて、自分の考えが伝わるように根拠を明確にして書いたり表現を工夫して書いたりしていますか										
選択肢	1	2	3	4	5	6	7	8	9	その他	無回答
貴校	37.1	41.9	12.9	8.1						0.0	0.0
北海道（公立）	28.7	45.0	21.4	4.8						0.0	0.1
全国（公立）	28.6	46.0	20.6	4.6						0.0	0.1



新聞記事教材に取り組んで「どのような変化があったと思いますか？」



読売新聞「読解力向上プロジェクト」事後アンケートより

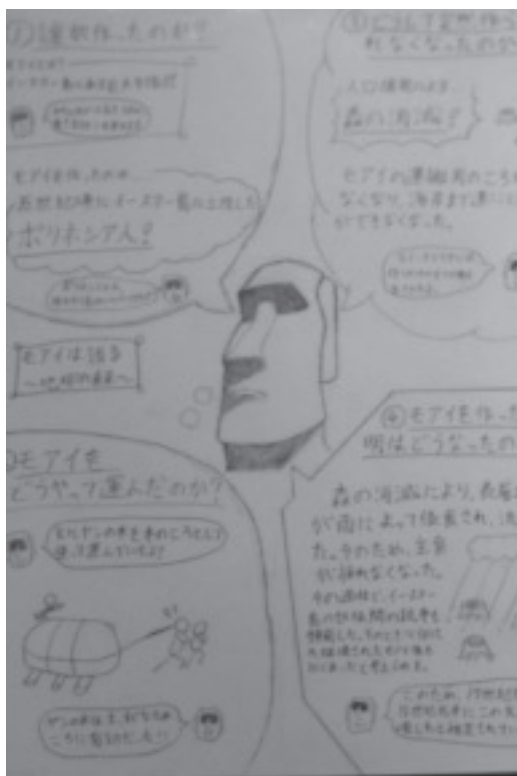
2. いつでも新聞を読める環境づくり

図書室だけでなく、3年生教室横や2階階段前掲示版など、生徒の動線を考えて目に触れやすい位置に新聞を設置している。3年生では面接練習に向けて、新聞を広げる生徒の姿が多く見られている。



3. 教科での連携

国語科でのまとめ作業や社会科や数学科、英語科でのレポート作成やスライド作成など、文章を読みまとめる。自分の感じたことをまとめる作業を各教科に広げている。まとめ方を工夫したり、新聞の見出しのように取り組んだり、4コマ漫画のようにまとめたりと新聞の影響が見られた。



Ⅲ 5年目の成果

全国学力学習状況調査の結果や、標準学力調査の書くことの目標達成などから分かるように、生徒の「アウトプット」する力が身につけてきていることが分かる。さらに、書くことを意図的に取り組んだことにより、生徒の抵抗感がなくなっている。

また、全国学力・学習状況調査の国語では、NIE を取り組み始めてから毎年のように全国との差が縮まってきた。意図的に書く活動を取り入れながら、漢字での文章表記やより見やすいレイアウトなどを生徒自らが考え取り組む機会を確保しながら、生徒の意欲を引き出し今後とも「小樽の未来をつくる北陵生」の育成に向けて、NIE の活動とともに進めていきたい。

倫理の授業に新聞記事を教材として活用する取り組み

～現在のキリスト教と LGBT を題材に～

北海道釧路東高等学校 教諭 山岸 皇

1 はじめに

本校で NIE の取り組みは 2014 年度～2016 年度の 3 年間に国語科主体で参加していたが、今回は地歴公民科でも新聞を活用した授業づくりに取り組んでみたいという思いで、参加及び実践授業を行った。今回の趣旨としては、新聞をメインとするよりも、教科の特質を踏まえて新聞を活用することの意義に重点を置いた。倫理の授業における多様性理解や共存社会の考え方として、新聞が現在の諸課題を探究する起点となりうると考えている。

2 LGBT とキリスト教の関係を倫理の授業として実施する意義と新聞活用の意義について

平成 30 年告示の学習指導要領解説公民編に「社会的事象等を倫理、哲学、宗教などに関わる多様な視点（概念や理論など）に着目して捉え人間としての在り方生き方についての自覚を深めることに向けて、課題解決のための選択・判断に資する概念や理論などに関連付ける」とあるように、倫理的な見方や考え方を養うことは、多様な観点で物事を考える力となる。そのためには、授業の中での知識にとどまらず、学んだことを現代の課題と照らし合わせ、活用することが重要である。従って、正解が一つにとどまらない現代の倫理的な諸課題を協働して探究することにより、倫理という科目の持つ特性を最大限に活かすことが可能である。そのため、本単元では基礎基本的な知識を学んだうえで単元の最後に現代の諸課題につながる形を取り、今回はキリスト教における現在の諸課題として、LGBT とキリスト教の関係について扱う。

授業の概要については、キリスト教の一部（主にカトリック）において同性愛が禁止されている理由を学び、聖書や新聞などを活用し、現代の価値観と宗教の決まりを考える授業



2021 年 7 月 10 読賣新聞 より掲載

構成とした。思考の出発点として 2021 年 7 月 10 日の読売新聞にある LGBT に対するハンガリー新法の記事を扱うことで、より具体的にイメージを持ちながら、実際の聖書にはどのような記述があるか、YouTube 上にあげられている現牧師（プロテスタント）の LGBT に対する解釈など、多様な視点から課題について学びを深め、新聞記事に対する自身の考えをまとめていく。その際、本授業は課題を解決することを目的とするのではなく、現在の諸課題について考えるきっかけとすることで、今後の人生において「物事の背景や多様な文化と考え方があることを踏まえて思考する要因」を作ることを目的とする。

新聞を扱う意義については、教科の内容を現代の諸課題につなげる役割を持つことが挙げられる。学んだ知識や考え方を現代の課題と結び付けて深めることは知識を生きたものにする。そのための教材として新聞は大きな意味を持ち、知識の習得だけにとどまらない授業の構成や課題解決型学習などの教材としては最適であるため、現代の諸課題の導入として活用できるので、倫理における新聞活用の意義は十分である。

3 教材としての新聞選び

今回、教材としてこの新聞を選ぶ際に、まずキリスト教の授業を実施する予定であったことから、2021 年 5 月～9 月までの新聞を 4 社ほど毎日読みながら、題材となるものを探した。個人的に新聞から授業を作るよりも、扱う単元からそれに合う新聞記事を探したかったためである。より、簡単な方法としてはデジタルメディアを活用して検索すればよいので、時間を短縮したい方にはそちらがお勧めである。最終的には複数の関連記事を見つけたが、ハンガリーにおける同性愛の問題について扱うことが生徒に宗教が現在の世界でどのような課題を持っているのか、また簡単には解決できない課題があることを理解することができると思ったため、この記事を選んだ。

4 実践事例報告

教科・科目	倫理（選択科目）
授業対象クラス	3 学年 1 クラス（15 名）
単元名	第二章人間としての自覚 第二節キリスト教（全 7 時間構成、本時は 7 時間目）
ねらい	新聞記事を出発点とし、現在のキリスト教と LGBT における課題について多様な視点から考えを深め、理解と現在の諸課題について考えるきっかけを与える。
新聞活用のポイント	新聞記事を導入とし、現在のハンガリーでキリスト教と LGBT がどのような背景で衝突しているか考える起点として活用した。新聞を読み、生徒はこの法案の何が問題で、どのような問題につながるかを考えさせ、どのような背景で問題が発生しているのか、現聖職者はどう考えているかなどの学びにつなげた。また、今回で終わり切らなかったが、次の時間で新聞を読んで解く形式の論述問題を作成させた。

授業の概要

学 習 活 動

【導入】

- (1) 日本で LGBT に関する描写を禁止した場合、何が禁止されるか考える。
- (2) 新聞記事を読み、ハンガリーで LGBT の描写が禁止された理由を読み取る。

【展開】

- (1) カトリックがなぜ LGBT に反対するのか、聖書などの資料を使い、考える。
- (2) YouTube 上の牧師さんが示している LGBT の見解を聞いて、批判的に考える。

【まとめ】

カトリック教徒と LGBT に関係し、新聞を活用した試験の論述問題を班で作成する。

留 意 点

今回のテーマが LGBT であることから、事前事後のケアを行いながら、配慮を欠かさずに行った。

生 徒 の 反 応

現代社会における寛容の大事さもありながら、宗教として何を大事にするべきかという葛藤で悩んでいる様子が見え、考えることの重要性を実感している様子であった。また、新聞を読むことで今まで学んだ知識が活用できることに気づく生徒もいた。

【授業時使用ワークシート】

プリント№24 倫理 キリスト教と現代の諸課題	年 組 名 前
授業目標 宗教のきまりと現代社会の価値観の違いが課題となっていることについて理解し、試験問題の作成を通して LGBT やキリスト教への考えを深める。 副 題 どうすれば LGBT とキリスト教は共存していくことが出来るのか？	作業3【個人】 (基・科・道) ・キリスト教では性的少数者を否定的に見る人も存在する。資料2の旧約聖書の一部を見て理由を考えよう。
作業1【グループ活動】 ・日本で LGBT の表現を禁止した場合には、何が禁止になるだろうか？	作業4【個人】 ・すべてのキリスト教徒が LGBT に否定的なのだろうか？中川牧師の動画をみて、考えたことなど、疑問に思ったことを書こう。
作業2【グループ活動】 (知識・技能) ・資料1の新聞記事を読んで、何が問題点なのか書いてみよう。また、ハンガリーでは LGBT の人にどのような問題が発生すると予想できるか？	作業5【個人】 ・ここまでで学んだキリスト教や LGBT の知識を踏まえ、ハンガリーの報道に関する新聞記事(資料1)を使い、論述問題(いつもテストに出してるやつです)を考えなさい。その際、LGBT について考えさせる問題とすること！ 第 1 次 の新聞記事を読み、 ただし、3行以上書くこと。

プリント№24 倫理 キリスト教と現代の諸課題

【まとめ】

・今回、あなたがLGBTについて考えたこと、または新聞から感じたことなどを書いてください。読者の感想をお願いします(200)

年 組 名 前

	作業2	作業3	作業5
A	新聞記事の問題点を指摘し、記述されている。また、パンダリーでLGBTの人たちにどのような課題が起きているか、LGBTの視点に立ち、具体的に述べている。	聖書から啓蒙を興し、述べることも出来ている。	LGBTとカトリックの価値観の相違について考えさせる問題であり、新聞記事も読み取らせる構成になっている。
B	新聞を読み取ろうとしている。また、パンダリーで開教するLGBTの課題を考えようとしている。	聖書を読み取ろうとした記述である。	LGBTについて、またはキリスト教について、現代の諸課題を考えさせる問題である。
C	自叙である。また、記述内容が不適切	自叙である。また、記述内容が不適切	LGBTやキリスト教について考える問題だが、現代の諸課題に基盤できていない
評価			




5 実践の成果と課題

成果としては、生徒のワークの記述や感想から、自分なりの価値観と今回学んだ多様な立場、主義、主張、価値観を踏まえ、自分なりの価値観と組み合わせながら書いていたので、現在の課題を考えるきっかけづくりという点については成功したと言える。反省点として、作業3の問いは適切でないことや、聖書から何を考えさせるべきだったかという点に今後の課題がある。ほかにもグループで実施する意義がない場面もあり、その分生徒の意見を交流する時間を増やすなどの工夫をするなどがあげられる。また、評価まで構成を考えなおし、ループリックのポイントを勉強する必要を感じた。

6 おわりに

今回、はじめてNIEの実践発表を行うにあたり、新聞のために授業をしないよう意識した。授業の本質は教科で身に付けるべき資質・能力の育成である。倫理という科目を尊重するため、新聞選びも慎重に行った。実際に実践してみると新聞には教材としての可能性を感じた。今後も、学んだ知識や考え方が生きるようにするため、新聞を教材として活用する取り組みに努めていきたい。

学校生活に新聞を取り入れる

星槎国際高等学校旭川キャンパス 加藤兼司

1、はじめに

スマートフォンやパソコンが普及し、一人一台所有するようになってきている。特に高校生年代では、SNSの活用など、文字を活用した活動は、むしろ増加傾向にあると言える。文字を活用するにあたり、必要な力を鍛えることができる「新聞」を生活に取り入れることが、生徒にとってもプラスになるのではないかと、NIE 実践に関わることにした。

2、取り入れた事例

(1) 進路指導の一環としての活用

- ・本校の進路指導計画

1	5月25日	オリエンテーション
2	6月8日	適職診断の実施
3	7月6日	企画検討会
4	7月13日	適職診断の結果・解説※講話
5	9月7日	インターン準備※講話
6	10月5日	インターン準備(中止) →プレゼン発表会準備
7	10月19日	インターン準備(中止) →NIE
8	10月26日	インターン(中止) →オンライン企業紹介実施
9	2月22日	NIE(予定)
10	3月8日	まとめの講話

本校では、2年生を対象として、旭川市とマイナビが連携した事業である「ローカス」に参加している。マイナビによる講話や学習、AI マッチングによるインターンシップが中心となる。新型コロナウイルスの影響で、一部の実施のみとなり、実施時間が空いたこともあり、新聞を活用した学習を数回実施した。

・新聞を自己分析として活用
活用したレポート



記事「北海道新聞 2021/9/1」

生徒の声

新聞は、スマホのニュースよりも詳しく書いてあり、読みやすいと感じます。小学生向けに解説された記事やコラムもあり、高校生にとってもわかりやすく、あまり人に聞けないことも解決できたりもします。今後も学校で授業に取り入れるなどして、新聞を読む機会を増やしてほしいです。

対面を避けて、オンラインでの活動が増えそうですが、記事からコミュニケーション力がより必要になることがわかりました。新聞を読むことで、たくさん頭を使った気がします。自己分析や将来について考えるために新聞を読むことが必要だと思いました。

実施後にオンライン企業説明会が実施された。「求められる学生」について知り、自己分析を実施したため、自分のやりたいことや方向性を意識しながら企業説明会に前向きに参加する生徒が多くいた。このことについて、アンケート実施などして効果測定が出来なかったのが反省である。

2. 新聞記事から考えてみよう

〇産官学共同研究会 新人推薦 タイプ

H22

ETC型

早くに関係を築こうとすると遠慮までの「バー」が聞かないので、エピソードの出し過ぎにご注意、IT 活用には長けているが、人との直接的な対話がなくなるのが心配。

H21

エコノミック型

環境問題(エコ)に関心が強く、節約志向(エコ)で無駄を嫌う傾向があり、割り目正しい。小さくためて便利だが、使うときには大きく広げる(育成する)必要がある。

〔参考〕 <https://www.kyushu-nishi.com/entry/2015/03/26/2356223>

①私はどんなタイプ? 自分の特徴や性質などを相手に伝える文章を作りましょう。

※性格・関心・関所などをまとめると書きやすいです。またエピソードがあるより伝わりやすいです。

②記事や記事の見出しを参考にして「企業が採用者に求める条件何かが」挙げましょう。

※「〇〇力」と書いても、文章で自分の考えをまとめてもよいです。

③新聞記事から、企業が採用する傾向として「チャレンジ」がキーワードである。視点点での「自分のチャレンジ」をまとめよう。

※箇条書きでも、文章で自分の考えをまとめてもよいです。

(2) 放課後活動として、新聞クラブの立ち上げ

- ・毎週火曜日の放課後。
- ・メンバーは固定せず出入り自由。
- ・先生、生徒へアンケート調査を実施し、興味ありそうなものを掲示。

先生：「選挙」「地域の話」「趣味・特技」の興味が高かった。

生徒：「政治」「地域」「コミュニケーション」の興味が高かった。

分類すると、先生、生徒ともに共通した話題を興味としてあることが分かった。



生徒の声

私は、北海道や地域、最近のウィルス状況について、興味を持ちスクラップしてまとめています。普段は新聞を読まないのですが、放課後の時間に多くの社会時事の記事に目を通し、自分の学習になっています。

星槎国際高等学校旭川キャンパスの特色の一つである「けん玉」について、新聞掲示した。8月にけん玉ワールドカップに参加し、全国の「けん玉ワールドカップ」に関する記事を収集し掲示した。全国に様々な新聞社があること、共通しているところ、同じ話題でも視点の違いで印象が違ふこと、など生徒にとって発見があった。



3、まとめ

今回の実践報告では割愛したが、日頃、私自身が生徒に伝えたい記事を切り抜き SHR で伝えるようにしている。そのためか、新聞掲示に目を通していている生徒を見かけるようになった。

今年度は、「発信する」を主なテーマに実践してきた。1、はじめに に述べたような「生活に取り入れる」までは至っていないが、生徒が社会に目を向けるきっかけづくりになっているのではないかと。今後は、生徒が毎日のどこかの時間で数分でも新聞に目を通すような習慣が身につくような環境づくりを目指していきたい。

新聞を読む、活かす。

北海道富良野高等学校 教諭 北村 智裕（2年次主任 地理歴史・公民科）
教諭 清野 俊也（2年次担任 国語科）
教諭 石川 佳奈（2年次担任 英語科）

1. はじめに

本校は創立96年目を迎える、1年次4学級（計12学級）、全校生徒399名の全日制普通科単位制高校である。

今年度、NIE実践校として認定され、主に2年次団を中心に「新聞を読む、活かす」をテーマに以下の取り組みで新聞を活用した。

- 各教科（国語、英語、地歴公民）
- 朝学習（小論文対策、時事問題対策）
- 進路実現に向けた取り組み（総合的な探究の時間）
- 見学旅行に向けた取り組み（LHR）

2. 実践内容

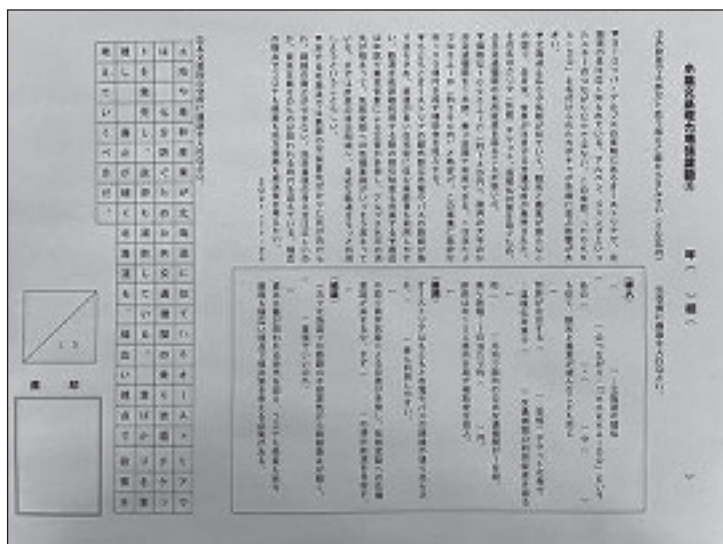
（1） 国語科におけるNIE実践「小論文基礎力向上（要約・時事問題）」（実践者：清野 俊也）

① 取り組み

- ア. 毎週木曜日の朝学習の10分間で新聞コラムの要約のプリントを実施する（穴埋め形式）
- イ. 見学旅行に際して長崎の平和教育について新聞コラムを利用し、事前学習をする。

② 目的

- ア. 小論文の基礎力は文章表現力よりも読解のスピードを上げることだと考え、穴埋め形式にして、文章を短時間で読ませることを重視する。また、基本的に毎週の最新の新聞コラムを使用することで、時事的な問題について生徒が知ることにも目的とする。
- イ. 10月に実施された見学旅行の前に、事前学習の一環として長崎の原爆を扱った新聞コラムの要約をさせ、平和教育についての造詣を深めることを目的とする。



③ 成果

- ア. 毎週、続けていくことで生徒のコラムを読むスピードは上がっている。5分以内で全ての穴埋めが出来ている生徒が大半となっている。また、時事問題については新聞を読むことの少ない生徒に対しても、必ず毎週1つ読むことで社会常識を学ぶ機会ともなっている。今後、3年次となり、面接や小論文でより時事問題の知識が必要となるため継続していきたい。
- イ. 見学旅行では、新聞コラム以外にもさまざまな事前学習を行ったが、集中した期間の中で新聞コラムも利用することで、生徒の意識も高まったと考える。

④ 反省

- ア. 生徒が文章を読むスピードは上がったが、要領よく穴埋めをする作業に集中し、読んでもから取り扱われている問題について考える機会も欲しい。
- イ. 毎週、最新の時事問題を扱うことで生徒のメリットも大きいですが、手作業で穴埋めのテキストを作成する教員側には若干負担が高い。次年度も継続する予定だが、穴埋めをする週と、コラムに対する感想を書かせる週と交互におこなうような実施の方法も検討する必要がある。

(2) 2年次英語科におけるN I E実践（実践者：石川 佳奈）

① 取り組み

- ア. 見学旅行の事前学習
- イ. 冬期休業課題

② 活動内容

- ア. 今年度の2年次は幸いにも10月に見学旅行に行くことができたので、訪問先にまつわる記事を読み要約する活動を行った。生徒たちは英語の授業の前にLHRや総合的な探求の時間内で訪問先について調べ学習を行っていたので、記事に関する知識がある生徒も各クラスに数名いた。すでに知っていることであっても英語となると単語や新聞特有の表現に苦戦することが予想されたので、グループ活動の形態をとりスモールタスクを課しながら進めていった。生徒たちはいつも以上に辞書を活用し、既習内容と記事の内容が繋がったときは声が出るほどだった。見学旅行にまつわるトピックだったこともあり、能動的に取り組む様子がうかがえた。



イ. 本校は卒業後の進路希望が多様であるため、必要となる学習内容が必ずしも一律ではない。3年次に向けて自分で課題を見つけること、タイムマネージメントを意識することを目的として、冬期休業課題は「英語力を高めるために自分で課題を設定し、必ずやりきる」という課題を課した。何をしたらよいか決めかねる生徒もいるので、課題の例の一つに英字新聞の活用を挙げた。既にやったことのある要約だけでなく、日本語記事との比較、記事を読んだ感想など、いくつかの方法を紹介した。実際に英字新聞を読んだ生徒は、単語の勉強になっただけでなく、新しい情報を英語で得ることができたことに手ごたえを感じたようだった。

③ 反省

ア. 新聞記事を活用したアクティビティの拡充を図る必要がある。

イ. 「英語で学ぶ」経験を積み重ねることで学習に対する意欲の向上が期待できるため、継続して計画すべきだった。

(3) 地理歴史・公民科におけるN I E実践（実践者：北村 智裕）

① 取り組み

ア. 新聞に関わるスピーチ

イ. 「いっしょに読もう！新聞コンクール」（日本新聞協会主催）応募

ウ. 「北海道新聞 新聞切り抜き作品コンテスト」応募

② 活動内容

ア. 新聞に関わるスピーチは、2年次の「現代社会」の授業において、全4クラスで実施している。スピーチの内容は、月末課題として提出したワークシートをもとに行った。テーマは、授業内容に合わせたものを設定し、生徒は各自で気になった新聞記事を選び、記事の内容を要約し、自分の感想や意見を発表する。発表は、授業のはじめの時間を使用し、発表後に授業者からのコメントや補足を行い、その後の授業の展開につなげていくという流れである。

なお、今年度の2年次は、昨年度「世界史A」の月末課題として月に一度、『新聞を読む、考える』ことを目的に新聞を用いたレポート作成を実施していた。課題のテーマは「自分の希望進路」、「自分の興味・関心」、「世界史」に関することから各自テーマを設定し、新聞をスクラップし、記事の内容、感想・意見等を記入し提出した。「世界史」以外のテーマを設定したのは、昨年度は入学後すぐに休校になったことや各種行事が制限を受けたため、「生徒を知ること」や「生徒の進路に対する意識付け」が不足していたためである。課題の提出、返却後は各自ファイルに綴じ、進路実現に向けた資料としている。

イ. 「いっしょに読もう！新聞コンクール」応募は、2年次の夏休みの課題とした。昨年度（1年次の時）も同様に夏休みの課題として応募した。昨年度はテーマを自由としたが、今年度はテーマを設定した。本校の見学旅行先が、コロナ禍のため当初予定していた関東・関西方面から長崎に変更となり、まずは長崎を知るという点から「長崎」をテーマにした。また、夏休み中に8月9日を迎えることから「長崎の平和」を主なテーマとした。

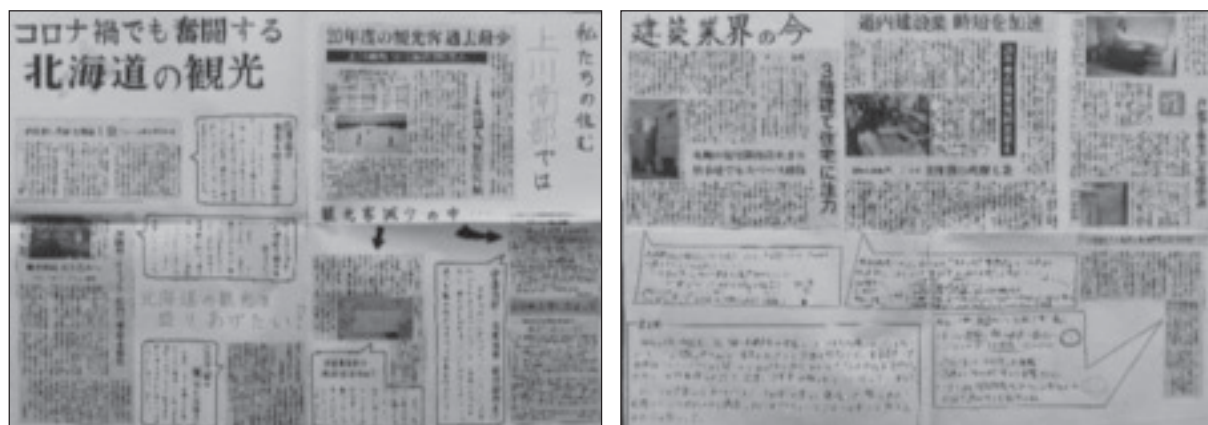
ウ。「北海道新聞 新聞切り抜き作品コンテスト」応募は、本校で3年目の取り組みである。1年目は3年次の「現代社会」で取り組んでいたが、教育課程変更（現代社会が2年次に）のため、昨年度から3年次の選択科目「北海道学」で実施している。なお、この授業は「就職・公務員、専門学校進学希望者」対象の選択科目である。授業は、前期に新聞記事を活用した「北海道に関わる時事問題」【写真①】を取り扱い、後期の授業（10時間程度）で各自テーマを設定し、新聞切り抜き作品を作成、応募した。【写真②】は、観光業への就職希望者、【写真③】は建築関係の専門学校進学希望者の作品である。



【写真①】「ＪＲ廃線跡地での地域振興」についての記事（2021年6月20日北海道新聞）。

この他に、今年度は「コロナ禍でのＪＲ収支悪化」、「ＪＲ根室線バス転換問題」、「道内の人口減少」、「上川管内の人口動態」、「世界遺産縄文遺跡群」、「富良野市新市庁舎」などの新聞記事を扱った。

【左下写真②、右下写真③】



3. おわりに

NIE実践1年目のテーマは「新聞を読む、活かす」と設定し、主に「見学旅行」と「それぞれの進路選択、進路実現」を意識した取り組みを行った。「見学旅行」に関しては、教科横断的な取り組みをすることもでき効果的な事前・事後学習を行うことができた。「それぞれの進路選択、進路実現」に向けては、現状ではインターネットを活用することの方が多くあるが、新聞を通して「仕事・学問探究」や「情報活用能力」の向上につながった一面もある。

次年度以降も、新聞活用を通して生徒一人一人の成長を促せるような教育活動を実践していきたい。

認め合う集団づくりにつながった新聞活用の一例

北海道岩見沢高等養護学校 教諭 曳田 和樹・檜山 健

(1) 本校の概要

本校は、昭和56年4月肢体不自由児を対象として、開校した高等部のみの単置校である。本校の大きな特徴として、普通高校に準じた教育課程があげられる。全道一円を校区とし、道内各地から多くの生徒が併設の寄宿舍（こぶし寮）に入寮し学習している。

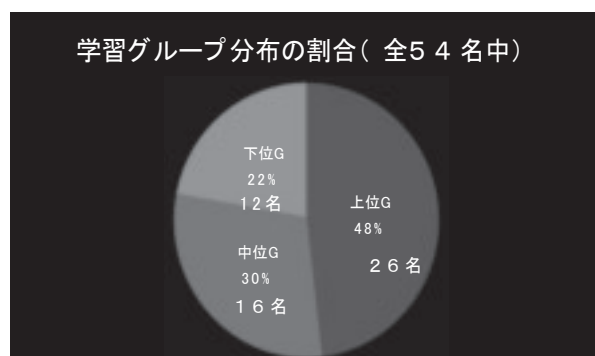


図1

普通高校に準じた教育課程を中心としながら、多様な生徒の実態に対応するため、習熟度に応じた学習グループを編成し授業展開を行なっている。（図1）

上位グループでは、手指の機能制限による筆記支援や見え方への配慮が必要であっても、中学校段階の学習事項が身につけている生徒を指している。当該学年から2～3学年さかのぼって学習する中

位グループ、さらに四則計算読み書きといった生活に身近で基礎的な内容を扱う下位グループと、その実態は幅広い。中位・下位グループのいずれにおいても、高等学校に準ずる教育課程で学ぶための前段階という位置付けである。本校においては、令和2年4月からNIE実践校に指定いただき、新聞を活用した学習を行ってきた。

(2) これまでの知見から

昨年度は、「新聞に親しむ環境づくり」をテーマに行なってきた。昨年までの実践に基づいて、肢体不自由児においては視覚認知の特性や発達の状況に応じ、配慮を行うことで新聞の活用が可能であるとの知見が得られた。図2に示したように記事内容の要約、振り仮名の付加、生徒の生活に身近な内容に厳選することで新聞記事を活用することが可能であった。しかし、手指の巧緻性等が十分に発達していないことなどから、新聞閲覧時のつまむ、めくるといった動作への課題が見られた。

今後、タブレット端末などの活用の可能性が示唆された。

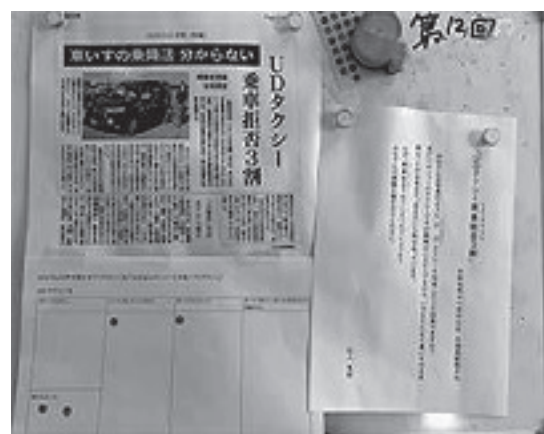


図2 校内の新聞掲示より（昨年度）

(3) 今年度の取り組みにあたって

今年度の実施の重点として、「多様な生徒の実態に応じた新聞活用」をテーマとし実践を行なっていくこととした。昨年度の実践においては、上位グループの生徒が中心になってしまったが、先に示した知見から、あらゆる実態の生徒にとって、活用の可能性がみえた。生徒の実態にあわせた取り組み、ならびに実態差や特定の教科によらない新聞活用実践が可能なのではないかと考えられた。

(4) 事例～出身地域に着目したホームルームでの実践

本校は、先述したように全道各地から、多くの生徒が併設の寄宿舎に入り生活をしている。言い換えれば、同じ学校に通いながら、全道各地の多様な地域の話題や習慣、風習について、触れることができる。

STEP I 教師から生徒に向けて

指導者は、毎日届く各社の新聞や自校で購読している新聞から、所属クラスの生徒に関係する地域の話題を切り抜き、教室に掲示。その記事について、朝のホームルームで紹介した。実際に自分の住んでいる地域であるからこそ、生徒自身が経験してきたことや、地元の同級生が掲載されたなど、刺激を受けたり、励みになる内容が多く、



15歳で地元を離れた生徒にとって、新聞が同世代や地域を身近に感じられる媒体となった。

また、新聞記事を読んだだけでは読み取れない情報が指導者によって説明されたり、出身生徒によって体験が語られたりとクラスの中で活発なやりとりがなされた。

図 3 実際に実践で使った新聞 (一例)

2021/08/27

北海道新聞 朝刊地方面 (苫小牧・日高)

『静内農高生産馬 今年は520万円 * 新ひだか・サマーセール * 「丈夫で強い馬に」』

※ 記事の紹介を受けて～生徒Aの声

この（静内農業）高校は、自分の家から近く、幼い頃から競走馬は身近な存在だった。競走馬を育てている学校は他の町にもたくさんあると思ったが、先生の記事の説明を聞いて、全国的にも珍しい高校であると知った。

クラスメイトとこの話を改めてすると、最近、流行りの競走馬育成のスマホゲームと重なり、「すごいなあ、こんな場所があったんだ。いいなあ。」「テレビでしか見たことなかった。」と言われてちょっと嬉しかった。

改めて自分の地元にある高校が、貴重な存在であると気づき、地元の高校の価値を再認識した。

特に地方出身の生徒は、都市への憧れが強く、自分の地域に自信を持つことができなかったり、自分の地域にどんな資源があるのかを知らない生徒も多く見られた。全道各地から入学してくる生徒がいる本校ならではの特徴である。この活動を通して、本生徒をはじめ、多くの生徒がクラスメイトからの質問に笑顔で答えている姿が見られた。日々のホームルームという短い時間ではあったが、出身生徒にとっては、郷土への誇りと自信、自尊感情の高まり、クラスメイトにとっては、生徒間の相互理解や視野の広がり、地理的事象、文化、習慣の理解など貴重な体験を得ることができた。

STEP II 生徒自身による“新聞を読む”習慣の定着へ

この実践を始めて、しばらくしたころ、生徒から「北海道全市町村（179）の記事を探してみたい！」との声があがった。その日から、本校図書館に置いている北海道新聞およびその地方面を中心に、記事を探しにくる生徒の姿が見られた。



図 4 新聞紹介を実施した地域を示した教室掲示
(着色部は紹介済み)

朝のホームルームの時間を使い、4月から12月末時点で、延べ160市町村を紹介した。

なかには小さな市町村のため、なかなか掲載されていない地域もあったが、生徒自身が自ら、自宅に帰省した際に、地域の新聞を持ってきたり、パソコンで北海道新聞電子版を用いて、生徒の居住地以外の地方面を探するなど、生徒の主体的な活動へと発展していった。

また、この活動は新聞そのものを読むことが困難な生徒にとって、ク



図 5 活動の様子から

(5) おわりに～本校でのN I E実践2年間の総括として

今年度で、令和2年度から2年間のN I E実践指定校を終える。これまでの実践の総括を以下に記す。

本校においては、手指や脚部の身体機能の障がいにとどまらず、視機能や認知の偏りなど、情報を“読む”ということに対して、多くの困難性をもった生徒が在籍する現状にある。しかし、指導者の情報の見せ方や切り取り方の工夫によってあらゆる実態の生徒に活用が可能であった。生徒個々の実態に配慮しながら、内容の厳選やルビをつけるなどを工夫することで主体性を喚起することができた。また新聞を通じ様々な障がいのある生徒が共通の話題を語らえるというインクルーシブな環境を創ることにつながった。2年間の実践を通じ新聞活用が、単に情報を得る手段や知識幅を広げることにとどまらず、自尊感情の高まりや生徒相互の尊重といった認めあえる学級集団への変化につながった。結果として本年度のような主体的な取り組みを喚起できたものと考えられる。

本校のような寄宿舍併設型の学校においては、家庭の意向や経済状況によらず、新聞活用を習慣化しやすいという利点がある。一方、本校生徒が自発的に新聞を手にとったときの読みにくさ（視機能や内容の理解）については検証、手立てが不十分であった。生徒が卒業後も引き続き新聞を読む習慣を継続させていくために、一考の余地を残した。この2年間の実践を契機とし、多様性がますます求められる社会において新聞が、生徒の生活にとって当たり前のツールとなるよう引き続き取り組みをすすめていく。

ラスメイトや指導者の話を聞いて会話に参加したり、新聞に掲載されている図版や写真などを見て説明したりするなど、読む以外にも、聞いて理解する、やりとりの中で話すといった語彙の向上にも資したと考えられる。

また、朝のホームルームという極短時間の活動ではあったものの、逆に集中が続かないなど行動上の課題を有する生徒にとっては参加しやすい活動になったのではないかと考えている。日々の見通しの持ちやすさや、生徒たちの中から「179市町村制覇したい」という明確な目標が生まれたこと、寄宿舍生活の中で家庭の経済状況によらず、新聞を読める環境にあったことも、活動の習慣化に好材料であった。

「新聞を活用した学びの実践」

～朝のSHRでの活用と高大連携探究活動における取り組み～

北海道科学大学高等学校 教頭 山下 卓

1. はじめに

本校は系列に北海道科学大学を有する私立高校である。2023年4月には大学のある手稲前田キャンパスへ移転し、同じキャンパスの強みを生かし、日常的に大学教育に出会うことができる新しい「高大一体教育」の実現を目指している。

今年度はNIE実践校2年目となり、昨年度に引き続き2年生のSHRにおける新聞活用を実践し、8月からは修学旅行に向けての平和学習を意識し、「平和・戦争」の記事に集中した活用を行った。また、2年生の高大連携探究活動において「新聞記事から世の中の問題解決へ」と題し、グループによる探究活動を実践した。今回の報告では2年生（特進コース）の朝のSHR実践と高大連携探究活動での実践を紹介する。

2. 2021年度 2年生（特進コース）における朝のSHR実践 ※生徒は全員 iPad 保有

（1）内 容

朝のSHR前の読書の時間（8:30～8:40）に新聞記事を生徒に配信する。4月～7月までは、特進クラス担任が選んだ記事を毎日生徒に配信し、修学旅行での平和学習を意識した8月以降は「平和・戦争」に関する記事を配信した。本校で行っている朝学習とのバランスも考慮し、12月以降も週に1回の新聞記事配信を継続している。

※感染症拡大に伴い修学旅行が延期となり、予定訪問先の沖縄を変更したため、シリア出身の方による「平和について考える」講演会を9月に実施した。

（2）目 的

読む力の向上と新聞を通し世の中の動きについて知り、様々な立場からの物の見方について考える機会とする。

（3）生徒の様子・効果など

この取り組みを始めて2年目ということもあり、「新聞を読む」ことに多くの生徒が慣れ、読む速度が上がったことはもちろん、記事に関する反応が「知らないことを知ることができた」から一歩踏み込み、「この記事の背景を知りたい」というレベルに上がってきている。その他の良い効果としては、新聞記事をより身近に感じられ、この朝の機会に限らず、自宅等で興味を持って新聞を読む生徒が出てきたことである。今後も、情報を入手する媒体として、真偽不明なネットからの情報だけに頼るのではなく、新聞を含めた様々な媒体から情報を入手し、正しく知り、正しい判断につなげていくことが重要だと考える。

朝新聞一例) 左側 読売新聞 2021 年 12 月 10 日 右側 北海道新聞 2021 年 12 月 17 日



平和学習関連一例) 左側 毎日新聞 2021 年 9 月 28 日 右側 毎日新聞 2021 年 9 月 25 日



3. 2 年生の高大連携探究活動における実践 ～「新聞記事から世の中の問題解決へ」

2 年生は系列大学である北海道科学大学と協力した取り組みとして、全員対象の探究活動（基礎）を前期に行い、北海道科学大学への進学希望者を対象にした探究活動（発展）を後期に行っている。今年度は 7 月に大学教職員、大学生、高校教員、高校生が協力して行う探究活動を企画した。残念ながら感染症対策のため大学生との交流が制限され、可能な範囲で大学教職員からアドバイスをもらうという形式への変更を余儀なくされた。事前指導を 6 月 24 日から実施し、動画等も活用して SDG s に関する説明を行い、グループワークの際に利用する Google スライドの共同編集方法に関する練習と実践を行った。7 月 13 日に 7 時間の時間を設定し、1 時間を大学生によるプレゼンテーションに関するアドバイス、4 時間を新聞を活用した探究活動とプレゼン資料の作成、2 時間を発表・振り返りの時間に振り分けた。

【目 標】

SDGs の視点で新聞記事から社会問題を取り上げ、解決につなげる。

【7/13 の実施内容】

1 時間目 ガイダンス

- (1) 探究活動の流れを説明
- (2) 大学生によるプレゼンテーションに関するアドバイス

2～5 時間目 探究活動

- (1) 各クラスに各社新聞（道新・毎日・産経・日経）を配布する。
- (2) 新聞記事から発見した社会問題を SDGs の視点と絡めて問題解決を目指す。
- (3) 個人の視点をグループで共有し、社会問題解決のアイデアを出し合う。

※iPad を用いて Google スライドの共同編集機能を活用し、発表の準備を行う



6・7 時間目 プレゼンテーション（発表は各グループ 5 分）

- (1) 題材として活用した新聞記事の写真と要約文は必ず添付する。
- (2) 事前配布の発表評価表を見ながら発表準備を行う。
- (3) 自グループの評価と他グループの評価を行い、他のグループのプレゼンテーションに対して質問を行う。



活動参観者（大学教職員等）からの意見より

【良かった点】 ※複数意見のみ抜粋

- ・短時間での準備であったがまとめ方、内容は想像以上であった。
- ・発想、着眼点が高校生らしく、斬新な意見は非常に興味深かった。
- ・探究活動中、相手の意見を聴く姿勢がどのクラスも素晴らしかった。

【改善を要する点】 ※複数意見のみ抜粋

- ・時間配分に課題のあるグループ（長すぎ・短すぎ）が見受けられた。
- ・相手に伝える、魅せるための資料の工夫が必要である。
- ・声の大きさ、目線等は慣れが必要であるが、改善の余地がある。

探究活動実施後の生徒の声より

【自由記述】 ※複数意見のみ抜粋

- ・スマホから情報を手に入れるが多かったが、新聞は写真やタイトル（見出し）がわかりやすく、これからも読むことが必要だと思った。
- ・想像以上に話し合いが盛り上がり、個人ではなく、グループで考えることでたくさんのアイデアが出ることを実感できた。
- ・7時間は長いと思っていたが、あっという間の時間だった。プレゼンテーションの練習がほとんどできなかったのも、もっと時間が欲しかった。

生徒が選んだ記事とそのパワーポイントの一例)



4 終わりに

今年度もコロナ禍ということもあり、当初の予定から大幅な変更が生じた1年であった。生徒間の距離を取らざるを得ない状況のなかで、グループでの探究活動には困難を伴ったが、多様な考えを認め合い、問いに対する解決策を探究する活動には大きな成果があった。また、一人ではできない学びの集大成であるプレゼンテーションの瞬間には大きな感動があった。真偽不明な様々な情報が溢れる現代において、社会人として巣立つ高校生においては、正しい情報から正しい行動につなげる入り口として「新聞」は欠かせないものであることを実感した。今後も生徒の成長を促す大切なツールとして、新聞を活用した教育活動を模索していきたい。

2021年度 NIE 実践報告

新聞を身近に感じる環境作り 2

北海道野幌高等学校 教諭 鈴木 幸恵（国語科）

教諭 赤松 朋美（3 学年主任）

教諭 関原 文明（公民科）

教諭 伊藤 慎也（2 学年主任）

1. はじめに

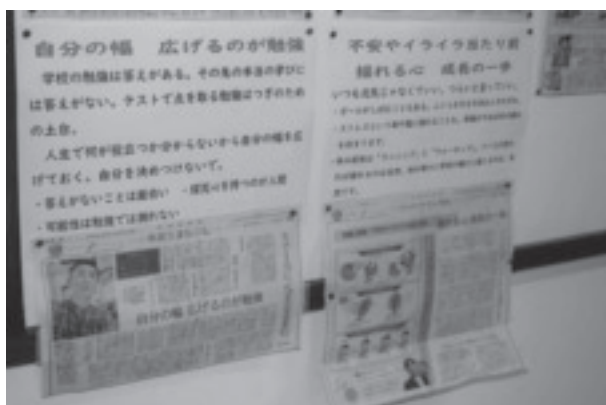
本校は、全日制普通科でフィールド制の学校である。2 年生から 4 つのフィールド（「ライフサポート」、「ナチュラルサイエンス」、「ヒューマンサイエンス」、「コミュニケーションメディア」）に分かれ、生徒はそれぞれの進路・興味関心に応じた分野で学ぶ。ここ数年は生徒減に歯止めがかからず、令和 4 年度より北海道教育委員会から「アンビシャススクール」に指定され、基礎的・基本的な知識・技能の確実な定着や社会生活や職業生活に必要な能力や態度の育成に重点を置いた学校としてスタートする。今年はその移行期に当たる。現在の生徒数は 305 名で、学習への苦手意識による自信のなさ、コミュニケーションに課題がある生徒が多い。少人数であることを生かしたきめ細やかな教育活動で、力を伸ばし、生き生きと活動する生徒が多く見られる。



2. 実践内容

昨年度に引き続き、今年度は 2 学年も加えて実践を行った。SNS 全盛の今、新聞購読をしている家庭も少なく、生徒が新聞を手にする機会は減っている。ネットニュースの様な見出しを眺めて満足するのではなく、世の中の動きを一目で確認できる新聞を活用してほしいと考え、以下のような実践を行った。

①新聞で世の中を知る（2・3学年）



3 学年フロア。生徒へのメッセージ。



2 学年フロア。各紙一面がずらりと並ぶ。

3 学年フロアの掲示板には、時期に応じて、世の中の動きを知り、生徒の心にも響くような記事を学年主任が選んで貼り出した。東京オリンピック代表を勝ち取るために励む若い選手達の記事や、コロナ下において人々に尽くすエッセンシャルワーカーの記事が、生徒の励みにもなったようだ。

また、学ぶことの意味、心の状態など生徒が抱える疑問や不安に応える言葉を、学年主任からのメッセージとして新聞記事とともに掲載している。

2 学年のフロアにはずらりと各紙の一面が貼り出されている。複数の新聞を比較することができ、各紙がそれぞれどのような記事を一面に持ってきているか、見出しはどのように違うのかがわかる。

②「私の気になる新聞記事」（公民科の実践）

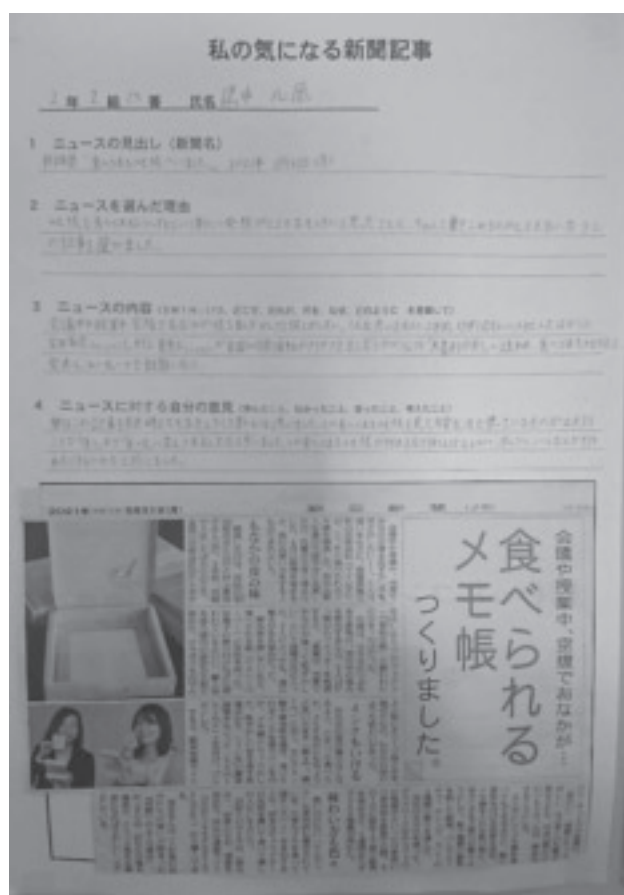
3 年生の「政治・経済（4 クラス）」と、2 年生の選択科目「現代社会」の生徒を対象に、自分の気になる新聞記事を切り抜き、その感想をまとめる「私の気になる新聞記事」の実践を行った。

ねらいとしては、時事問題や社会問題への興味関心を高めるとともに、感想をまとめるという言語化の過程を通じて、表現する力の育成を目指した。

方法は、①個人で気になる新聞記事を切り抜き、台紙に貼り付ける ②記事の要約をして、選んだ理由や感想を記述し、周囲と交流する ③その台紙を廊下に貼り紹介する という手順である。

選択する記事は、子どもたちの関心や個性が活かされたものとなり、回数を重ねることで、その内容やレベルの向上が図られた。また、社会問題への興味・関心を広げる基盤づくりにもつながった。廊下へ掲示したものを立ち止まって読むなど、他クラスや他学年の子どもたちの興味・関心にもつながった。

なお、実施時期や回数、記事の選択方法や掲示場所など改善を要する事項も浮かびあがった。これらの実践を基に、社会問題と自分とをつなげる新聞の活用を、授業の中で積極的に広げていきたい。



上：3年生の廊下に掲示した新聞の切り抜き

左：2年生「現代社会」での取組

③授業のまとめとして新聞を利用（国語科）

3年生の現代文の授業で2クラスの生徒を対象に、新聞記事を利用した単元のまとめを実践してみた。「人工の自然」という評論を読んだ後、実際に私たちの生活はどれだけ科学技術に支えられた生活であるのかを知り、その仕組みを説明できるかという課題である。

①身の回りにある「科学技術を利用した生活用品」について書かれた記事を選ぶ ②可能になったことはどのようなことかをまとめる ③どういう原理で可能になったのかをまとめる ④感想を述べる ⑤回し読みをしてコメントをもらう 以上のような手順で行った。生徒はそれぞれ興味のある視点で記事を選び、苦勞しながらまとめていた。教科書の内容を実生活に関わる記事で振り返ることで、教材をより身近に感じ、理解を深めることができた。



オンライン診療について。



コネクテッドカーをサイバー攻撃から守る。

3. おわりに

NIE 実践指定校2年目の今年は、より多くの生徒が新聞に触れ学べるように、環境作りと授業実践を行った。来年度からは一人一台端末が始まり、タブレットでの新聞活用に移行していこう。今年は紙面での活用が中心だったが、次年度以降、新たな活用法を研究していきたい。

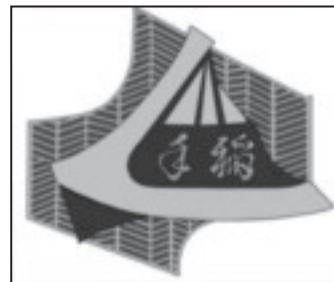
2021年度 NIE実践報告

「日常的・継続的」な新聞活用の取組の実践

北海道札幌手稲高等学校 教諭 渡邊昭博（嶋崎俊樹、水谷省一）

1 はじめに

本校は創立48年目を迎える、1・2年次7学級、3年次8学級（計22学級）、全校生徒867名の全日制普通科単位制高校である。国公立大学進学を希望する生徒が数多く入学し、また部活動加入率も高く、生徒たちは「継続は力なり」の校訓のもと、「文武両道」の学校生活を送っている。1年次で生徒全員によるインターンシップを実施し、2年次では大学から講師を招いて連続4回の「学び探究ゼミ」を実施するなど、キャリア教育の実践にも力を入れている。



2 実践の経緯

本校は7年前からNIEの実践指定を受け、当初は「情報」担当の教諭が単独で新聞を活用した授業実践を行っていた。実践指定2年目からは公民科も加わり、公民科では6年目の取組となる。その後、公民科単独の実践となり、現在に至る。今回の実践報告は、公民科での取組を中心に紹介させていただく。

新聞を活用するねらいは、(1) 生徒に新聞に触れる機会を提供して社会の出来事への関心を持ってもらい、漠然とでも世の中のイメージを持たせること。(2) 新聞記事を題材とした言語活動を通して、資料活用の技能や思考力・判断力・表現力を身につけさせることである。特に(1)は、これまでの指導経験の中で、広く世の中についての知識のある生徒のほうが、授業（教科を問わず）の理解がスムーズになる、という感覚を得たことが理由である。

さらに、これらのねらいを実現する上で最も心がけていることは、今回の実践報告の表題にもなっている「日常的・継続的」な新聞活用という視点である。これを可能とするために、日ごろからできるだけ時間や労力をかけずに、無理せず実施できる形式で実践を行っている。従って、これから報告する実践の内容は昨年度までとほぼ同じ内容が中心であり、取組としては不十分な点もあろうかと思うが、ご容赦いただきたい。

3 実践の概要

(1) 「3分間スピーチ」 本校における日常的な新聞活用の最大の取組が「3分間スピーチ」である。これは1年次の現代社会の授業において、全クラスで実施している。この取組は今年で7年目になる。生徒は各自、自分で気になった新聞記事を一つ選び、クラスメートの前で発表する。あらかじめ生徒全員にワークシートを配布しておき、各項目に記入する形でまとめさせ、ワークシートのウラ面には選んだ新聞記事を切り抜いて貼らせている。取り上げる記事は政治、経済、社会問題から選ぶように伝え、芸能やスポーツの記事は避けるように指導している。毎回の授業の最初に、1回の授業につき2名ずつ、前に出て発表する。発表が終わるごとに、聞

現代社会3分間スピーチ ワークシート No.2

1年 組 番 (氏名)

① 新聞記事のテーマ(見出し)を抜き出し、要約、感想、自分の意見を記入しよう

11月 12日(金) 12月 1日(金) 12月 15日(金)

政府「第6次」対策決定

② 記事の要約(記事の要約を短くして、要約すること)

政府は12日、新型コロナウイルス感染症対策本部を首相官邸で開き、流行「第6波」対策の「全体像」を決定した。今夏のピークと比べて3割増の入院患者を受け入れられる病床の体制を整備し、自宅で使える飲み薬を計約140万人分確保する予定で、感染拡大局面に対策通り実現できるかどうかは焦点となる。

③ 読んで理解できたことは何か

ワクチンの3回目接種と飲み薬の実用化を進めることで、日常生活での回復を目指すということ、その取り組みの一環として中和抗体量の確保や、ワクチンの接種証明書のデジタル化などを行うとしていること。

④ 読んでわからない言葉を抜き出し、辞書やネットで調べて書き出す

中和抗体量、いわゆる抗体がウイルスを攻撃すること、新型コロナウイルス感染症の軽症・中等症患者向けの治療であり、重症化リスクを低減する効果があるもの。

⑤ 自分の意見、感想

病床を増やすのは良いことだと思うけれど、単純に増やすだけでは医療従事者の負担が大きくなると思うので、医療従事者の負担を減らすこと、飲み薬の実用化などによって、日常生活での回復が可能になれば重症化する人も減ると思うので、僕に病気が運ばれてしまった時などにサポートはあるのかと疑問に思うので、早く具体的な対策が公表されてほしい

＜課題の重点＞

① 数字・数字にないか ② それぞれの項目について、内容が分かるか ③ 自分で考え、それを整理を立てて整理しているか

生徒が書いた「3分間スピーチ」ワークシート
 生は①～⑤の順番で、読み上げる形で発表する。

（2）「新聞コンクールへの応募」

今年度の新たな取り組みは、日本新聞協会主催の「第12回いっしょに読もう！新聞コンクール」への応募である。「3分間スピーチ」の延長線上の取り組みとして、1年次の生徒全員に現代社会の夏休みの宿題として取り組ませた。募集案内に添付されていた応募用紙の形式が、本校で取り組んでいる「3分間スピーチ」と大きく変わらなかったため、生徒も取り組みやすいと考えた。「3分間スピーチ」に無い要素としては、家族や友達に記事の意見を聞いて記入する欄があることである。夏休みに生徒が新聞に触れる機会を設け、新聞記事について家族や友人と対話する場も生まれる良い機会であると考え、実施することを決めた。

応募の結果、2名の生徒が奨励賞に選ばれ、本校も学校奨励賞をいただくことができた。また、さらに1名が北海道地区奨励賞を受け、3名が北海道新聞社の取材を受けて、新聞に掲載されるという貴重な経験をすることができた。

いている生徒は拍手をし、授業者が簡単な解説やコメントを加える。2単位の授業なので、年間に必ず全員が2回発表するまで続けている。毎時間、生徒の発表と授業者のコメントを合わせて10分程度を使い、その後、教科書の内容に入っていく。

左は、生徒が実際に発表したワークシートである。①の欄には生徒が選んだ「新聞記事のテーマ(見出し)」を記入する。②の欄に選んだ「記事の要約」を記入する。リードがある記事は、リードをそのまま記入してしまう生徒もいるため、記事全体を読んで要約するよう指導している。③の欄には、記事を「読んで理解できたこと」を記入する。④の欄は「読んでわからない言葉」を書き出し、調べた結果を書き込む。記事のなかに分からない言葉がなくても、発表する相手に伝わりやすいよう、何か1つは言葉を選び、調べて説明するようにしている。そして最後に⑤の欄で「自分の意見、感想」を記入する。

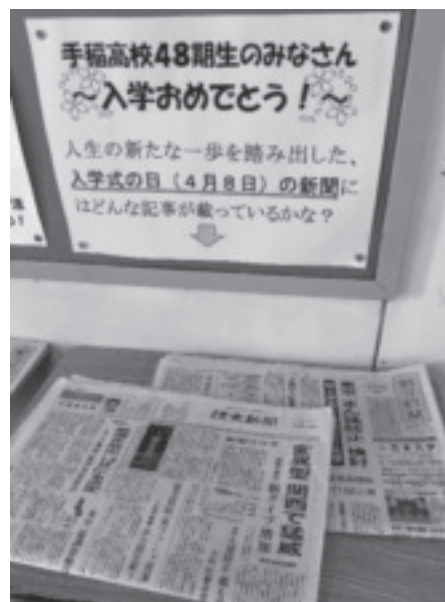


北海道新聞 2022/1/25

(3)「NIEコーナー」 新聞そのものに触れる機会を日常的に提供するため、1年次の階の水飲み場に「NIEコーナー」と題して配達された新聞の閲覧スペースを設けている。毎日、複数紙の記事を比較できるように、必ず月2紙購読し、掲示にも「〇〇新聞と□□新聞を比較しよう」という言葉を入れて意識させた。

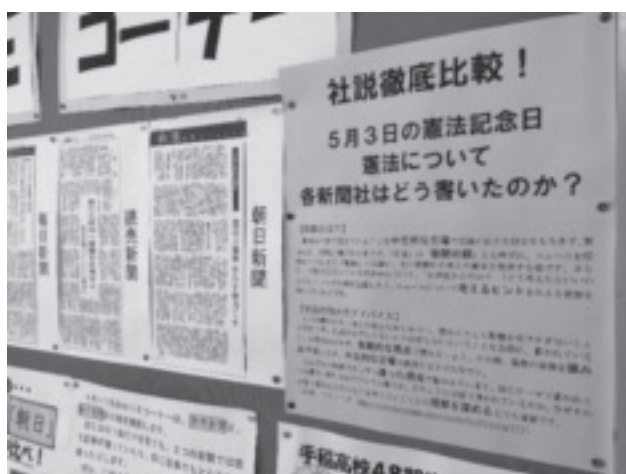
最近自宅新聞を取っていない家庭が増えている。そういった生徒については、「3分間スピーチ」でNIEコーナーの新聞をコピーして活用させている。

今年は入学式当日の新聞を、特別にスペースを設けて長期間展示している。高校生活を始めた新たな門出の日の新聞を置くことで、少しでも新聞に興味を持ち、手に取って開いてもらいたいという願からである。



入学式当日の朝刊の特別展示

また、憲法記念日の社説を比較する特別展示も実施した。新聞販売店の協力を得て、「朝日」「読売」「毎日」「日経」「産経」「道新」の6社の社説を掲示することができ、各社の特徴を知る良い機会となった。



憲法記念日の社説を比較した掲示

(4)「プリント二週間の出来事」

全年次の公民科(現代社会・政治経済・倫理)の授業において、「プリント二週間の出来事」を作成し配布している。これは、過去二週間の出来事をふり返るとともに、ニュー

スのキーワードに注目させ、授業で学習する内容に結びつけることを意図している。ニュースから「今日のことば」を1～3個取り上げて解説するとともに、ウラ面には一つのテーマを取り上げてより詳しい解説を掲載している。今年度は地図も載せ、ニュースの場所を確認させた。

二週間のニュースのまとめには、当初、毎日新聞の「LASTWEEK:先週の出来事」を、年度途中から朝日新聞の「NEWS 2WEEKS」を活用させていただいている。

4 その他の新聞の活用

各年次の国語科が朝学習の一環として行っている取組として、社説やコラムを一つずつ、A4用紙に印刷したプリントを作成し、定期的に生徒に配布している。各担任が学級日誌に要約欄を設け、その日の日直に配布された社説やコラムを100～120字程度で要約させたり、国語科の定期考査で問題として活用したりするなど、年次ごとに社会テーマに目を向けさせ、読解力や要約力を育成する言語活動に取り組んでいる。

5 成果と課題

(1) 日常的・継続的な活動 本校公民科でのNIEの実践は、年間を通して無理なく取り組み

る内容のものを意識している。「3分間スピーチ」は、時間をかけてじっくりと新聞記事を活用した活動をしているわけではなく、目に見える形の成果は得にくいかもしれないが、生徒たちは年間を通して約80回の発表を聞くことになる。1年を通して考えれば新聞記事に触れる貴重な時間であり、また、記事に対してクラスメートがもつ意見や感想を聞くことも多様な視点に触れるよい機会になっていると考える。

(2) さまざまな能力の育成 「3分間スピーチ」では記事を読んで要約し、理解したことをまとめ、さらにわからない言葉を調べて説明するという言語活動によって、読解力や思考力・判断力・表現力の育を期待している。また人前で発表し拍手をもらうという体験の積み重ねが、自己肯定感や達成感を味わう機会にもなっていると考える。小さな経験の積み重ねであるが、この繰り返しが、資料や情報に基づいて「ものごとを考える」というプロセスの訓練となり、さらに本校の総合的な探究の時間におけるキャリア探究活動のレポート作成にも生かされている。

(3) 課題

①時間の制限 「3分間スピーチ」は現代社会の授業の中で導入として行っているため、多くの時間を割くことができない。発表者と聞く側との質疑応答など、生徒間のやり取りがあると内容が深まり面白いと思うが、授業者がコメントをするだけに留まっているのが現状である。

②新聞を読ませる工夫 「3分間スピーチ」や「NIEコーナー」など、新聞に触れる機会を設定しているが、際に「NIEコーナー」で新聞を閲覧する生徒は限られているのが現状である。新聞を読むことが様々なメリットにつながることを伝えていきたい。

6 おわりに

本校公民科におけるNIEの実践は6年目を迎え、日常的・継続的な取組も定式化した。が、来年度の1年次から、新学習指導要領に基づく教育課程が始まる。現代社会がなくなり、「公共」が新科目として始まるが、本校では公共は2年次からの実施なので、今まで1年次で行ってきた実践をどのような形で継続するか、検討しなければならない。

新聞活用のねらいや目的を十分達成するため、無理のない範囲で改善・充実を図りながら今後も持続可能で生徒にも有効な活用方法を探っていきたい。

本校での取組が、少しでも他校の先生方の実践に役立てば幸いである。

ア・バウト二週間の出来事

【3月21日(日)～4月3日(土)】

(1) 公民科「L.A.T.W.E.E.K.」の授業内容「新聞活用」の授業内容「2023年度版」の授業内容「2023年度版」

【3月21日(日)】	【3月22日(月)】
【授業内容】 ① 公民科「L.A.T.W.E.E.K.」の授業内容「新聞活用」の授業内容「2023年度版」 ② 公民科「L.A.T.W.E.E.K.」の授業内容「新聞活用」の授業内容「2023年度版」 ③ 公民科「L.A.T.W.E.E.K.」の授業内容「新聞活用」の授業内容「2023年度版」 ④ 公民科「L.A.T.W.E.E.K.」の授業内容「新聞活用」の授業内容「2023年度版」 ⑤ 公民科「L.A.T.W.E.E.K.」の授業内容「新聞活用」の授業内容「2023年度版」 ⑥ 公民科「L.A.T.W.E.E.K.」の授業内容「新聞活用」の授業内容「2023年度版」 ⑦ 公民科「L.A.T.W.E.E.K.」の授業内容「新聞活用」の授業内容「2023年度版」 ⑧ 公民科「L.A.T.W.E.E.K.」の授業内容「新聞活用」の授業内容「2023年度版」 ⑨ 公民科「L.A.T.W.E.E.K.」の授業内容「新聞活用」の授業内容「2023年度版」 ⑩ 公民科「L.A.T.W.E.E.K.」の授業内容「新聞活用」の授業内容「2023年度版」	【授業内容】 ① 公民科「L.A.T.W.E.E.K.」の授業内容「新聞活用」の授業内容「2023年度版」 ② 公民科「L.A.T.W.E.E.K.」の授業内容「新聞活用」の授業内容「2023年度版」 ③ 公民科「L.A.T.W.E.E.K.」の授業内容「新聞活用」の授業内容「2023年度版」 ④ 公民科「L.A.T.W.E.E.K.」の授業内容「新聞活用」の授業内容「2023年度版」 ⑤ 公民科「L.A.T.W.E.E.K.」の授業内容「新聞活用」の授業内容「2023年度版」 ⑥ 公民科「L.A.T.W.E.E.K.」の授業内容「新聞活用」の授業内容「2023年度版」 ⑦ 公民科「L.A.T.W.E.E.K.」の授業内容「新聞活用」の授業内容「2023年度版」 ⑧ 公民科「L.A.T.W.E.E.K.」の授業内容「新聞活用」の授業内容「2023年度版」 ⑨ 公民科「L.A.T.W.E.E.K.」の授業内容「新聞活用」の授業内容「2023年度版」 ⑩ 公民科「L.A.T.W.E.E.K.」の授業内容「新聞活用」の授業内容「2023年度版」

22年次から使う高校教科書「主体的・対話的で深い学び」重視

1. 主体的・対話的で深い学び

2. 主体的・対話的で深い学び

3. 主体的・対話的で深い学び

4. 主体的・対話的で深い学び

5. 主体的・対話的で深い学び

6. 主体的・対話的で深い学び

7. 主体的・対話的で深い学び

8. 主体的・対話的で深い学び

9. 主体的・対話的で深い学び

10. 主体的・対話的で深い学び

【ニュー・英語】

① ニュース

【ニュー・英語】

② ニュース

2021年度 NIE実践報告

新聞記事を利用した授業づくり

星槎国際高等学校帯広学習センター 教諭 高橋 知行

1 はじめに

本校は広域通信制、単位制の普通科高等学校であり、帯広学習センターは全国27か所の学習拠点の1つとして2010年に開設、2016年に開設当初の帯広経済センタービルから現在地に移転した。

今年度、1年生必修授業の理科（科学と人間生活）のなかで「新聞記事を利用した学習」に取り組んだ。



2 学習のテーマ

必修授業・1年生理科「科学と人間生活」宇宙や地球の科学（身近な自然景観と自然災害）

3 学習のねらい

山脈の成り立ちについて火山は噴火などで報道されることが多いのでマグマの噴出や噴出物の堆積などを見聞する機会がある。しかし、褶曲山脈は過去にプレートの衝突で隆起した後、短期間では目に見える変化がないのであまり関心を持たれない。十勝は大雪山系から阿寒に至る火山地帯と氷河の痕跡が残る日高山脈という褶曲山脈の両方を身近に見ることができる。それらの山々と河川との結びつきで大きな平野ができ、現在の地域基盤に結びついていること、反面、大きな山脈や火山の存在、太平洋に面している地形などは、地震、噴火、河川の氾濫、津波、大雪などの自然災害とも深く結びついている。

これら地球規模のことが身近な事象と密接に関連していることを日高山脈襟裳国定公園の国立公園化という現在の話題から学ぶことを試みる。

今回、地域紙（十勝毎日新聞）で長期にわたって掲載された国立公園化に向けた一連の記事から身近な存在である日高山脈の形成過程から自然景観の成り立ちを学び、国立公園やジオパークとして評価されている点、また国立公園になることで地域社会にはどのような影響があるかを考えることを目的とした。なお、最後に地域の自然と災害・防災について調べ、まとめとした。

4 時間

2 時限続き授業 1 回、1 時限授業 1 回、計 3 時限で行った。

- 1 時限目 日本列島の成り立ち、プレートテクトニクス
- 2 時限目 日高山脈の成り立ち、特徴、稀少性
- 3 時限目 自然災害と防災

時限	テーマ	概要
1	①日本列島の成り立ち	・日本列島周辺にはプレートが集中している ・プレートテクトニクス ・プレート境界で起きる地震と内陸活断層で起きる地震 兵庫県南部地震（阪神・淡路大地震） 東北地方太平洋沖地震（東日本大震災）
2	②日高山脈	・日高山脈の特徴 火山がない、氷河の痕跡、東側・西側の地形 ・日高山脈の成り立ち プレートの衝突、褶曲 ・十勝平野は沈んだ 日高山脈、白糠丘陵の隆起 十勝平野、釧路湿原の沈下
	③アポイ岳ジオパーク	・地下深いところでできた岩石が露出している（露頭） 地球の深部に関する情報が得られる
3	④自然災害	・十勝はさまざまな自然災害が起きている 十勝沖地震、十勝岳噴火、十勝川水系河川の氾濫 大雪、太平洋沿岸地域の津波
	⑤危険回避	・ハザードマップ どんな情報が得られるか

5 記事の利用

地域新聞（十勝毎日新聞）が年間を通じて掲載した日高山脈に関する記事から身近な景観の成り立ち、地域の歴史、自然災害などを一連のものとして取り組んだ。授業では①十勝側の視点・歴史・課題、②日高側の様子、③専門家（環境省自然保護官、大学名誉教授）インタビューの記事を取り上げた。

授業では記事のほか、教科書、ジオアート（鳥観図）を用いた。

教科書 改訂科学と人間生活（東京書籍）

ジオアート アポイ岳・日高山脈、とかち鹿追（北海道地図）



十勝毎日新聞 2021/1/3



2021/1/4



2021/1/5



2021/6/6



2021/4/12



2021/4/20

6 生徒たちの取り組み

- (1) 記事を読み、ふだん目にする日高山脈が国立公園として、またアポイ岳周辺が世界ジオパークとして評価されている理由を考えた。また、多くの学校の校歌に日高山脈がうたわれているように地域に親しまれ、開拓の歴史とも関わっていることを学んだ。
- (2) 国立公園になるとどのような影響があるか、話し合った。

	メリット	デメリット
自然	・ 自然保護がすすむ	・ 環境破壊になる ・ 生態系が崩れる

	メリット	デメリット
経済	・観光客が増える ・地域活性化になる ・周辺地域に金がまわる	・財産の制約（土地利用や建築の制限） ・登山道の整備などに金がかかる
社会	・知名度があがる ・世界に知られる	・観光客の残した食物につられてヒグマが人を襲うようになる ・ゴミが増える ・車の排気ガスが増える ・土砂崩れなどの災害が増える

(3) インターネットを利用して十勝における地震、噴火、津波などの記録を調べ、被害とその後の対策などを整理した。

7 生徒たちの感想

今年度、日高山脈襟裳国定公園の国立公園化という動きをきっかけに、地域の自然景観とプレートテクトニクスの関連を学び、それが自然災害とどう結びついているか、被害を減らすにはどうすればよいか、を学習した。生徒の主な感想は次のとおりであった。

- ①プレートの動きが日高山脈と関係しているのがわかった。
- ②氷河の痕跡があるのは知らなかった。(ナキウサギは?・・・氷河期)
- ③日高山脈からの川は急流、大雨で牧草地が削られた。
- ④十勝もけっこう災害が起きていると思った。
- ⑤街にある表示を見るようにする。
- ⑥ハザードマップを見ておく。

8 留意点

1年生理科「身近な自然景観と自然災害」で新聞記事を利用した。授業は後期になるので長期にわたる多くの記事を整理して3時限のなかでどう利用するか検討が必要だった。

9 反省および今後の課題

今年度、必修科目への新聞記事の利用を考え、日高山脈襟裳国定公園の国立公園化が具体的になって環境省の管理事務所も開設された機会をとらえて身近なところから入れたのは良かったと思う。今回は国立公園化に向けた連続記事として新聞社が取り組んでいたもので学年後半の授業に向けて記事の収集、整理ができたが、今後、長期間にわたる記事を利用するには数か月先までの記事の見通しをたてるのが難しいと感じた。

課題解決型学習 (PBL) におけるNIE実践

札幌新陽高等学校 教諭 細川 凌平

1、はじめに

本校は札幌市南区にある私立学校。現在、全校生徒は731名で、「特進」「進学」「総合」「探究」の4コース制となっている。それぞれの教育課程で、学習内容・生徒の雰囲気は異なっており、コースごとの「色」が出て多様な学習の場となっている。

また、来年度からは単位制となり、それぞれのコースの良さを生かした「コンパス制度」を導入する。「人物多様性」を掲げる本校で、多様な生徒へ対応するために、生徒一人ひとりが「学び方」を選択できるようになる。

2、探究コースについて

2018年4月に開設した探究コースは、課題解決型学習 (PBL : プロジェクト ベース ラーニング) を重視した学習カリキュラムを展開しており、企業や大学との連携が多く、新しい価値を創造する人材を育成している。また大学進学を最終目標としておらず、「生きたいように生き続けるための力」の育成を目指している。

3、実践の背景

現在、生徒の多くはネットの情報に依存している現状がある。ネットの情報の信憑性が問題視されている現代では、一つの情報に依存するのではなく、正確な情報を選択する力が求められている。今回の実践を通して、「新聞」という選択を生徒に与えることで、ネットの情報への依存の脱却を図り、正確な情報を獲得する力を育成したい。

4、実践について

今回の実践は「海と日本PBL」の学習の中で行う。この学習は「SDGs14.海の豊かさを守ろう」をキーワードに、生徒が実際に日本の海を守るためのアクションプランを実施するものである。このアクションプランを実現するために生徒は、「新聞」で正しい情報を得て、現在日本が抱えている環境問題、他国の環境対策について学んでいく。

【対象生徒】

探究コース 1年生 (4期生) 33名

【全2回】

第1回目 12月9日 (2時間) 記事探し、他社との比較

第2回目 12月16日 (3時間) 記事紹介ポスターの作成



▲生徒が作成した記事紹介ポスターの一例

5、最後に

普段はネット (Chromebook) を用いて、情報の収集やレポートの作成を行っている生徒たちだが、今回の学習で異なる学習スタイルを経験することができた。

実際に手に触れて「経験」「表現」をすることで、ネットに依存しない選択肢も広げられたと感じる。また、協働学習の一環として新聞を活用したことで、新聞の読み方すら知らない生徒が、他の生徒に読み方を教えてもらう、また見つけた記事を共有して、既知の情報と結びつける力も同時に養わせることができた。

今回「生徒のネット情報への依存」について、「新聞」を用いてアプローチを行った。一つの方法ではなく、その場面ごとに適切な方法があり、それを選択する力がこれからの社会では必要とされてくることを念頭に授業を設計した。社会の準備期間である、この3年間においてネット以外の情報に触れさせる機会は必須であると考え、この実践はまだ導入に過ぎないが、「何のために」新聞を用いるのかをじっくりと考え、今後も実践を進めていきたい。

2021年度 NIE実践報告

金融学習とNIE 金融リテラシー

札幌新陽高等学校 教諭 高石 大道

1、実践の内容

- ・ 単元 (科目) について
- ・ 教科：学校設定科目「探究基礎II」：ゼミ形式授業 (Creative ゼミ)
- ・ 学年：進学コース 3年 (15名)
- ・ 単元：金融のこれからについて考えよう

2、ゼミの目標

- ①社会の中で生きて働く者として知識や技能を身につけること。
- ②不確実な状況 (VUCA) でも活用できるものとして知識や技能を身につけること。

3、ゼミの概要

金融・経済、SDGs・地方創生、国際理解分野の単元を通じて、科目やゼミの目標達成を目指す。全ての単元で以下7つの探究サイクルを取り入れ、都度多面的に考察し、内省や生徒・教員との対話

を重要視する。向上させたい資質能力を明確にし、成果物は年度当初に生徒に提示したループリックで評価していく。

4、実践の内容 【単元活動状況】全12時間

時間	学習内容や活動	活用ツール
1h	①目的の全体共有 ・金融リテラシーの向上（金融教育） ②金融・経済に関わるキーワード集から学びを深めたい項目をピックアップする。 ③リフレクションの提出	（Zoom） （Google Slide・Spread sheet） （道新データベース）
2h	①全体集約・共有された金融・経済に関心度の高いキーワードをもとに、グループまたは個人で、キーワードを含む探究テーマの設定と、考察の方向性について検討する。 ②リフレクションの提出	（Zoom）（Google Slide） （道新データベース）
3-6h	①各種webサイトでの調べ学習を行い、考察を混ぜた解説スライドでYoutube動画を作成する。	（Zoom）（Google Slide） （道新データベース）
7h	①作成した動画の講評会 ②リフレクションの提出	（Zoom）
8-9h	①インプット学習 作成した動画や、調べたテーマに関連する新聞記事（紙面・Online）を更に調べ、読み込む。 ②意見交換 Youtube作成時の気づきや考察からの変化（新たな気づきの獲得・考察を深めるため）についての意見交換を行う。	（対面/オンライン） （道新データベース）
10h	①レポート作成（道新データベース活用） 新聞記事からの気づき、考察を含むレポートの作成と提出（リフレクションを含む）	（対面/オンライン） （道新データベース）
11h	①オンラインセミナー ・東京証券取引所 金融リテラシーサポート部より 内容：株・証券・価格変動・上場会社について ・アクサ生命所属 フィナンシャルプランアドバイザーより 内容：人生100年時代 大人になるためにひつようなこと ②リフレクションの提出	（Zoom）（オフライン）

12h	①新聞記者さんへのインタビュー 探究学習の手段として活用してきた新聞について、参考にした記事を実際に作成した記者のお話を伺い、記事の本質や背景をより詳しく理解する。その後、最終レポートの作成と提出（新聞記事からの気付き、考察を含む）を行う。 ②リフレクションの提出	（オフライン）
-----	---	---------

5、成果と課題

（１）成果

【生徒が動画作成に向けて設定したテーマの一例】（2h）

テーマ	
もう働かなくても良くなる？ベーシックインカムについて	将来どのカードつかったらいい？カードの種類と仕組み
お金の借り方の選択肢とは？老後のお金のため方について	税金の回り方とは？
酪農の経済と牛乳券の発行について	株式会社について！どんな会社設立がお勧め？
コロナとスポーツ経済	金利の変化や経済循環が私たちの暮らしに及ぼす影響とは？
海外旅行はいついけばお得？	仮想通貨の流通推移について

【生徒が作成した成果物（Youtube）の一例】（3-6h制作、7h講評会）



6、課題

本校における例年のNIE実践授業では、授業者が活用する新聞記事をあらかじめ特定して、その内容について考察を深める形式で実施した。今年度、道新データベースを活用させていただけることになったことから、「新しい学び」に記載される主体的で深い学びの実現を目指し、記事を選定せず生徒自身が記事を選定する学習形態とした。

生徒が記事選定を行う上で、主に下記5つの場面で苦慮がみられた。これらの場面そのものも生徒にとって学びであるが、その時にどのように授業者が助言していくかで主体性の向上に差が生じると実感した。今後も、教科や単元の目的に応じて紙媒体としての新聞と、データとしてのニュースの強みを切り分けて活用していきたい。

多面的に考える力を磨く

北海道函館西高等学校 教諭 小牧 陽二郎

1. はじめに

本校は明治37年開校、今年で創立117年を迎える生徒数709名の単位制普通科高校である。2年前に同じ函館市内にある稜北高校と統合し、制服や校歌等を一新した。今年度が完成年度となり、1年次6間口、3年次計18クラスとなる市内最大規模の学校となった。

校舎は函館港を一望できる坂の上にあり、周辺には旧イギリス領事館、公会堂、ハリストス正教会をはじめ観光名所も多い。NIEの実践は6年目である。

1) 進路状況

昨年度卒業生約120名のうち5割が大学・短大、2割が高等看護学校等に進学するほか、公務員・民間就職希望者も1割程度おり、進路多様校といえる。現3年次生は入学当初より探究活動を軸にした進路実現を目指しており、今年度の進路実績によってその成果が問われることになる。この文章を書いている現在（22年1月）、総合型選抜、公募型推薦を活用した大学入試で結果を出しているといえる。

2) 生徒の様子

北海道庁立高等女学校を前身としていることもあり、全校生徒のうち約6割が女子生徒である。その影響か、放送局、書道部、文芸部、美術部など文化系の部活動が活発である。総じてまじめで落ち着いた生徒たちといえる。

3) NIE参加について

もともとは国語科として小論文対策の一助になればという思いからであった。社会について知る一番の方法は、身近な「大人」から話を聞くことであり、なにより新聞をはじめニュースに触れることである。日常的に新聞を読む生徒が減っている中、授業として取り組むことで少しでも社会的な出来事に興味を持ってもらいたいと考えた。また、記事を読むことにより速読の訓練、読解力・語彙力・情報リテラシーの向上、プレゼンテーション能力の育成にもつなげたいと考えていた。

昨年度から引き続いているコロナ禍により、グループによる討論やスピーチ活動などは自粛せざるを得なかった。残念ながら、今年度は実践できていない。

2. 実践報告

2年次（6クラス）の教室内に配布・設置。購読計画は以下のとおり。

4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
					6紙	6紙	6紙	6紙

当初の予定

- 1) 9月より教室に配置。
- 2) 前期期末考査（9月1日～3日）終了後から現代文の授業冒頭を使い、教員による新聞記事紹介。
- 3) 見学旅行（10月26日～30日）終了後からスピーチおよび新聞記事を活用した小論文作成。

実際の動き

- ・9月より教室に配置はしたが、緊急事態宣言発出により見学旅行が延期決定。
- ・見学旅行の実施の可否、また延期の場合の旅行日の設定時期により授業内容・進度が不透明に。
- ・見学旅行を12月に実施、終了後に小論文指導、新聞は利用せず3時間程度で終了。

※例年同様、職員室前の長机に各クラス分のスペースを取り、担当生徒が毎日取りに来るようにした。



3. 活動を振り返って

今年度はN I Eの活動として、新聞を使った授業に取り組むことができなかった。そこで、この機会に5年間の活動を振り返ってみたい。

1) 1年目(2016年) 現代文B(2学年) 新聞記事についてのスピーチ実施。



スピーチの進め方は以下の通り。

- ・授業冒頭の1分間、教室の前に出て行く。
- ・選んだ記事のタイトル、内容、選定理由、最後に、記事に対する意見を述べる。

当初は新聞そのものを手に持ちながら、読み上げるものがほとんど。だが、スピーチ活動自体が生徒の興味を引いたとみえて、質疑応答はそれなりに活発で、クラスによっては盛り上がる時間であったように思う。

2) 2年目(2017年) 現代文B(3学年) スピーチ、グループ討議、天声人語を使った課題など。



スピーチの進め方の変更点として、時間を2分間とした。N I E 2年目に入り、生徒たちも慣れてきた。授業前に、スピーチとして30分ほいと申し出る者や、自作のボードを使って説明するなど工夫を凝らす者が現れるようになった。

また、読売新聞社よりN I E投書編への参加の申し出をいただき、一部クラスで取り組んだ。記事内容に対し正反対の意見をぶつけ合うことで、価値観の多様さについて考えることができた。

3) 3年目(2018年) 国語総合(1学年) スピーチ、天声人語を使った課題など。



前年度までとは違い、スピーチ実施時期の2か月前に「今日のニュース」を3～5人に発表させた。新聞および人前での発表に慣れさせるためである。自分が気になった、もしくは誰かに教えたいニュースをただ言うだけであり、ハードルを下げることで取り組みやすくした。

その後、例年通りのスピーチ活動を実践した。中学校でもプレゼンに取り組んでいるとみえて、原稿を見ず、顔を上げて発表できる生徒が増えたように感じた。

4) 4年目(2019年) 国語総合(1学年)スピーチ、天声人語を使った課題など。



スピーチ自体はややマンネリ化してきた。教員側にも慣れが出てきたこともある。生徒の取り組みにも温度差が出てきたが、生徒への事前指導やちょっとした声かけで改善できたのではないだろうか。

朝日新聞の天声人語は、おもに長期休業中の課題として書写させた。また、この年から探究活動の一環として「みんなで読もう新聞コンクール」にも参加するようになった。

5) 5年目(2020年) 国語総合(1学年)スピーチ、「みんなで読もう新聞コンクール」参加。



写真は、前年度から取り組んでいる「みんなで読もう新聞コンクール」の様子である。「総合的な探究の時間」を使い、前期の早い段階で思考ツールの使い方とともに新聞の見方についても取り扱った。

新聞を読むのが初めての生徒も多く、見出しやリード文、コラムなどの名称、記事の種類を説明しておくことの必要性を感じた。

実際に新聞を読み始めると、興味ある記事をめぐって生徒たちはけっこう盛り上がっていた。

4. 最後に

NIE実践指定校も今年度で6年目となり、実践内容もややマンネリ化してきたところである。これからいったんリセットするのも必要ではないかと感じている。



← 探究活動でのグループ発表の様子 →



現在は、NIEを通じて今まで培ってきた、社会への興味関心を持たせる取り組みを探究活動にもつなげて、さらに発展させていきたいと考えているところである。

2021年度 NIE 実践報告

新聞に親しみ、活用する

市立札幌みなみの杜高等支援学校 教諭 北山 亮 他2学年担当教諭

1 はじめに（学校紹介）

本校は、「働く」ことを志す生徒を応援する学校として、平成29年4月に開校し、今年度、開校5年目を迎えた。

開校にあたり、北海道内では初めてとなる「普通科職業コース制」を導入し、中でも特徴的であるのは、「働く力」「生き抜く力」を育てる点で、学校併設のカフェである「杜カフェ」を生徒が運営することとした。3部門7職業コース（カフェ運営部門：キッチンコース、センターコース、サポートコース。生産部門：ファームコース、工房コース。外部サービス部門：クリーンアップコース、エコサイクルコース）で構成され、生徒は実際に授業の中で職業実習に励んでいる。

1年生での7つ全ての職業コースの実習を経験し、生徒自身の希望や適性などを踏まえ、2年生以降は所属するコースで社会人としてのスキル等を身に付けて希望する進路実現を目指している。

また、本校では「みなみの杜協働育成システム」を導入し、「社会に開かれた教育課程」の理念を踏まえ、校内外の学びに、企業・事業所等の外部の専門家や家庭・地域の皆様の御協力をいただきながら、協働して一人一人の生徒の自立を支援していくことを目指している。

2 実践報告

今年度NIEは2学年7学級54名で実施した。購読新聞は「北海道新聞」、「毎日小学生新聞」、「朝日小学生新聞」、「日本経済新聞」、「読売中高生新聞」、「産経新聞」の6紙である。

毎朝各学級に1部ずつ新聞を配付し、新聞を手に取り自由に読める環境とした。朝のショートホームルームや教科学習、職業実習でも新聞を活用することで、新聞に親しみ、身近に感じられるような取り組みを行った。

①朝のショートホームルームでの活用

短時間ではあったが、その日の新聞記事を紹介した。教師が時事的な話題を提供し、興味をもった生徒は、後で記事を熟読する場面がみられた。

②回し読み新聞（LHR の時間に 2 回実施）

1 回目は学年全体で 8 つのテーマを設定し（札幌地域のニュース、国際的なニュース、経済、生活に関すること、活躍している学生ニュース、印象的な写真、印象的な広告、印象的な見出し）、各テーマに合致した内容で生徒たちが興味をもった記事を集めて模造紙に貼り合わせ廊下に掲示した。多くの情報に触れながらテーマにあった記事を選別し、コメントを書き入れていく活動を通じて、新聞に親しみがもてるようにした。



2 回目は学級別に回し読み新聞を作成した。作成したものを廊下に掲示し、皆で読み合い、新聞記事やそれに対するコメントが良いと思うものに「いいね！」シールを貼るコンテスト形式とした。



各学級に配付された新聞の中から 1 人ずつ興味を持った記事を自由に選び、なぜその記事を選んだのか、そこから何を感じどのようなことを学んだかなどを話し合いながら取り組んだ。新聞を自由に切り取って要点にマーカーを引き、印象的な見出しやイラストを付け加え、模造紙にコメントを書き込んでいく過程で完成度の高い成果物を目指した。この活動では、より良いレイアウトになるように仲間と相談したり、選んだ記事の内容に踏み込んで話したりする様子も見られるなど、1 つのものを皆で作り上げる協同的活動中で仲間との対話を引き出す活動となったことも大きかった。また、成果物を鑑賞することにより、多くの記事に触れ、コメントを読むことで物事を多面的に考える機会となった。



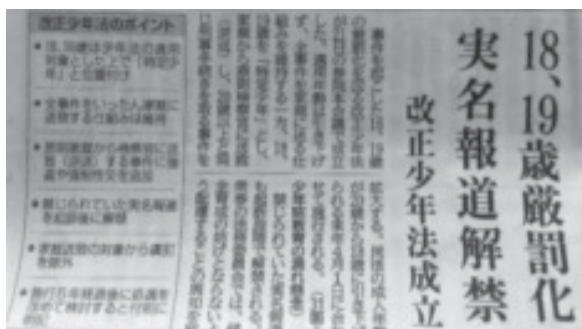


新聞記事の要点にマーカーを
引き、コメントを記入。好評
のものには「いいね！！」シ
ールが貼られた

③教科（社会）での活用

社会では、世界遺産の認定等の記事を紹介することの他に、学習単位「国や社会のきまり」で憲法や法律についての学習を行い、新聞を取り扱った。日本国憲法の3大原則について触れ、人権について考察する学習で新聞記事を活用した。

少年法の改正に関しては、実名報道が可能になったことについてその是非を検討し、夫婦別姓に関しては、夫婦間やその子どもの姓の選択に関する問題点について討論しながら人権に対する意識向上をねらった。問題提起としての新聞記事の活用で、それぞれ否定的な意見、肯定的な意見とその理由を発表し合った。1つの記事から考え方を広げて人権への意識を高め、意見を共有することで多様な考えを知る学習となった。



北海道新聞 5月22日



北海道新聞 6月24日

④コース実習での活用

本校は冒頭でも述べたように「普通科職業コース制」を導入し、「働く力を育てる学び」としてカフェ運営を中心に7つの職業コースが関連し、協力しながら、お客様のための様々なサービスを展開している。

その中でエコサイクルコースでは、各コースに関連する新聞記事を集めてファイリングした。SDG s の取組や各コース運営の参考と



なるような活動が紹介されている新聞記事を集め、情報提供を行った。その際は、新聞を読んで、どのような点がコース運営に役立てるか等の意見やアドバイスを書き添えた。



新聞の有効活用として、読み終わった新聞を使ったエコバックづくりや小物入れづくりを行った。地域の方々と一緒に行うイベントとして取組んだことにより、新聞を通して地域の方々との繋がりをもつきっかけとなった。また、エコバックは学校併設の杜カフェで活用しており、パンを購入していただいたお客様への買い物袋として好評を得ている。

3 おわりに一成果と課題

今年度の成果として、新聞を購読することにより、幅広い情報に触れることができた点があげられる。普段、あまり新聞に接することがない生徒に新聞を読む機会を提供することができた。特に、購読の時期が東京オリンピックと重なったことで、オリンピックについて多く知ることができた。

回し読み新聞では、新聞造りの過程で仲間と意見を出しながら協力して物事を進めていくことで、協力して進める機会を提供できたことに意義があった。他クラスの新聞を鑑賞することにより、記事のレイアウトを比較したり、他者のコメントに触れたりすることで多様な考え方を知る気づきがあった。

また、投書への興味を示し、北海道新聞の「ぶんぶんタイム」に投稿する生徒もいた。若い世代の1人として自分の思いや自分の考えを人々に発信することができた。本校では2名が掲載され、それを読んだ生徒からも賞賛の声が聞かれた。

課題としては、本校の時間割の都合上、授業の間の準備時間が5分間であり、昼休みも10分間の設定であるために。日常的に落ち着いて新聞を読む時間が取れないことがあげられる。また、回し読み新聞をはじめとして、教科以外での活動の場合には教育課程上でどの授業で扱うかを明確にしておく必要があった。

来年度も NIE を継続するにあたり、学習活動の中に新聞を取り入れていくことで多くの学びを引き出し、生徒たちの学びがより豊かになるような取り組みをしていきたい。

新聞に慣れ親しむための初めの一步

北海道旭川聾学校 教諭 宮町 悦信

1. はじめに

本校は、幼稚部、小学部、中学部が併設された聴覚特別支援学校（以下、聾学校）である。本校の校区は、道北のほぼ全域と道東の一部で、北海道の面積の約4分の1を占め、全国一広い校区を持つ聾学校である。

聴覚障がいを持つ幼児児童生徒は22名在籍しており、聴覚に配慮しつつ、多様なコミュニケーション方法を用いた指導を通して、聴覚に障がいのある子ども



校舎外観

の自立と社会参加に必要な資質と能力を育むよう努めている。また、北海道聴覚障害乳幼児療育事業として、乳幼児療育機関の役割を担っているため、0歳～3歳の乳幼児も親子で通室しており、一人一人の乳幼児の持つ可能性を引き出し、健やかな心身の発達を支えるための支援を行っている。

今年度本校は、道内の聾学校としては初めて、NIE実践校の認定を受けた。取組期間に北海道新聞、読売新聞、日本経済新聞、北海道小学生新聞（毎日新聞社）、朝日ウイークリーの5紙を購読し、9月～12月までのおよそ4か月間を「新聞月間」と位置付けてNIEに取り組んできた。以下、取組の概要を報告する。

2. 実践内容

（1）新聞閲覧コーナーの設置

本校ではこれまでは、図書室内に新聞閲覧台を設置していたが、NIEへの取組を機に、専用の書棚を廊下に設置した。これにより、教室移動の途中などの際に児童生徒の目に必ず留まり、紙面を気軽に手に取ることができるようになった。

また、購読した5紙のみならず、「週刊まなぶん（北海道新聞）」をはじめ、旭川近郊の最新ニュースやグルメ、イベントなどタウン情報が掲載されている「ななかまど（北海道新聞）」や「ライナー（ライナーネットワーク）」、旭川市の広報誌である「あさひばし（旭川市）」も一緒に閲覧できるようにした。様々な媒体が世の中にあることを知ると同時に、多様な実態の児童生徒が、自分に合った媒体を選択し、手に取ることができるような環境整備や情報提供を心掛けた。



新聞閲覧コーナー 1（廊下）



新聞閲覧コーナー 2（図書室）

（２）児童会活動新聞の作成（小学部）

児童会の活動を知らせることを目的に、４学年の国語科で新聞作りに取り組んだ。作成に入る前に新聞を読み、言葉の使い方や記事の書き方について学習した。また、新聞には必ず題字がついていたり、記事の冒頭に 5W1H が記されていたりするなど、１つの記事だけでなく、複数の記事を見比べることで、これらの気付きにつなげることができた。また、見出しの書き方やレイアウトの違い、文字の大きさ、写真や図の効果的な使い方など、読み手にとっての読みやすさや目の留まりやすさなどの工夫について考え、それぞれ良いと思った箇所を取り入れるなど、効果的な教材の１つとして、新聞を学習に取り入れることができた。



児童会新聞

（３）各社記事の読み比べ（小学部）

本校では、今年度より道外の聾学校３校とリモートで交流授業を行う「ペンタゴンプロジェクト」に取り組んでいる。初めて４校がつながる日に、各校に新聞社の取材が入ることとなった。それぞれの地域の新聞で取り上げられた記事を共有し、見出しや内容の違いなどにも目を向けて、表現の工夫について気付いたことを話し合うことができた。



各社記事の読み比べ



ペンタゴンプロジェクト

同じタイミングで同じ時間、同じように取材を受けたにも関わらず、内容に相違点があることに驚く一方で、リード文の書き方など共通点が多いことにも気づくことができた。

(4) 記事の要約と発表活動 (中学部)

本校では、朝の会後に毎日15分、自立活動の時間を設定している。その中で、年間を通して、新聞記事を要約する学習に取り組んできた。

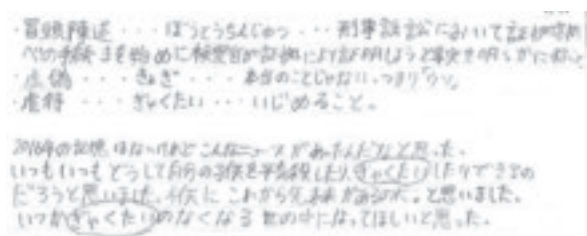
- ①生徒の関心がありそうな記事を教師が選定する
- ②生徒は内容を読解し、要約する
- ③生徒は当該記事に対する自分の考えをまとめる
- ④クラスメイトに対して、要約した内容とともに、自分の意見を発表する

この一連の活動を基本的な流れとして、継続して取り組んできた。これまで、自分の意見をまとめ、クラス内で発表することを苦手としていた生徒も、自分の意見をまとめた上で発表に臨むことで、考えを整理することができたり、発表する際に相手に正確に伝わるような言葉遣いや表現方法を工夫したりすることにつながった。

この活動を継続する中で、聞き慣れない用語を目にした際は、辞書を開いて語句の意味を調べたり、漢字の練習をしたりと、次第に自主的に学習に取り組む様子が見られるようになった。また、生徒がまとめた意見に対して、教師から質問や反対意見をノートにコメントして議論するなど、より有意義な学習活動となるよう工夫している。



学習の様子



意味調べをした結果



スクラップノートの一部 (北海道新聞 2021/5/19)

（５）掲示物の工夫やワークシートの活用（中学部）

本校の今年度の重点課題の一つとして位置付けている、「SDGs（エスディーズ）」に関する学習を展開する中で、掲示物の作成に力を入れると共に、新聞記事も活用した。SDGsに関わる記事で生徒に関心を持ってほしいものがあつた際、ポイントとなる部分にマーカーを引いた上で、併せて掲示するようにした。現在、生徒が学んでいる学習内容が、現代社会においても注目を浴びている事柄であることを生徒自身が自覚すること、そして社会で取り組まれている様々なことがSDGsに関係していることを知ることによって、自分が社会に果たす役割について関心が高まり、結果的に生徒にとっての主体的な学びにつながると考えている。

また、聾学校の生徒に身近な問題として、手話や情報保障、合理的配慮に関わる話題、及び生徒が関心を寄せている話題（ここでは地震に関わる記事）についてはスクラップし、教室の一角に掲示するようにしている。関心の高い記事を蓄積することで、過去の記事をいつでも見返すことができるようにしている他、ワークシートを活用して要約したり、自分の考えをまとめたりする活動も行った。



SDGsに関わる掲示



蓄積した記事の掲示

3. おわりに

（１）成果と課題

- 本校では新聞を購読している家庭が半数以下である現状で、新聞が児童生徒の目に付き、気軽に手に取ることができる環境を整備することができた。
- 取り上げる話題は身近なことが中心ではあるが、新聞記事を教材として活用することで、社会との接点を持つことを児童生徒が実感することができた。
- ▲新聞を活用した実践の展開が、一部の教員や限定された学習にとどまっており、学校全体の取組になっていない。

（２）次年度に向けて

- ・特定の学習だけではなく、幅広く教科等の指導の中で新聞を活用した実践を積み重ねていきたい。
- ・NIEの実践報告書の実践事例や校内の取組を積極的に周知・共有するなどして、学校全体で新聞を活用した学習を進めていけるよう推進していきたい。

編集を終えて

新学習指導要領が小学校に引き続き、中学校でも本格実施された2021年度も、各学校の児童生徒の実態を捉え、新学習指導要領のねらいを具現化する、創意工夫されたNIE実践が全道から届きました。コロナの感染拡大に収束の糸口が見えない状況下で、1年間の新聞を活用した教育実践を実践報告書の原稿としてまとめて頂いた、NIE実践指定校教職員の皆様に敬意を表し、感謝申し上げます。

2021年度は、8月にNIE全国大会札幌大会がオンラインで実施されました。研究の視点を設定し、ねらいを明確にして、求める児童生徒の姿に向かう具体的な手立てを授業研究を通して検証致しました。また、9月からは、地区セミナーを、日高・釧路・上川・檜山・十勝の5地区で開催しました。全国大会で培ったオンラインを活用した研修様式を取り入れることで、全道の先生方が自由に各地区のセミナーに参加できるようになりました。また、教職課程の大学生が授業の一環として参加したり、教職員の校内研修として参加したりする新しい形も生まれました。さらに、各学校では、ICTの学校への導入が急速に進みました。全道の小中学校に児童生徒一人1台のICT末端が整備され、パソコンやタブレットの機能や新聞データベース等を有効に活用した児童生徒の学習経験に合わせた授業実践が行われるようになりました。

2021年度NIE実践報告書では、ICTを活用したり、課題解決型の学習を経験したりする中で「児童生徒自ら課題を見付け、友だちと交流しながら課題解決に当たり、自分の言葉で発表する」児童生徒の主体的な学びの姿がたくさん報告されています。さらに、毎日の継続的で地道な新聞を活用した取組が、児童生徒の思考力・判断力・表現力を伸ばしていくことにつながっていることも分かります。

教育課程に位置付けた、計画的なNIE実践こそが求める児童生徒の姿に結びつきます。各校では、「主体的・対話的で深い学び」の実現のため、是非、本編が有効活用され皆様方の学校での実践に活かされることを願っております。

北海道 NIE 推進協議会
NIE コーディネーター
上村 尚生

2021年度 NIE実践報告書

2022年5月発行

北海道NIE推進協議会 編

事務局 北海道新聞社NIE推進センター
〒060-8711 札幌市中央区大通西3丁目6
TEL 011-210-5802 FAX 011-210-5826
e-mail nie@hokkaido-np.co.jp